

# 滿洲文化記

淺見淵著



株式會社國民畫報社版

滿洲文化記  
目次

滿洲紀行集

寺兒溝……………三  
 國境の町……………六  
 熱河承德……………六  
 哈爾濱……………四  
 北京の窓……………四  
 滿洲點描……………四  
 同善堂……………五  
 彌榮……………六  
 巴林……………六  
 旅順の記……………四

滿洲見聞錄

大連日記……………七  
 松花江紀行……………五  
 蒙古の子供と日本……………九  
 地平線……………九  
 無稽な空想……………一三  
 コーカサス料理……………一三  
 滿洲風物抄……………一三  
 蟲籠……………一七  
 兎馬……………一九

鮭	四
花々	一三
滿洲の魚	一四
滿支見聞記	一六
滿洲第二世について	一七
滿洲と大東亞戦争	一八
北支一瞥	一四一
滿支斷片	
哈爾濱の鋪道	一四二
滿洲の冬について	一四七
紫禁城の置時計	一五〇
クリスチアの學校	一五三

滿洲の狼	一五五
蒙古の雲雀	一六二
<b>滿洲文學雜記</b>	

滿人作家會見記	一六四
滿洲文學について	一八六
大陸文學について	一九五
續大陸文學について	二〇一
滿洲文學管見	二一一
在滿の作家たち	二二〇
日滿文藝の交流	二二四

滿洲の文學・文化運動	三〇四
滿洲の新興文學	三〇〇
「第八號轉轍器」について	三〇七
「復活祭」について	三〇五
「地平線を行く」について	三〇六
滿洲文學の新風	三〇七
「成吉思汗」鑑賞	三〇八
滿洲文學雜記	
大陸の作家	三〇九
滿洲藝文聯盟について	三〇九
滿人作家の横顔	三〇九

### 滿洲文學通信

大陸と悠久感	
北村謙次郎君へ	三〇七
北村謙次郎君から	三〇二
蒙古民族とビルマ人	
小田嶽夫君へ	三〇九
小田嶽夫君から	三〇四

## 序

八

僕は滿鐵の招聘に依つて、昭和十五年七月と同十七年二月と、二回、滿洲に足跡を印した。一回目は一人旅だったが、二回目には坪田義治氏と同行し、また歸途一人で北京まで廻つた。「滿洲文化記」に收めた文章はいづれもこの二回の旅の所産である。

隨つて、「滿洲文化記」といふ仰々しい書名を付けたものの、結局するに單なる一介の旅行者の見聞乃至觀察に過ぎなく、その點、大方の叱正を仰ぐことが多々あることと思ふ。しかも敢て上梓する氣になつたのは、旅行者は旅行者としてなりの激しい好奇心や強い印象があると信じたからだ。

僕の生涯に取つてはこの二回の滿洲の旅は大きな旅で、物の見方が廣く且つ複雑になつたに止まらず、じつに國民としての自覺を際立つて意識された點、誠に有難いことだと思つてゐる。

また、人の世の温かさといふものを沁々感じたのも、この二回の旅に於てであつた。いづれも在滿の文學人の友人たちから享けたものである。僕はその爲に文學人として、生きる喜びを一そう痛感した。

一方、周作人氏はさいきん支那人について、「彼は生存を求める。彼の生存の道德は、人を損ふことによつて己れを利しようとは思はぬにしても、聖人の如く己れを損してまで人を利するといふやうな眞似け出来るものでない。他の宗教的國民はよく天國近づけりと夢想して、永生を求めんが爲に火のなか水の中にも飛び込むのであるが、中國人はさういふ信心を持たぬ。彼は神の爲とか道の爲とかで犠牲となることを好まぬ」(「中國の思想問題」と、述懐を洩らしてゐる。かういつた特異な現實主義は同じく滿人にも在る。その一端に觸れて、いろいろと痛切に民族の問題を考へさせられたのも滿洲の旅に於てであつた。

以上、二回の大陸の旅は何彼と僕に收穫を齎したが、その中でも一ばん大きな喜びは、何といつても悠久なものに觸れたことであつた。現實的な卑小な感情を拭ひ取つて呉れる大陸の悠久感である。僕はできるだけ長く僕の味はつたこの悠久感をこころの中に持ちこたへ、この無

## 満人作家會見記

新京に着いた時、出迎へて呉れた人たちの中に篤知の檀一雄君がゐる。これは初対面の詩人の逸見翁吉君と共に、いきなり僕を自動車に乗せて新京を案内して呉れた。ときどき酒場の前で自動車を止めて麥酒を飲ませて呉れたり、支那料理屋で白酒を呷らせて呉れたりして、三時間ほどで新京で見物すべきものは殆ど全部見せて呉れた。その揚句、

「新京で特に見たいものとか、逢ひたい人とかいつたものはありませんか」と、檀君は親切に僕に尋ねて呉れた。

「見物のはうはもうこれで結構だけれど、じつは満人作家に逢つてみたいのだが、さういふ手筈がありますか」と、僕は言つた。

一〇  
私な悠久感に僕自身を任せ切つて、これからの文學人としての仕事に専念したいものと念願してゐる。

最後に、この「滿洲文化記」の上梓を見るに至つたのは、全く長友日向伸夫君の盡力による賜物である。同君には、二回の滿洲の旅についても言葉に盡くせぬ世話に與かつた。記して深謝の意を表する。發行元主人に對しても厚意を謝する。それから、文學通信の中に無断で文章を拜借した、小田嶽夫、北村謙次郎、の兩君に、その失禮をお詫びして置く。

昭和十八年五月

著者しるす

# 滿洲紀行集



滿洲文學襍記

「じゃあ、明日、一緒に満日文化協会の杉村さんを訪ねてみませう。杉村さんに頼んだら送らせて呉れますよ」禮君は直ぐ承知して呉れた。

その翌日の午後、禮君に連れられて大同大橋の或るビルディングの二階にある満日文化協会に主事の杉村勇造氏を訪ねると、すぐそこに働いてゐる満日作家の爵青に引合はされた。禮君は既に爵青を知つてゐるらしく、何気ない調子で僕の意向を傳へて呉れた。すると、爵青は、

「明日の夕方茲へみんな集めて置ませう」さう日本語で言つて、快く僕の乞ひを容れて呉れた。

「爵青さんは二十四の若さだが却々の論客ですよ。訊きたいことがあつたら何でも質問なさい」

北京に長くゐたといふ、温和な長者めいた人柄の杉村さんは、僕を顧みて言つた。

爵青は、満日作家選集「原野」の中の「哈爾濱」の作者である。この作品は餘りいい作品ではないが、ちやうど僕が満洲に出掛けた頃、新京から出てゐる「満洲行政」といふ雜誌に、

爵青が矢張り大内隆雄の譯で「廢墟之畫」といふ作品を発表してゐて、禮君はじめ誰彼がこの作品を推賞してゐた。それで、僕も後で哈爾濱の旅舎で舊友の竹内正一から雜誌を借りて讀んだが、評判通りいい作品で感心した。生活方向とか、人生的意義とか、それから民族意識とかいつたものが、はつきり掴めぬ満人の近代青年の内面的苦悶が、哈爾濱の廢墟面を背景にして心理的に描かれてゐるのだが、繊細で鋭く、しかも近代的情感が隅々まで溢れてゐるのである。僕が今まで讀んだ限りの満日作家の作品の中では、一ばん近代的な作品だつた。

爵青は後で逢つた古丁ほど達者ではないが、つまり、テニヲハが出鱈目なのだが、相當流暢に日本語を話した。僕は別に改めて話題といつたものは用意して來なかつたので、ふと思ひ付いた儘、

「貴方たち、いまだんなものを書きたいと思つてゐますか」と、爵青に尋ねてみた。

「さうね」爵青はちよつと考へるやうにして答へた。「いま暫く自分の問題ね、自分の問題別にしといへば、民意を反映したもの、民衆が切實に思つてゐるもの、そんな氣なもの取上げてね、みんな書かうと思つてゐるね」

「例へば、どんなに、餘河の言葉が抽象的なので具體的や例を求めた。  
「いま、滿人の百姓が困つてゐる。その百姓の困つてゐる原因突きとめてね、書くといつた、さういふ方向行きたい思つてゐるね」

しかし、それは餘河自身、意見ではなさうなかつた。今のところ滿人作家の指導者は古丁だが、これはその古丁たちの意見らしかつた。

僕たちは餘河の取計ひで明日改めて益で滿人作家たちと逢ふことになつたので、それから暫く、村氏を中心にして雑誌を取交はすと辭去したが、餘河の前記の言葉から感じたことがあつたので、別れる時、僕は餘河にかう言つた。

「いま滿人作家は周りに、省から非常にチヤホヤされてゐるけれども、これは珍しいあひだだけで、屹度近い將來に反動がくると思ひますよ。その時が來ても落膽せぬ用意をして置くことですね」

餘河はすると親愛の表情を漂はせて、

「僕たちもさう思つてゐる。その時、覚悟いままらしてゐます」と言つた。

その夜、東京在住の僕の友人たちが、中央飯店で僕の内輪の歓迎會をやつて呉れた。と、その席上へ、思ひ掛けたくも「原野」や「平沙」の作者である古丁が現はれた。滿洲文話會の世話役をしてゐる、むかし早稲田で亡くなつた神部孝にフランス語を習つたといふ、そのために神部の女である侯に親愛を寄せてゐて呉れ、吉野治夫が、わざわざ古丁を連れて來て呉れたのである。

古丁は卅二歳ださうだが、貰つた名刺にも總務廳事務官と肩書が付いてゐたが、さいきん滿洲國の事務官に昇進し、日本語の試験も一等の首席でパスしたとのことであつた。(日本語の試験は一等から三等までの段階があり、その段階に応じてそれぞれ俸給外の手當が違ふのださうである) 作家としての實力も現在では滿人作家のうちで一ばんだが、古丁はさういふ地位を占めてゐる秀才であることも、おのづと彼を滿人作家の指導者の位置に追ひやつてゐるらしかつた。したがつて、古丁の日本語は流暢なものであつた。また、その消化力は、夏目漱石の「心」の滿語譯があるのを見ても分るのである。

食事が済んでから、煙草を吹かし、茶を飲みながら僕はちよつと古丁と話したが、小田綠夫君

の譯した「同行者」「第三代」の作者の蕭軍が滿洲出身だったことを憶ひ出し、また蕭軍は僕の好きな作家なので、蕭軍の作品を讀んでゐるかどうかを尋ねると、古丁は全部讀んでゐるよと言つて、蕭軍は英吉利のペン、クラブの會員になり、いま倫敦に居るといふ消息まで告げた。それから、古丁は、

「蕭軍は本當の作家ですよ。彼は飯を食へない時から作家で通しましたよ」と、激しい口調で言つた。「僕などのやうに決して二重生活をしなかつた。作家たる者は、食へても食へなくとも蕭軍の歩んだ道を行くのが本當ですよ」

「魯迅のものは」蕭軍の話から當然讀んでゐるものと思つて、續けて僕は尋ねた。案の條、古丁は魯迅のものも全部讀んでゐた。そして、

「僕たちが一ばん尊敬してゐるのは魯迅です」と、熱情を籠めて言つた。

その次に、古丁の日本語の達者さから思ひ付いて、また中央公論社から出版される（その時はまだ出版されてゐなかつた）「平沙」は大内隆雄の翻譯したものに古丁が手を加へたものであるといふことを聞いてゐたので、大内隆雄の翻譯をどう思ふかと、僕は質問した。古丁はち

よつと困つたやうな表情をしたが、一つの文章をいくつにも短く切つて譯してゐるのが氣になつること、各作家の文章の持ち味が生かされないで、どの作家の文章も同じになることが缺點だと答へた。

「しかし、誰の翻譯を見ても、難かしいところよりも、一ばん常識的な、われわれに取つては日常茶飯時の分りきつたことを反つて誤譯してますよ」古丁は笑ひながら言つた。

それから、僕は、

「古丁さんは日本語で小説書く氣はありませんか」と尋ねてみた。

「書いて書けないことはないが、日本語ではどうしても滿文の持つてゐるニュウアンスができませんね」古丁は表情を吃つとさせた。「感想隨筆ならば場合によつて書かないこともありませんが、小説だけは絶対に日本語では書かないつもりです」

その夜、古丁とは大體そんな風な話をして別れてしまつた。尤も、これ以上、話するやうなことも僕には見付からなかつたのである。

僕は滿人作家選集の「原野」その他を讀んでゐたので、一應滿人作家の鳥瞰圖は出來て居

の譯した「同行者」「第三代」の作者の蕭軍が滿洲出身だつたことを憶ひ出し、また蕭軍は僕の好きな作家なので、蕭軍の作品を読んでゐるかどうかを尋ねると、古丁は全部読んでゐる。言つて、蕭軍は英吉利のペン、クラブの會員になり、いま倫敦に居るといふ消息まで告げた。それから、古丁は、

「蕭軍は本當の作家ですよ。彼は飯が食へない時から作家で通しましたよ」と、激しい口調で言つた。「僕などのやうに決して二重生活をしなかつた、作家たる者は、食へても食へなくても蕭軍の歩んだ道を行くのが本當ですよ」

「魯迅のものは」蕭軍の話から當然讀んでゐるものと思つて、續けて僕は尋ねた。案の條、古丁は魯迅のものも全部讀んでゐた。そして、

「僕たちが一ばん尊敬してゐるのは魯迅です」と、熱情を籠めて言つた。

その次に、古丁の日本語の達者さから思ひ付いて、また中央公論社から出版される（その時はまだ出版されてゐなかつた）「平沙」は大内隆雄の翻譯したものに古丁が手を加へたものであるといふことを聞いてゐたので、大内隆雄の翻譯をどう思ふかと、僕は質問した。古丁はち

よつと困つたやうな表情をしたが、一つの文章をいくつにも短く切つて譯してゐるのが氣になつること、各作家の文章の持ち味が生かされないで、どの作家の文章も同じになることが缺點だと答へた。

「しかし、誰の翻譯を見ても、難かしいところよりも、一ばん常識的な、われわれに取つては日常茶飯時の分りきつたことを反つて誤譯してますよ」古丁は笑ひながら言つた。それから、僕は、

「古丁さんは日本語で小説書く氣はありませんか」と尋ねてみた。

「書いて書けないことはないが、日本文ではどうしても滿文の持つてゐるニュウアンスができませんね」古丁は表情を屹つとさせた。「感想隨筆ならば場合によつて書かないこともありませんが、小説だけは絶対に日本文では書かないつもりです」

その夜、古丁とは大體そんな風な話をして別れてしまつた。尤も、これ以上、話するやうなことも僕には見付からなかつたのである。

僕は滿人作家蕭軍の「原野」その他を讀んでゐたので、一應滿人作家の鳥瞰圖は出來て居

り、滿洲旅行に出る時、二三の滿人作家にはせひ逢つてみたいものだと思つてゐた。ところが、その日たまたま古丁と爵青とに逢つて半ばその思ひを達したので、かうなると明日また改めて滿人作家たちと逢ふことがへんに億劫になつて來た。逢つたところで、結局當り觸りのない公式的な話の繰り取りの終つてしまふことが分り切つてゐたからだ。それで、これは一緒に酒を飲んで固くならないで雑談するに限ると、僕は思ひ付いた。酒でも飲んで漫然と話すれば、お互ひに觸れ合ふものが何かあるかも知れぬと考へたからである。で、翌る日の夕方、その積りで出掛けて行つた。

定刻に、檀君と一緒に滿日文化協會に行くと、古丁、爵青、それから紹介されて知つたのだが、疑遲に外文が集つてゐて呉れた。交換した名刺を見ると、疑遲のには滿映の製作部計劃課、外文のには總務課屬官といふ肩書が付いてゐた。

一通り挨拶が済むと、古丁はふと思ひ出したやうに隣りの部屋へ立つて行つた。そして、戻つてくると、「今日これが出來ましたから進呈します」と言つて、菊利の薄つべらな雑誌を僕に呉れた。「讀書人」といふ雑誌の創刊號である。それから、今度は恐ろしく分厚な四六判の

「藝文志」といふ雑誌を差出して、「これ僕たちの雑誌です。讀めないでせうが、まあ持つて行つて下さい」と、古丁は笑ひながら僕に渡した。

「藝文志は今のところ四月目に一冊しか出ないので、讀者から月刊にしろと矢張り督促してくるので、その間の繋ぎに隨筆雑誌の讀書人を出すことにしたのです」古丁は説明した。

宿舍へ戻つてから頁を繰つてみると、いづれも滿語雑誌で、「讀書人」は四十六頁、目次のカットに、ロマン・ロオラン、魯迅、夏目漱石、チヨウサア、ゲーテ、ゴオゴリ、バナード・シヨウ、アンドレ・ヂイド、などの肖像がペンで描かれてあつた。〇ロと銘打つた疑遲や爵青の小品に混つて、いつか「藝文」に載つた田村泰次郎の「鯉魚」が英譯で載つて居り、また、古丁、爵青記として二ヶ月前渡滿した村山知義との會見記や、爵青譯の萩原朔太郎のエッセイなども目に付いた。疑遲の拜瀧天先生「偉大なる王」の作者バイコフ會見記などといふのもあつた。さいきん氣が付いたのだが、むかし、林語堂、周作人たちが小品文運動といふのをやり、小さな隨筆雑誌を出したことがあつたらしいが、「讀書人」は、つまりそれから思ひ付いたものでなかつたかと思ふ。

「藝文志」は第三輯で、四百廿六頁もある大冊である。扉に白抜きで「日本紀元二千六百年紀念特輯」と書かれてゐて、巻頭に二篇の雅頌が載せられ、古事記選譯や芭蕉俳句選譯と共に、古丁譯の武者小路實篤の「井原西鶴」外文譯の山本有三の「海彦山彦」莫伽譯の森鷗外の「阿部一族」がいろいろも全譯されてゐた。創作・戯劇欄には、鶴青の「麥」(二百枚)小松の「鐵艦」(百枚)をはじめ七篇の創作や戯曲が滿載され、一方、在滿日本人作家の竹内正一の「馬家溝」(新潮)に載つた作品)や北村謙次郎(新京で最も囑望されてゐる、また滿人作家たちから敬愛されてゐる在滿日本人作家、舊「日本浪漫派」同人)の「半生之記」の滿語譯も載せられてゐた。

その他、辛嘉の「旅寛即稿」といふ日本訪問記などもあり、その中に「訪志賀武者小路兩氏」といふ項があつて、志賀さんのところでは、判讀すると、辛嘉がわれわれは藝文志といふ雑誌を十何人の同人でやつてゐるが、同人の大半は中學時代からの友人だと言ふと、志賀さんが、それはいい、文學活動は數人の親しい友人が團結してお互ひに勵ましてあつてやらねば容易に成りしないものだ、僕たちも武者をはじめ數人の友人たちと何十年といふものつと一擧げに成

をして來てゐる、と答へてゐるところがあり、先生稱武者小路先生爲「武者」而不使用敬稱と書いてゐる。その次に、龍の話から織物の話になり、志賀さんが手織の藍色の袖織を持つて來さして日本の織物の染色法を説明されるところが書かれてあつて、先生はさいきん健康がよくないと見えて、話ながら時々咳をされ、圓卓の上の細長い磁罐を取つて痰を吐かれた、と叙してゐる。志賀さんの大思直筋らしい。

さきに書いたやうに古丁から貰つた二冊の雑誌を續いたのは後の話で、僕は古丁から雑誌を貰ふと、

「古丁さん、どうです、故では固苦しい話しか出來ないから、外へ出てどつかで坐つて話しませう」と言つた。

「かうして準備してあるのです。故でいいちやあないですか」古丁は向ひ合せて並べた長椅子を額でしやくくつて、僕に言つた。

しかし、重ねて僕が同じことをいふと「ちやあ」と言つて、既に長椅子に腰掛けてゐた這中も腹をあげた。

僕たちはそれから、朝のちかくの商店街にある八丁といふおでん屋へ出掛けた。すると、築地小劇場時代によく見受けた、此の深いロシア風の學生帽を映畫關係者らしく冠つた疑選だけが、今夜どうしても手離せぬ用事があるのでと言つて、途中で別れて行つた。

八丁といふのは、満人の小作にも紺のハツピを着せ提鉢巻をさせ、店先にちよつとした小座敷もある、銀座界隈によく見受けるおでん屋をつくりの店で、酒もよく喰べものも相當であつた。晝飯の時でも、ハイ・ヒールの女事務員同伴で一杯傾けてゐる連中が見受けられた。僕は新京に着いてから、檀、逸見、綾川官君たちとも二回ほど来て居り、また妓で時満洲日々新聞にパイコフの「偉大なる王」を譯載してゐた長谷川瀧君や、いま一手に満人作家の作品を譯してゐる大内隆雄君をはじめ、新京に在住する多くの文筆關係の誰彼に遭遇し、檀君たちに紹介された。長谷川君は牧逸馬の弟ださうで、いかにも北海道産らしい線の太い壮男子であつたが、大阪外語の露語科出身で滿映の宣傳部の副部長（部長は満人）をやつてゐることだつた。大内君に賣つた名刺に勤め先として新京日々新聞社が書かれてあつたが、殷勤な色の黒い小男であつた。

僕は八丁の小座敷に康ると、酒とビールとおでんと詳文した。そして、古丁たちに、喰べたものを何でもさう言つて呉れと言つた。すると、古丁が稍々あつて、「モロキユウを賣はうかな」と言つた。そして、得音と外文とにモロキユウのことを説明した。（僕は哈爾濱から佳木斯まで汽船で松花江を下つた時、或る埠頭で高粱の饅頭と滿洲産の大きな胡瓜を一本、辨當代りにブラ下げて乗込んで来た満人を瞥見した。満人は一體に胡瓜が好きである）それから僕と檀君の顔をみて、

「お國は野菜がうまいですね」と、咏歎するやうに言つた。「殊に、ほうれん草とか、何か、菜っぱの類がね」

纏ておでんが運ばれて来たが、その中にいづれも饅頭ものだらうが、筍とか落とかいつたものも混つてゐた。古丁は好んでさういふものを口にした。

「日本の印象はどうでした」古丁がいつぢや東京へやつて来た時お祭騒ぎで迎へられたことを憶ひ出して、僕は尋ねてみた。

古丁はしかし一口に言へないと見え、表情に困惑の色を泛べた。



「歓迎政めで疲れたでせう」

「さうなんです。餘り澤山の人に逢つたもので、しまひには名前さへ覚えられなくなつて、こちへ歸つて來たら誰ぞつか憶ひ出せないんですよ。誰にも逢はなかつたのと同じ結果になつてしまひました」

「貴方たち、日本の小説よみますか」檀君は三人の顔を見廻しながら尋ねた。

「餘り讀みませんね。矢張り、歐羅巴の小説を主に讀みますね」古丁が引取つて答へた。

「僕たちの文學、いままで心理描寫が無かつたのです。それを學ぼうとして、心理描寫のある歐羅巴の小説を讀みますね」

古丁が夏目漱石の作品から「心」を選んで翻譯してゐる意味が、これを聞いて僕は了解できた。

「佐藤春夫とか、志賀直哉、瀧井孝作、といった人の作品は、檀君は自分が影響を受けてゐる作家たちの名前を挙げた。

「まだ讀んでみませんか」

「本半治は」檀君は重ねて尋ねた。

「まだです」

「貴方たちはけしからんですね」檀君は半分突ひながら大袈裟な口調で言つた。「大宰なんか、爵青さんなんか讀むと吃度感心すると思ひますがね」

「その内よんでみます」爵青は答へた。

「爵青さん、一度東京へ行くといひですね。僕も一緒に付いて行つて、訪問すべき作家のところを案内して廻つたげますよ」檀君は思ひ出したやうに爵青に言つた。

「満日文化協會から近いうちにね、東京行けるかも知れないから」爵青は真剣な顔附きをして言つた。「その時來たらね、檀さんどうぞ頼みますよ」

酒とビールをちやんぱんにひつきりなして呑んでゐるので、だんだんみんなに酔ひが廻つて來た。しぜん、薄々たる空氣が周りに漂ふて來た。

「爵青さんは若いだけあつて、酒は一ばん強さうだな」僕は言つた。「日本酒はどう、うきさすか」

「白酒（高粱から造つた酒で、滿人の常用酒）よりうまいですね」爵青はニコニコして答へた。「本當いへば、ウキスキイ、ブランデーのはううまいですわね」

「爵青さん、結婚してゐるの？」

すると、古丁がニヤニヤして、「爵青は子供が二人ありますよ、僕は三人だけ」とと喉を入れた。

「早いな」僕はちよつと驚いた。

「滿洲ではね、お國のやうな戀愛結婚まだ出来ない。また、そんな女ゐない」爵青は一所懸命になつて辯解した。「家と家と結婚する。それにね、早くお嫁さん貰はんとみんな莫迦にする。信用つかないからね」

「古丁さんの顔は川崎長太郎に、外文さんは川端康成に引寫しだね」僕は先ほどから感じてゐたことを檀君に言つた。

事實、よく似てゐた。殊に、外文は特徴のある犬齒まで川端康成そっくりだつた。

「川端さん、私尊敬してゐます」

外文は寡黙で、鼓へ來てからまた一口も喋らなかつたが、ニコニコしながら悠つくり初めて口を切つた。その寡黙のところも、またじつに川端氏によく似てゐた。

「さういへば、爵青さんはどつか保田與重郎に似てゐますね」

檀君は僕にさういつて、「保田は立派な評論を書く僕の友人ですよ」と、爵青に説明した。しかし、これは少々檀君のこぢつけらしく僕には思はれた。

そのうちに、僕はふと思ひ付いて、小孩に色紙を買はせにやつた。色紙は買つてゐたが、八丁の店に肝腎の硯がなく、仕方がないので筆とインクを持つて來ました。

「貴方たちみんな字がうまいでせう。何か書いて下さい」僕は色紙と筆とを三人の前に突きつけた。

すると、外文が先づ筆を受取つてインク蓋に突込み、「手生紙像 一片雲 飄來又 飄去」と書いた。と、檀君はその色紙を受取つて、その裏に「我がいのちくものごとく西東飛びちるばかり」と即席に翻譯した。

「檀さん、隅に置けませんね」外文は顔くやうに暗い綺麗な齒を見せて微笑しながら、湯つ

「大坂かな盛で言つた、  
今度は何言が「何かを求むべきところに求められぬ我が心」と、假名混り文を字だけ達者に

書いた。

それがまっかけて、外文、節言、檀君のあひだに暫く筆の争奪が続いた。そして、見てゐると、みんな如何にも愉快さうに筆を走らせてゐた。

最後に、古丁が筆を執つて、「明日復明日 是我們的祖先的遁辭 我們沒有明日 只有今日 今日是我們的祭祀（明日また明日は、我等の祖先の遁辭である。我等には明日は無い、ただ今日があるばかりだ。今日こそ我等の祭祀である）」と一氣に書き、色紙の裏にまた、次の文句を定らせた。

今夕復何夕？ 我乃黃帝子， 君乃大和裔， 君愛大和子， 我愛黃帝裔。

（今夕はまた何の夕ぞ？ われはすなはち黃帝の子、君はすなはち大和の裔。君は大和の子を愛し、われは黃帝の裔を愛するに）

僕は古丁の後の文句から、僕が昨夜初めて古丁に逢つた時、日本文で小説を書く氣はないかと尋ねたら、小説だけは絶対に日本文で書かぬと斷言したことを思ひ出し、滿人作家の持つてゐる根強い民族意識といふものを今更のやうに認識した。そして、彼等が民族意識を持つてゐることを心強く思ふ一方、彼等はその爲にこれから色々と摩擦を受けるであらうことが容易に想像され、僕は暗い氣持になつた。矢張り昨日、滿日文化協會で僕が別れ際に節言に言つた杞憂が、どうもそのうち本當になりさうに思はれてならなかつた。

僕たちはそれからまた暫く雑談したが、僕は酒とビールをちやんぼんに呑みつづけたので、次第に胸が苦しくなつて吐き氣を催して來た。それで、最後にみなと盃で乾杯して八丁を出た。すると、直ぐに吐きさうになつたので、賑かにレコードの鳴り響いてゐる向ひのカフェのネオンの灯影に染まりながら、僕は誰かの家の土壁に向つて佇んだ。

と、古丁が背から僕の肩を軽く叩いて、

「今晚は愉快でした。ね、淺見さん、貴方は大和民族の裔でせう、僕は黃帝の子孫です。お互ひに祖先の光榮のためにしつかりやりませう」と、激しい口調で言つた。

「……返事をする」と口から出さうなので、黙つて聞いてみせた。そして、暫くたつて振返つて来る。古丁たちはしつかりした尻取りで、カフェとカフェの間の小路の奥へ消えてゆかうとしてゐるところだつた。

又上は、去年の七月十七、十八、十九日のことを憶ひ出して書いたものである。

ところが、去年の暮れに、いま新京の満洲新聞の學藝部長をしてゐる山田清三郎氏が上京し、こゝたま縁が逢つたところ、山田氏は雑談の末にこんな話をした。去年の秋新京にベストが流行した時、古丁の棲んでゐた長屋の一角からもベスト患者が発生し、そのために古丁の家も焼かれてしまつた。古丁はその時、もちろん家財道具その他も一切焼かれてしまつたらしいのであるが、古丁がさういふ不時の災難に遭遇したのにも拘らず、古丁もその一員である満洲文話會が、それまでどちらかといふと古丁をちやほやしてゐたのに、色々な關係から急に冷淡に。つて、別に義捐金も集めて呉れようとはしなかつた。古丁は不時の災難とは言ひながら家を見られてしまつた上は、文話會のさういふ冷淡な態度を見せつけられてすつかり憤氣込み、

雷分筆を折つて滿洲文壇から離れる決心をして、田舎への轉勤運動をしきりにしてゐるといふのである。而しての挿話には、多分にゴシップ的な要素が混つてゐるかと思ふ。

(十六年四月、新潮)

## 滿洲文學について

一八六

この春、「春曉」の作者北村謙太郎君が、僕の今ある千葉縣の御宿海岸へ遊びに遣つて来て、二晩色々と喋つて行つたが、その時、滿洲にゐて一ばん寂しいのは、その時々悲喜哀歡を率直に語り合つたり、創作上の悩みを打開ける友達がゐないことだ、といつてゐたのには、成るほどと思ひ、こころ打たれた。

北村君は在滿作家では一ばん才能のある、また人氣も一ばんある作家で、同時に唯一の職業作家でもある。僕は一昨年夏とこの春と二回滿洲へ出掛けたが、二回とも新京へ行つた時には寛城子のロシア人街に住む北村君の宅に立寄つた。北村君はそこでじつに悠々たる創作三昧の静かな生活を送んで居り、滿洲旅行ちゆう内地流の味の細かい家庭料理を喰べさせて呉れた。

のも北村君の宅だけだつたが、さういふ北村君であるだけに、僕は素直に同感させられたのである。

いふところの滿洲文學の長所でもあり缺點でもあるのは、小説的素材が至るところに轉がつてゐることだ。そして、在滿の殆どの作家が題材の特異さのみにこころ奪はれて、それを書くのに夢中で、文學的な情みを尠しも意識してゐないことである。つまり、表現上の苦心や、題材把握の觀點、それから人格鑑録について風馬牛であることだ。一言にしていへば、内在的でなく外在的なことである。

一方、在滿の作家は殆ど職業人であり、小説を書くといふことが反つて職業生活の活素になつてゐるもの、結局のところ生活の餘餘になつてゐる。表現欲が一應満足されれば他は捨つて顧みぬ傾きがあり、それが作家をいつまでも同じ境地に足踏みさせてゐる體がある。即ち、素材の面白さやエキゾテシズムを取り去ると、殆ど後に何も残らぬのだ。作者自身の人間的な面白味、人格鑑録の跡といつたものが、窺へぬのである。

以上の缺點は、けだし謂はゆる地方文學の通弊でもある。流石に滿洲文學は、地方文學の一

方の個性である狭い殻に包まれたジレットアンチイズムといったものは脱してゐるし、視野も廣く題材も新しいので、従来の地方文學をば遙かに突き抜けてゐるもの、なほかついま舉げたやうな地方文學の通弊をも破してゐる。

その結果として、在滿作家は總じて個人主義的であり、孤立的であり、しかも、それを別に意識せぬし殺しがつても居らず、内地の作家に見受けるやうな、お互ひを敬愛しての作家同士の内的交流や友情といつたものが稀薄である。そして、これはいま述べて來たやうに、じつに素材主義で人格鍛錬を意に介せぬ外的態度に基因してゐる。冒頭に引いた北村君の痛嘆は故なしとしないのである。じつに茲から獲してゐるのだ。ひとり北村君にとどまらず、在滿作家でその前途を最も囑望されてゐる第一回滿洲文話會賞を貰つた「第八號轉轍器」の作者日向仲夫君にしても、酒を飲むと屢々北村君と同じ嘆きを僕に訴へてゐた。この日向君とは僕は今度の滿洲旅行で非常に親しい交はりを結んだが、その意味に於て、日向君は内地へ歸りたいときでいつてゐた。

したがつて、新京の作家は新京の作家で、奉天の作家は奉天の作家で、哈爾濱の作家は哈爾濱

濱の作家でといふ風に、のみならず、それがまた勤め先の關係や何かで各派に分れてゐて孤立してゐるといふ風なので、その間の交流がじつに乏しい。その結果、發表される文學評論が非常に低調である。仲間うちの小乗的な問題を、何か重大な意味でもありげに取扱つてゐるに過ぎぬ。さうでなければ、現實を遊離した空虚な觀念論である。この意味に於て、滿洲では一般に識見のある文學評論家が要望されてゐるもの、一方、この現象は、滿洲文學の發生が僅々この十年で傳統が浅く、したがつて正しき輿論が生れず、作家の價値づけがはつきりしないことにも原因が求められる。つまり、玉石混淆で、しかも、各自が同じやうに存在權を持つてゐるからである。

ところで、僕が二度の滿洲旅行で非常に残念に思つたことは、在滿作家が以上のやうに總じて自分だけのことにかまけて他を顧みぬし、廣く文學といふことに就いて思ひを致さぬので、しぜん滿系作家とも充分交遊を盡くすといふところまで行つてゐないことだつた。尠くともさう見えたことである。滿洲新聞の文化部長をやつてゐる山田清三郎氏とか、以前滿洲文話會の仕事をやつてゐた吉野治夫君とか、それから北村君や、つひ最近東京へ歸つて來た檀一雄君な

ど、ごく少数の人々を除いては、在滿作家で滿系作家とつきあつてゐる人は殆どゐないのではないか。寧ろ内地から旅行して行つた作家側のはうが滿系作家に逢ひ、かつ胸襟を開いて何かと語り合つてゐるのではないか。

北村君の「春編」といふ長篇を見ると分るが、北村君は内在的な傾向に外在的な滿洲の現實を取入れ、そこに外面的ではない滿洲文學を生まうとして努力してゐる作家である。その北村君が滿洲で眼を据えて小説を書いて行く悩みとして、初めに引いた嘆きと共に、扱て何か書かうとすると、文學の實體がバラバラに解體し、政治とも民族とも文化とも何ともいひやうのない、チグハグで掴まへどころのないものに還元されてしまひさうな、飄りなただけになつて困ると、僕に訴へてゐた。滿洲文學に傳統が無いからだ。それを造らねばならぬ立場にあるからだ。この悩みはまたひとり北村君にとどまらず、等しくところある在滿作家の悩みでもあらうと思はれるが、さういふ悩みをいくらかでも除くためにも、積極的に滿系作家とつき合ひところの交流をはかるべきではないか。

僕の見て来たところによると、滿系作家側は寧ろそれを欲してゐるやうに感じられた。さう

かといつて、向う側から積極的になる譯には行かず、在滿作家側の積極性を暗に刺激してゐるやうに見受けられた。したがつて、兩者の交流が友情を以て續けられるやうになつた體に於て初めて謂ふところの滿洲文學は確たる存在になるのではないか。即ち、在滿作家側は、却々正體の稠めぬ滿洲に於ける大きな存在である漢民族の實體を理解するに至るであらうし、滿系作家側は滿系作家側で、先日の大東亞文學者會議に於ける古丁や爵青などの發言によつても親はれるやうに、もともと大東亞共榮圏の一員として作家活動すべく既に決意してゐるのであるから、兩者の交流がなれば、その方向に就いていろいろと示唆を穿けるに違ひないからだ。そして、おのおの兩者から、今までは、在滿作家の文學は心情的貧困な題材主義の植民地文學からさうと思ふ。今までのところでは、在滿作家の文學は心情的貧困な題材主義の植民地文學からさう

因みに、先日の大東亞文學者會議であるが、滿洲側は滿系作家ばかり出席させて、在滿作家を等閑に附したのはどうしたことであらう。あの會議が形式ばかりのものならば兎に角、實質的なものを伴はせなければならぬ以上、臺灣代表のやうに、在滿作家と滿系作家とを同致にす

べきではなかつたか。滿洲國に對して協力を示してゐることも、文學的苦勞乃至業績の點に於ても全く同等だからである。一方を殆ど國賓待遇で内地へ連れて來、他の一方を全く顧みないなどとは片手落ちも甚だし過ぎる。滿洲に於ける在滿作家の面子の問題もあるではないか。殊に、滿人は面子を重んじる民族である。在滿作家の位置をして、求めて窮地に陥らしめるといふものだ。誰か人選したかはしらぬが、阿諛的態度を改めて厳しく公平に振舞つて欲しいものだ。將來もあることである。切に注意を促したい。

ところで、在滿作家で注目すべきは、北村謙次郎、竹内正一、日向伸夫、吉野治夫、高木恭造、牛島春子、青木實などの諸氏であらう。しかし、これらの諸氏に就いては既に僕は度々觸れて來たので、茲ではさいきん上梓された高木恭造氏の「奉天城附近」に觸れるに止どめる。この創作集には、滿洲に於て青春の日を送り、しかも未だにそこに腰を据ゑてゐる作者の身に附いた経験や觀察に基づく滿洲の現實が、一脈の抒情味を潜めながら、裏面にリアリスマイックに描きだされてゐる。一方、作者は裸かになつて居り、その人となりや風格が闊達として溢み出てゐて、その點、いかにも滿洲から生れ出た、それでゐる稀有な純文學で、滿洲文學に於

ける劃期的な作品集である。今までところでは、北村君の「春聯」竹内君の「復活祭」日向君の「第八號轉機」が、在滿作家の代表作集であるが、高木氏の「奉天城附近」はこの系列の作品集にはいるばかりでなく、前の三冊がどこかやはり題材に氣を取られてゐるのに反し、全く四面から滿洲を描いてゐる點、新分野を開拓して居り、滿洲文學の進むべき本道を示唆してゐるといつてもいい。つまり、滿洲文學とか何とかいつた枠を越えた、滿洲から自然に生れ出た純乎たる文學なのである。

例へば、作集中の「奉天城附近」や「肉體の圖」を見てみるといい。滿洲事變勃發直前の暗鬱な奉天の空氣を巧みに照應させて、戀愛結婚の爲に滿洲に送られて貧しい醫科大學生の生活を描きだされてゐる青年の暗い青春が、しかし、ナイーヴに、清潔に寫されてゐるのだ。そして、青春の昏迷といつたものが、意識化されない錯綜した滿洲の現實の中にポツカリ泛び上つてゐるのだ。しかも、その底には、近代歐養人の睿智が光芒を放つてゐるのである。前年の滿洲を内面的に切り出したのは北川冬彦だが、後期の滿洲は、じつに高木氏によつて初めて内面的に照明を浴びせかけられたといつても過言ではないのである。滿洲文學が謂はれる地方



文學的興味を離する爲には、この高木氏の作家的態度にこそ立戻る必要があるのではないか。

(十七年十一月・月刊文章)

一九四

## 大陸文學について

謂はゆる大陸小説なるものを僕はだいたい読んでゐるが、それらを讀んでいつも感じてゐた第一の不満は、描かれてゐる自然が内地の自然のやうにせせこましくて、大陸的な漂渺感に缺けてゐることであつた。ゴゴリのタラス・プリバに描かれてゐる自然の野性味や蕭軍の第三代の自然描寫に溢れてゐる悠久感、さういつたものが微塵だに感じられないことであつた。

だが、さいきん機會を得て僕自身大陸の土を踏み、小説の素材になつてゐる移民地をも親しく訪ねてみると、さういふ漂渺感を作品の中に漂はすことの困難さを今更のやうに痛感した。哈爾濱から佳木斯まで松花江を船で下ると今では一晩で行けるが、匪賊の出沒した時代にはそれか五日も一週間も掛かつたさうである。また佳木斯から第一次の移民入植地である彌榮まで

一九五

は、入植當時は徒歩で二日掛かりだつたさうであるが、いまは汽車が開通してゐて數時間で行く。治安の安定とさいきんの交通機關の整備とは滿洲に於ける旅行をいまや非常に安易ならしめてゐるが、それだけに謂はゆる大陸小説の作家が、さういふ經路を辿つて移民地を訪れて大陸小説をものにするの難かしさが一そう加はつてゐる感がある。

僕は滿洲の奥地で地平線に取巻かれた大草原地帯を汽車で通つたが、さういふ廣漠さも實際に歩いてみないで瞥見するだけでは他愛ないものである。なぜかなれば、視野の届く範圍といふと僅かに九杆に過ぎないからだ。したがつて、匪賊のために仆れた移民團員の忠魂碑が建つてゐる、彌榮の丘の上に立つて一望すると、彌榮の移民村の全景が殆ど眺められるが、それだけ眺めただけでは内地の高原地帯と別に變つたところは無いのである。外來者が旅行者としてちよつとぐらゐる移民地に這入り込んだところで、なかなか移民地の大陸性など描けるものではない。

ところで、問題は單に移民地の自然のみに限らぬ、大陸移民に就いてでもある。彌榮の移民團は去年團員に入植地を分配して益々頼もしい發展を遂げつつあるらしいが、しかし何處まで

も困難は伴ふもので、扱て生活の問題が一塵片が附くと、今度は集團をいつ迄も纏め上げて行く理想の確立といふ問題で行き當つてゐるらしく看取された。僕など農村出身者でなく、また農村に就いては何も知識が無いので、移民問題などに喚出す權利は些かも無いのであるが、だが、小説の問題となるとまた別である。現在の大陸小説、つまり移民小説の作家たちは、大陸移民の前途や行方に關して果して眞剣に思ひを凝らしてゐるのであらうか。その前途や行方に對して、大陸移民の悩みをおのれの悩みとしてなんらかの精神的な理想の確立に努めてゐるのであらうか。

大陸小説に限らず、一般の謂はゆる素材主義の作品の缺點は現象追隨主義で、作者が素材の單なるジャアナリステイックな面白さのみに即し、素材に對する打込み方の不足に基因してゐる。すなはち、その素材に打込まずには居れぬ作者の純眞で眞剣な熱情といふものが稀薄なところが、單なる素材主義の作品に隨せしめるやうに思はれる。素材に對して作者の補綴で眞剣な熱情が横溢して居れば、それはもう謂はゆる素材主義の作品ではないからだ。またさうであれば、素材が胚胎してゐる問題性に對する作者の獨自な解釋や理想といふものも必然的に生ま

れ、おのづとそれが作品の何處かに滲み出てくる筈だ。こんなことは一應わかり切つたことだが、たまたま移民地を訪れて改めて痛感した次第である。そして、現在の謂はゆる大陸小説に感ずる不満の根本的なものを、はつきり突きとめることが出来たやうに思ふ。

さいきん見る素人小説の氾濫も、一般讀者が謂はゆる素材主義の方向を取つてゐる社會的擴がりを持つた作品を欲しながらも、結局それらの作品が素材主義を抜け切らず、器用に素材の表面を撫で廻してゐることに對する不満の反動ではないか。すなはち、さういふ作品に對して、現象の眞實性、乃至は作者自身の眞剣な解釋や抱懐する眞摯な理想を求めて近附いて行つた一般讀者が、それらを満たされぬ懺りなさから、次第に素人小説に接近しだしたのではないか。素人小説の作者の殆ど全部が、謂はゆる素材主義の作家が取扱ひさうな素材の内部から出現してゐるのを見てもさう斷言できさうである。謂はゆる素材主義の作品に、確たる眞實性がなく、また無理想であるところから、それなればよし表現が稚拙であり整つてゐなくとも、また同じやうに無理想であつても、兎に角内部から生れて來たものであるから、その内部からの眞實の聲を聞かうといふことになつて、けふ見る素人小説の氾濫を促す機縁をつくるやうにな

つたやうに僕には思はれる。

話題が他に逸れてしまつたが、一口に大陸文學といつても、移民文學に限らぬ本當の大陸文學は、究極のところ大陸に生活の根を下ろさなくてはなかなか一朝にして生れて來ないといふことを言ひたかつたまでである。また、それは内地の既成文壇からではなく、全くさういふ雰囲気とを興り知らぬ、つまり、大陸の現實に紛れ込んでそこに腰を据えて文學に嚙りついてゐる青年層から生れて來さうに、滿洲でさういふ人たちに逢ふに及んで僕が一そう痛感したことを書きたかつたのである。事實、將來を期待させるさういふ作家たちが現に滿洲には幾たりか居る。また、現在生れつつあるのだ。これらの作家たちに取つては外來者の珍しがる滿洲の風物などは既に風馬牛になつてゐて、執拗に凝視してゐるのはいづれもその渦中におのれの運命をも投げ入れてゐる交錯した民族心理である。滿洲の土を踏む誰でも考へさせられるのは、同時にこれの問題でもある。他民族を對照に置いての日本民族の運命といふ問題ではないか。都會といはず奥地といはず、滿洲の至るところで眼に附く白い忠靈塔を見ると、誰でもそれを切實に考へるのではないかと思ふ。すなはち、滿洲在住の作家たちは根柢に於てはそれを追及

してゐるのだ。また、これこそは新しき大陸文學を貫く一ばん肝要な性格ではないか。  
ところで、この場合でも、滿人作家と數べる時甚だ不利な條件に立つてゐるのだ。そして、  
大陸文學の發生の困難さを今更のやうに感じさせるのだ。「原野」や「平沙」の作者で現在滿  
人作家の第一人者である古丁は、滿洲の或る印刷物にかういふことを書いてゐるのである。

——數年前、或る學術團體の報告書「松花江下流の民族」を讀んだことがある。當時にも滿洲  
の文學素材の豊富さを感じたのだつた。全くいくら掘つても發掘出來ないくらゐである。松花江を  
船で旅行する毎に、その兩岸には豊かな民族傳説が存して居り我々の措く對象となることを思ふ。  
會つて興安省の曠原を旅行した時にも、そこに一年か半年暮せたら何大なる作品が描けるであらうと  
思つた。大興安嶺の密林にしても、千古の夢を藏してゐない筈はない。——車（北滿特有の簡素な  
車）の悠然たる歩みも、詩人の興味を起さぬ筈はない。牡丹江省、三江省一帶の三等客車では「山  
嶽」の草木と人類の物語を尋き得るのである。私難若し作家は、萬巻の書をも讀み得ず、千里の  
路を行くことも出来ぬ。だが出來ることならば、これらの「未だ折られぬ地」はいかに開闢し

ても開闢し盡されぬほど餘りに滿洲存するのである。

古丁の以上の文章を讀む時、他民族の下情に入込むことに於て、滿洲在住の日本の作家が滿  
人作家に比して如何に困難であるか窺はれるだらう。だが、一ぱう考へてみると、先に觸れた  
やうに、大陸文學に於て日本側の作家でおのづと獨自の途が開けてゐるわけである。よしそれ  
が幾多の困難を伴ふとも、他民族の下情にも通じなるべく努めなければならぬことはもちろんで  
あるが、それと共に、交錯してゐる民族心理を執拗に追及することによつて、いままで日本の  
文學に嘗て無かつた征服者の文學を築き上げる途が開けてゐることである。すなはち、大陸を  
背景にして民族的矜持の文學を創造することである。同時に、これこそは新しく生れんとする  
大陸文學の當然の性格であり、宿命ではないかと思ふ。この意見は單に僕個人の思ひ附きの考  
へではなくして、滿洲に存在して眞剣に作家修業してゐる人たちの多くの意見でもあるのだ。  
細述を要するのであるが、いまはこれこそ吾本當の大陸文學であつて、かういふ新しい大陸文學  
が一日も早く開花することを僕は切望してゐることを言ふに止まる。（十五年九月・文藝情報）

## 續大陸文學について

二三ヶ月前の「文藝」に、張赫宙と俞鎮午との朝鮮文學に關する對談が載つてゐたが、その中に、かういふ事をいつてゐるところがあつた。それは朝鮮文學が内地に一應受け入れられてゐるのは、單にそのローカル・カラアに基因してゐるので、精神的な共通性なり深さを認められてゐるからではない。したがつて、ローカル・カラアが出てゐない作品は、結局内地では受け入れられぬので、内地文壇への進出を冀つてゐる朝鮮作家たちは、知らずしらすのうちにてそれを視ふ結果に陥ち込んでゐるといふのである。

つまり、張赫宙や俞鎮午に取つてはそれが嫌りなく、いつてみれば文學の附加物に過ぎぬさういふローカル・カラアではなしに、本質的なもので認められたいものだといふのだ。勿

論、その困難さは十分意識してゐて、われわれがどうしてもローカル・カラアを出さなくてはならぬものであつたならば、附加物としてではなく本質的なものとして、内部から滲み出さなくてはならぬ、ともいつてゐる。

僕は二人の對談記事の技のところを讀んで、一つの反省をしひられると共に、朝鮮文學のみに限らず、謂ふところの大陸文學の場合に就てもいろいろと考へさせられた。殊に、大東亞共榮圈なるものが擴大しつつある今日、滿洲、支那に止どまらず、南方を主材にした作品も、そのうち續々と出現するに違ひないからだ。現に南方に従軍してゐる作家たちは相繼いで現地報告を送りつつあるが、これらの作家たちが歸つて來たならば、當然ながら暫く南方ものが氾濫するは明らかなことだ。これから益々増大するであらう、この傾向をも含めて考へさせられたのである。

まづ前記の對談記事を讀んで偶々しひられた反省の點から述べると、僕などには朝鮮文學や謂ふところの大陸文學を讀む場合、最初からローカル・カラアを期待してゐるところが確かにある。そして、さういふ文學に對する僕などの態度は、エキゾテイズムへの期待といふより

は、むしろ一種の現實放棄の快感を豫期してゐる。即ち、一脈われわれの生活と關聯を持つてゐながら、なほ且それがわれわれの身邊からかけ離れた末梢的でない特殊の雰圍氣であり、作中に描かれてゐる人物は一應責任を持たせられぬ何物かがあるからだ。この事がどこか僕のところを懸はせて呉れるからである。張赫宙や俞鎮午が指摘してゐる通りである。

しかしながら、最初の取つききはさうであつても、結局に於ては、その作品に精神的な繋りなり深さが稀薄な時には物足らぬことも事實である。一應ローカル・カラアを期待して讀みはするが、感動させられるのは、矢張り本質的なものの内部から滲み出て來てゐるローカル・カラアを備へた作品である。又、さういふ作品でないと、たとひ最初は期待を持つて取つついて行つても、決して現實放棄の快感などは味ははせて呉れぬ。讀後、失望させられるばかりである。つまり、それは眞のローカル・カラアではないからだ。

僕が冒頭に擧げた對談記事から反省をしひられたのは、朝鮮文學や謂ふところの大陸文學に對する僕などの態度が、内地文壇の作品に對する時と較べて好奇心がじつに先立つてゐることだ。いま述べて來たやうに、ローカル・カラアの魅力への期待がさきに閃くことだ。漠然と感じ

てゐたその事が、張赫宙や俞鎮午の言葉によつてはつきり圓星を差された思ひがしたのである。同時に、一方、その言葉により、矢張り漠然と感じてゐたこの系列の文學に對する不滿の根元も改めて突き留められた氣がし、何彼と考へさせられたのである。

結論から先にはいはう。朝鮮文學をはじめ、在滿作家や滿人作家、それから内地の作家を含めての謂ふところの大陸文學にしても、正直なところをいふと、今までに現れてゐる殆どの作品に於ては、前記の表面的なローカル・カラアのみが作品行動の動機になつてゐる。それは何も作中の風物とか風俗ばかりを差していふのではない。民族性を掴む場合にしても、問題を捉へてくる場合にしても、また詩情を漲らしてゐる場合でも凡ゆる場合がさうである。文化面に關係のある内地からの旅行者が一步大陸の土を踏むと、異民族との接觸面が契機となつて、急に熱烈な愛國者になると共に俄かに政治に興味を持ちだし勝ちだが、その機微に似通つた確たる信念を伴はぬ氣紛れと無責任さがある。

張赫宙や、俞鎮午は、まづ第一にローカル・カラアに目を付ける内地の讀者側がいかにも強いやうな口物を洩らしてゐるけれども、これは共同責任であつて、一半の罪は確かに作家側に

もある。その意味では、語るに落ちてゐるのだ。朝鮮文學や大陸文學の作家たちは、さういふ文學を一應愛好する讀者側が、まづ好奇心で飛びついてくる事をはつきり知つてゐる。又、それらの讀者が何かの機會で朝鮮なり大陸の土地を踏んだ場合には、急に熱烈な愛國者になる傳で、矢張りさういふ系列の文學の作家と同じ觀點に立つて物事を見るに違ひないことを、無意識のうちに計算に入れてゐる。一方、この系列の作家たちがさういふ文學を書き出した最初の動機はいざ知らず、書き續けてゐるうちに定評ができてくると、今度は定評に嘸りついて、一そう讀者側の好奇心に投ずるやうな態度になり、問題を捉へてくる場合でも益々ジャアナリスナイックになり勝ちである。かういふ傾向は確かに看取されると思ふ。

つまり、冒頭の張赫宙や俞鎮午の悲鳴は、さういふ外在的な文學に奉仕してゐるうちにマンネリズムに陥ち、熱情を喪ふと同時に内面的な飢渴を覺え、扱てそれらの壁にぶつかつて顧みてみると、文學の本質は内在的なものである事に今更のやうに氣が付き、日暮れて道遠しといつた感慨から無意識に迷り出たものである。さうに違ひない。

ところで、考へてみるに、朝鮮文學や諸ふところの大陸文學の系列に屬する文學の弱點は、

とつに致に在るやうに思ふ。忌厭なくいへば、現在のところではこの系列の文學は殆ど前述の意味の表面的なローカル・カラアのみ一枚看板で、文學に取つて一ぱん大切な作家の個性との深い結びつきが皆無である。しぜん、深さも伴はぬ。皮相的なエキゾテイズムと、ジャアナリスナイックな問題性のみでつちあげてゐる。したがつて、氣が付いてみると、僕などもさうであるが、讀者側でも、この系列の文學に對する場合には、他のものの期待はいつかなくして好奇心だけで向つて行つてゐるやうなところがある。この點、確かに同罪ではある。が、これは果して讀者側の罪であらうか。

扱て、以上の現象から僕が痛感した事は、この系列の文學は一度どうしても個性に歸らねばならぬといふことである。つまり、外在的態度を解體して、改めて内面的に沈潜する必要があるにあらぬと思ふ。内面的なものに、作品行動の動機をみつけないければならぬといふ氣がする。さうしない事には、この系列の文學は、文學的とはいつまで經つても足踏みしてゐる成長發展は期せられないのではないか。のみならず、つねにその文學の位置が流行的浮動的であつて定義性を缺き、よしんば偶々その中によき素質の作家がゐたとしても、絶えず傾向に縛られる詩

果十分その素質を發揮できないやうに思はれる。

尤も、かういふ事をいつても、この系列の作家で既に一應の仕事をしてゐる者は、個性に諦めるなどといふ事は難しいかもしれぬ。又、一應の定評に執着があつて躊躇するかもしれない。それなれば、致し方ないことである。今日の時代から考へても、これから益益謂ふところの大體文學を志す新しい作家が輩出するに相違ないと思ふから、それらの新しい作家たちにこそこの事を切望したい。

朝鮮文學をも含めて大陸文學は、その系列に屬する作家が飽くまで個性に執し、個性を掘り下げながら、しかも題材の中へ飛び込んで行つて個性に繋る問題を取上げるなり、詩情を掴むなりした時、はじめてそこに悠久的なものが漂渺とし、同時にいきいきと温い血が通つてくるのではないか。そして、何々文學といふ種が取れ、讀者側の特殊扱ひも解消するのではないか。のみならず、文學に新しい分野なり、豊かさをも附け加へることもなると思ふ。これは却々困難な道だが、結局致まで辿りつかぬと嘘である。この點、南方に從軍してゐる作家たちが歸つて來たならば、その中の幾たりかは、いくらかその期待を果して呉れるのではないかとい

ふ豫感がする。それらの作家は傾向的ではないからだ。そして、謂ふところの大陸文學に屬する系列の文學の進むべき道に對して、示唆を垂れるのではないかと思ふ。ぜひさうありたいものだ。

しかしながら、かうはいつても、現在の大陸文學の中に、さういふ文學の萌芽が全くないわけでもないのだ。最近上梓された北村謙次郎の「春曉」などには、色濃くさういふ萌芽が現はれてゐる。この長篇は構成上にいくらか不備があつたり、迫力に於て稍々缺けるところがあつたりするが、淡彩の鉛筆畫のやうな色調の中に、またその色調に似通つた北方の魅力や憂愁や大陸の浪の愛ひとかいつたものを、寛城子といふ新京のロシア人町や、ホロンバイルの蒙古風なハイラルの町を背景にし、飽くまで作者の素質に基づいてしみじみ寫してゐる。しかも、その筆調は詞綴じコックがあり、全篇に滲つてゐる詩情は、讀者のこころをそこはかとなく掴んで離さぬところがある。それでゐて、一方、滿洲國建國當初の蘇炳文の叛亂なども取上げてあつて、興味的でもあるのだ。つまり、或る程度、本質的なものの中にローカル・カラアを滲み出させてゐるのである。



その意味では、僕などの大陸文學に對する期待を相當満足させて呉れる作品で、これを見るにつけても、僕の大體文學に對する註文は決して間違つてゐないと思ふ。兎に角、かういふ文學の輩出する機運が一そう濃厚になることを望ましい事である。(十七年四月・新潮)

## 滿洲文學管見

滿洲文學に對する關心がはじめて内地の文壇で頭を擡げたのは一昨年の春である。すなはち、滿人作家選集「原野」の上梓がその契機となつたのである。「原野」の卷頭を占めてゐる古丁の同名の作品が注目を惹き、引いてはその選集に收められてゐる滿人作家たちの諸作品の素材が好奇の念を煽つたのだ。そして、古丁の日本訪問となり、また内地の文藝雜誌における滿人作家たちの作品紹介になつたのだ。

このやうに、内地の文壇における滿洲文學に對する關心はまづ滿人文學から起つたわけである。が、このことはまた一歩うに於いて滿洲に棲む日本人の作家たち、つまり、在滿作家に對する關心をも内地の文壇人に喚起させる機縁となつた。すなはち、トリヴァイアリズムに提はれ

ぬ、俄然を急ぐ異にした大陸小説の流れを汲んでゐる満人文學のメンバアたちが、いづれも在  
 満作家たちと一併に同じ滿洲文話會會員に屬してゐるところから、それではこれらの満人作家  
 たちと肩を並べて同じやうに仕事してゐる在満作家たちは、一體いかなる仕事をしてゐるので  
 あらうかといふ好奇心が湧いて來て、おのづと注目するやうになつて來たからである。

正直にいふと、内地の文壇では、「原野」の上梓によつて滿洲文學の存在を知るまで、滿洲  
 に誰たる文學が生れてゐるなどといふことはほとんど風馬牛だつた。もちろん在満作家の存在  
 などは知らず、二二のアマチュア同人雜誌があるらしいくらいのみ知識しかなかつたのである。そ  
 れが「原野」の紹介が契機になり、一ぱら、續出する内地作家の譯はゆる大陸小説が樽手で詰  
 まらぬことも手傳つて、單に滿人文學のみならず、ひろく滿洲文學全般に對して内地の文壇人  
 の關心が急に昂まつて來たのだ。

ところで、滿洲文學自體を見ると、それがはつきり確立したのは矢張り滿洲建國以來であ  
 る。滿洲國の民政部が文化政策として藝文運動に力増を入れ、滿洲文話會なるものの運営に協  
 力し、尠なからざる補助金を出したからだ。そして、滿洲文話會は謂はゆる在満作家が中心にな

つて設立したものであるが、五族協和の精神から努めて滿人の文化人をも會員に包摂し、一體  
 となつて創作活動を活潑にはじめたからである。

すると、その有力な在満作家といふのはどういふ連中であるかといふと、さいきん隔月發行  
 で五十輯記念號を出した、建國以前から發刊されてゐる「作文」といふ同人雜誌の同人たち、こ  
 れは奉天から出てゐるのであるが、も一つ、新京から出てゐる「滿洲浪曼」といふ同人雜誌の同  
 人たち、大體これらの人々である。「作文」の同人たちはほとんど滿鐵系の社員で、「滿洲浪  
 曼」の同人たちは國都新京に集つて來てゐる、いづれも職業を持つた若き知識人である。すな  
 はち滿洲にはまだ職業作家といふものは存在せず、滿人作家・在満作家を通じていづれもアマ  
 チュア作家である。したがつて、有力な在満作家といつても、つまり、アマチュア作家の中の  
 エキスパートなのだ。

「作文」は、そもそも若き滿鐵社員の文學愛好者たちによつて創刊されたものである。  
 が、讀者はわてもペンを執る者はほとんどゐなかつた當時の滿洲であつただけに、忽ちその存  
 在は目立つて來たのである。のみならず、たまたま同人によい意味でのアマチュアの純粹な熱

意と勇氣を持った連中が集つてゐたので、建國後滿洲文話會が誕生し藝文運動が旺んになる。おのづと重要なその中心存在になつてしまつたのだ。次に述べる「滿洲浪曼」の同人たちがどうやらかといふと作品行動よりも、寧ろ國策に對して協力乃至發言や助言してゐるところに存在なり意味を際立たせてゐるのに反して、「作文」同人は飽くまで作品活動で押しで行き、それぞれ特色ある著實な佳作を生みつけ、いまや「作文」は滿洲の文藝方面では最も大きな存在になつてゐるのである。

次に、「滿洲浪曼」は建國後創刊された季刊誌であるが、同人がほとんど、各方面の藝文關係の役人、滿映關係者、ゴアアナリスト、といつた連中で、しかもこれらの連中がいづれも各自の職域において第一線に立つてゐる連中なので、おのづと滿洲文學の動向についてイニシアチヴを取るやうになつたのである。つまり、同人たちの發言はその儘滿洲國の藝文政策に取り入れられる結果となり、したがつて、同人たちが滿洲文學について考へることは同時に滿洲國自體を考へることになり、いきほひ慎重になると共に權威を持つて來てゐるのだ。在滿作家と滿人作家との交纏、後で説くさいきん滿洲國で取上げた劃期的な藝文指導要綱といつたものに

も、この雑誌の同人たちの盡力は大きいのである。

つまり、ひと口にいふと、滿洲における在滿作家文學の現状は、評論方面は「滿洲浪曼」の同人たちが、創作方面は「作文」同人たちが中心になつてゐる風なのだ。すなはち、創作方面では「作文」同人、竹内正一、吉野治夫、日向伸夫、高木恭造、青木實、それから「滿洲浪曼」同人、北村謙次郎、及び「祈といふ男」で内地でも知られるやうになつた平島春子、「中央公論」の懸賞小説に當選した「アルカリ地帯」の作者の堀政益、さういふ連中がおもに活躍し、評論方面では「滿洲浪曼」同人、北村謙次郎、木崎龍、長谷川清、大内隆雄、かういふ連中が中心になつてゐる。それに、内地からのさいきんの移住者である、山田清三郎、檀一雄、綠川實、などが加はつて在滿作家の文壇を形づくつてゐるわけである。

しからは、在滿作家の文學の特色はどこにあるかといふと、さきにも觸れたやうに、ほとんどがアマチュア文學である。そして、發表機關といつても今のところ確たるものがなく、各自の同人雜誌のほかには、「滿洲新聞」「滿洲日々新聞」そのほか「電々」「滿洲行政」「滿蒙評論」「滿洲公論」「新天地」「北苗」などといふ概ね半官半民會社の機關雜誌の附けたりの

國境を隔たつてゐる。したがつて、一般に内地の職業作家に見るやうな藝に打ち込んだところや個性が乏しく、また作家同志がどこか押れ合つてゐて高い批判が缺けて居り、つまり、ジレンマ・アイズムを披け切つて居らぬところがある。その結果として、玉石混淆で水準の秩序が一きつてゐない細みがある。そして、大部分の作品が内省が稀薄で素材主義に陥ち勝ちだが、その代り、内地の文壇で見受けられぬ若々しさや一種の野性が滲つてゐることも事實であり、特徴でもある。

前に引いたやうに、在滿作家ほどの作家も職業を持つてゐる。しかも、その職業は内地とはちがつて一種の夢想なり理想を孕んだ、茫漠たる自然や錯綜した異民族を背景にしてゐる滿洲の現實の上に立脚したものである。内地の文壇でひと頃叫ばれた地方主義文學、それがスケールが大きくなつて、なほかつ前記の若々しさや野性を伴つて將に成熟せんとしてゐるところに、在滿作家文學の大きな特色がじつにあるのだ。それから、ヒュウマニズム、エキゾティシズム、現象に對する敏感性、かういつたものもその特色を増すのに役立つてゐるのである。はじめに戻つて、滿人文學に開れよう。滿人文學は最初に擧げた古丁がいはば指導者で、そ

のほか、松野、小松、藤野、などが現在活躍してゐる。古丁をはじめいづれも滿洲國首魁の一角である。發表機關としては、新京から出てゐる「藝文志」といふ漢子の同人雑誌がある。滿人文學の特色は現代支那文學の流れを汲んでゐることで、冒頭にも書いたやうに謂はゆる大陸文學であることだ。何よりも物語性を重んじてゐることだ。ロマンといふ奴だ。そして現在における素材の特質性は、滿人社會の舊時代と新時代との衝突乃至交錯の悲喜劇を民族性を剔抉しながら、稍々ニヒリスティックに描き出してゐることである。そして、在滿作家の文學と比較した變合發生の素因や傾向はもちろん全く違ふが、ことさら目立つのは彼等の身に附いた教養の深さである。つまり滿人作家といつても元を亂せばみな漢民族で、その教養の深さといふものも、彼等が子供の時分から知らず知らずのうちに支那の古典に親んでゐるところから來てゐるやうに看取されるのである。そして、今更のやうに、支那文化の深遠さなり傳統の深さといつたものが痛感されるのだ。

とところで、滿人文學がけふあるやうに前面に押出され、滿洲文學として確たる存在を持つやうになつたのは、「原野」「蒲公英」などの彼等の叢書を譯出した「滿洲浪曼」同人六内隆雄

が大いに興かつて方があるのだ。すなはち、滿人作家たちははじめのうちは政治的壓力を無意に受けては居り、随分こつこつ書きつゝ、大内隆雄が拾ひ上げて翻譯し日本人の讀物界に紹介したる、ほめて眞價を認められ、けふあるやうな存在になつたのである。それまでは滿人新聞などに争うて發表機關を持つてゐたに過ぎなかつたのであるが、大内隆雄の翻譯で一般に紹介されるを滿日文化協會などの肝入りで、堂々たる大冊子である「藝文志」などの機關誌を持つことが出来るやうになつたのだ。

現在のところ、正直にいふと、滿洲文學においては在滿作家の作品よりも滿人作家の作品のほうが傑出した作品が生れてゐる。しかしながら、滿人作家たちは一應滿洲國の協和精神といふものに協力する意志を見せながら、その癖、讀んでゐるものはあひ變らず上海の出版物であるのみならず、内心においては漢民族としての自恃を多分に持つてゐるので、滿洲文學におけるこれからの在滿作家との共存的な成長は却々多難のやうにおもはれる。あるひはけふが絶頂かもしれぬといふ氣がする。

以上は、滿洲文學の歴史のアウトラインに過ぎない。このアウトラインを見てもわかるやう

に、また屢々繰返していつて来たやうに滿洲文學はまだアマチュア文學を抜け切つて居らぬ。

ところが、さいきんになつて藝文指導要綱といふものが滿洲國にでき、政府の方針として職業作家を養成することを發表した。これはいままでの實績により素質ある有望な在滿の日滿作家を選んで、政府が後援して滿洲の職業作家に仕立てるといふのである。つまりは、一應の文化人であればほとんど無選擇に會員にした滿洲文話會が餘りに尨大になり過ぎたので、國策統制上、藝文指導要綱なるものができたらしいのであるが、しかしながら、いまや成熟して漸くアマチュア文學を脱さうとしてゐる滿洲文學のためには、この計畫は喜ぶべきことではないかとおもふ。そのために、近いうちに綜合雜誌も出るといふ話である。けれど、われわれは刮目して滿洲文學の前途を見守るべきである。

なほ、滿洲文學を論ずるには、さいきん評判の「偉大なる王」の作者バイコフを筆頭に、滿洲に在住する白系ロシア作家についても觸れねばならぬのであるが、彼等は滿洲文話會にもまだ介入を許されなかつたさうなのでわざと省いた。

(十六年八月、早大文學講義)

が大いに興かつて力があるのだ。すなはち、満人作家たちははじめのうちには政治的壓力を無言のうちに恐れているだけ片側でこつそり書いてゐたのを、大内隆雄が拾ひ上げて翻譯し日本人の讀書界に紹介したため、はじめて眞價を認められ、けふあるやうな存在になつたのである。それまでは満人新報などに辛うじて發表機關を持つてゐたに過ぎなかつたのであるが、大内隆雄の翻譯で一般に紹介されるを滿日文化協會などの肝入りで、堂々たる大冊子である「藝文志」などの機關誌を持つことができるやうになつたのだ。

現在のところ、正直にいふと、滿洲文學においては在滿作家の作品よりも満人作家の作品のほうが傑出した作品が生れてゐる。しかしながら、満人作家たちは一應滿洲國の協和精神といふものに協力する意志を見せながら、その辭、讀んでゐるものはあひ變らず上海の出版物であるのみならず、内心においては漢民族としての自恃を多分に持つてゐるので、滿洲文學におけるこれからの在滿作家との共存的な成長は却々多難のやうにもはれる。あるひはけふが絶頂かもしれぬといふ氣がする。

以上は、滿洲文學のほんのアクロタインに過ぎない。このアクロタインを見てもわかるやう

だ、また屢々繰返していつて来たやうに滿洲文學はまだアマチュア文學を抜け切つて居らぬ。ところが、さいきんになつて藝文指導要綱といふものが滿洲國にでき、政府の方針として職業作家を養成することを發表した。これはいままでの實績により素質ある有望な在滿の日滿作家を選んで、政府が後援して滿洲の職業作家に仕立てるといふのである。つまりは、一應の文化人であればほとんど無選擇に會員にした滿洲文話會が餘りに老大になり過ぎたので、國策統制上、藝文指導要綱なるものができたらしいのであるが、しかしながら、いまや成熟して漸くアマチュア文學を脱さうとしてゐる滿洲文學のためには、この計畫は喜ぶべきことではないかとおもふ。そのために、近いうちに綜合雜誌も出るといふ話である。けだし、われわれは刮目して滿洲文學の前途を見守るべきである。

なほ、滿洲文學を論ずるには、さいきん評判の「偉大なる王」の作者バイコフを筆頭に、滿洲に在住する白系ロシア作家についても觸れねばならぬのであるが、彼等は滿洲文話會にもまだ介入を許されなかつたさうなのでわざと省いた。

(十六年八月、早大文學講義)



## 在滿の作家たち

在滿の日本人作家たちはすべてアマチュア作家だ。尤も、先日東京で開かれた滿洲新聞の座談會に出席したら、その席上で、さいきん實績による政府認定の専門家といふものが滿洲に出来、専門家たちの作品活動に政府が後援することになつたといふ話を聞いた。が、實質においては、短時日のあひだに別だん變つたわけでもないであらう。矢張りアマチュア作家ばかりに違ひない。

滿洲には「作文」(奉天)それから「滿洲浪漫」(新京)といふ二大文藝同人雑誌がある。

「作文」はだいたい同人が滿鐵の社員系統で、「滿洲浪漫」は新都新京に集つて來てゐる野心的な知識人である。「作文」は二千か三千圓つて毎號賣切れるといふことを、僕は昨夏奉天で

「作文」同人から耳にした。事實、在滿の有力な作家たちは殆どこれら二誌のいづれかの同人に屬してゐるといふことだ。

この「作文」同人の中に高木恭造といふ人がゐる。モグリ醫者が滿洲建國と共にしだいに奥地に追はれて行く哀れな経緯を、さまざまな植民地的人物を點出してそれらの落莫たる感慨と共に、一見コミカルな中に一種のベアソスを湛へて寫した「風塵」といふ異色ある作品がある。この作品は特につぬけてゐるが、この人の作品は一體に舊時代の雜駁な植民地的人物の心情を剝り出して來てゐるところに特色がある。

ところで、この人は滿洲醫大出身の本溪湖滿鐵醫院の若い眼科のお醫者さんである。ちかいうちに博士になるさうだが、醫大の學生時分から詩をも書き、「まるめる」「わが鎮魂歌」「鴉の齋」などといふ詩集もあり、昭和十四年刊の「鴉の齋」は去年の春、矢張り「作文」同人の日向仲夫の小説「第八號轉轍器」と共に滿洲文話會賞の第一回を授賞されてゐる。



寝かせるの夜ならで

手でありあけの匂こむるあたり

わが枕べに響き来るは

水の響 柱時計の振子か

いまし體験として汽車は都會を去り行くならん

曠野をよぎり 海峽を隔て

しよめのきたる方にわが故國はあるなり

失ひし夢を求めんとすれども

かひなしや

たゞ泉の溢れるごとくに

そなたを想ふ

「鴉の膏」の中にはかういふ殉情な詩が収められてゐる。が、この人の小説はこれに反して、いま書いて来たやうに滿洲を彷徨する日本人たちの現實面を直視したものである。驚かた。

またまた泰次でこの人に逢つたが、一方、いかにも眞直な社會人らしく感はれた。

この高木恭造といふ人がいい例で、在滿の作家たちはすべて正統な職業を持つた人たちである。したがつて、初めにいつたやうに作家としてはアマチュアである。北村謙次郎、竹内正

一、この二人は創作経歴も古く力倆も確かで、滿洲で専門的作家といふものが出来たとしたら先づその筆頭に置かるべき人たちだ。その竹内正一は滿洲育ちながら僕とは早稲田で一緒だつ

たが、矢張り哈爾濱の滿鐵圖書館の主事をやつてゐる。主事とはいふものの、その圖書館は北鐵から接收したもので、館員は殆どソ聯時代の人間をその儘使つて居り、館長は當時の館長で

ドイツ歸りの滿人だが、名目だけで、じつさいの實権は竹内が握つてゐるのだ。北村謙次郎の

みが滿洲における唯一の職業作家だといへばいへなくもないが、彼といへども滿鉄から囑託名義で一日も顔を出さずに生活費を仰いでゐる。(後記さいきん退社、原稿生活に入つたと)

北村君は小學、中學は大連だが、國學院大學にしばらく籍を置いてゐたことがあるさうだ。

また、舊「日本浪曼派」同人である。先日ちよつと上京した時、井伏鱒二、太宰治、木山捷平、の三人が世話人になつて内輪の歓迎會が催されたが、さういふ交友のある人である。僕は

昨夏新京の舊ロシア人街の寛城子で初めて逢ひ、それから交友をつづけてゐる。寛城子のロシア人長屋に居を構へ、しづかな生活を営みながら筆を執つてゐる。その點、在滿の作家たちが總じてどこか落着きを失ひ焦燥氣味なのに較べて、特異な存在を示してゐる。その辭、「滿洲浪漫」を牛耳つてゐるのを見てもわかるやうに、作家的力柄を持つてゐるのみならず、滿洲國に對しても相當の識見を抱いてゐるのだ。

北村君には、子供の心情にだけに沁み込んで行く大陸といふものを心象的に描いた、「或る環境」といふ肌理の細かい長い連作がある。行動的な世界のみを描いて内省的な世界を忘れる勝ちの荒い作品の多い滿洲において、何よりも文學といふものを感じさせるところに大きな特色がある。北村君は滿人作家たちからも敬愛されてゐるが、それは滿人作家たちが、作品において在滿の日本人作家たちとは趣きを異にした大陸小説的な依拠さを特徴としてゐるもの、一ばんこの北村君の持つてゐる内省的なものを缺いてゐるからではないかと思ふ。北村君にはこのほか「硝」などといふいい作品がある。「硝」においては北村君の住んでゐるエネソタイツツな寛城子の情を背景にして、新京へ流れて来るカマエの二人の女性の生活画を描

き、地誌の在りどころを探求してゐる。そして、種やかな觀照の中に一種の文學的コクを滲ませしてゐる。さいきん「滿日」に連載した「春聯」は向ふでは評判らしいが、この作品は僕は讀んでゐない。

さきに挙げた竹内正一には既に「氷花」（昭和十三年刊）といふ一巻の創作集がある。この創作集において彼は滿洲で作家的存在をはつきりさせ、同時に、在滿作家としてのいはば草分けならしめたのである。さいきん第二創作集の「復活祭」が滿鐵社員會から上梓されるさうだが、彼の作品は殆どすべてが哈爾濱が背景になつて居り、哈爾濱の四季の風物を巧みに取入れて、白系ロシア人たち、謂はゆるエミグラントたちの揺蕩の姿や、日本の若い放浪者の流浪の姿を描き出してゐる。一種の緩やかな澄んだ詩情がどの作品にも漂ふて居り、それと共に、落着いた繪畫的なしづかな美しさを齎してゐる。これらの作品は竹内のもものとしては必ずしも上出来ではないが、「新潮」に「馬家溝」「復活祭」の二作を発表して居り、竹内の存在は内地でも一部の人は既に知られてゐるのではないかと思ふ。

しかし、滿洲でも若い人たちのあひだでは、竹内の作品の識見を一應認めながらも、取扱

つてゐる世界がいつも過去の世界であり、積極面を取上げようとしないのに對して不満を抱いてゐるやうだつた。竹内自身もそれを意識したと見え、さいきん「常安覺え書」といふ力作を発表し、滿洲の邊陲な小都市におけるジグザグな居留民の奮闘史といつたものを手掛けてゐた。實録的な面白さはじゆうぶん持つてゐるものの、どつか息切れしてゐる感じで、成功してゐる作品とはいへないが、この意力はそのうち竹内の作品をしないでに變貌させるのではないかといふ氣がする。さういへば、「哈爾濱入城」といふ長篇を脱稿したと近信で洩らして來たが、この長篇でその變貌が如實に現はれて來てゐるのではなからうか。

いま挙げた北村謙次郎、竹内正一の二人は、兎に角在滿の作家たちの中でコクのある作品を書く作家である。ところで、この二人の作家より若く、したがつて取材が新時代で、しかも矢張りコクのある作品を屈つてゐる在滿の作家に吉野治夫がゐる。

彼は滿洲育ちの早稲田出身だが、さいきん政府が藝文指導要項を引提げて統制に乗り出したために一應解散することになつた、日滿會員二千餘名を擁してゐた滿洲文話會の事務長を政府から手當を買つて承らく勤めてゐた人だ。いままでに新京を訪れた内地の作家たちは、必ず一

度は吉野君に何彼と厄介になつてゐる筈である。この吉野君は、政治的なもの、あるひは觀念や觀念に手頼らず、自分の眼だけで素直に滿洲の現象を見るべく努めてゐる作家である。このことは同時に、自意識の氾濫で自分自身をもてあましてゐる吉野君の無意識に救ひを求めての自己放棄をも意味するが、兩者の混淆が作品に新奇な新鮮さを瀦らしてゐる。代表作として「手記」「孤獨」などが擧げられてゐるが、寧ろ斷片的な作品に生彩を放つてゐるものが多し。と云ふことは、自己分裂が未だ收拾つてゐない事を意味する。したがつて、吉野君に纏て確たる一つの觀點が把握できれば、獨自で新鮮な新しい作品が生まれるのではないか。この意味で、吉野君は、在滿の作家たちの中では最も囑望に値する作家である。

次に、いかにも在滿作家らしい作家たちを擧げると、日向仲夫、青木實、の二君だ。いづれも滿鐵社員である。日向君はさいきん創作集「第八號轉轍器」を上梓した。第一回滿洲文話會賞を貰つた同名の作品を巻頭に置いた短篇集である。僕は日向君から頼まれてその跋文を書いたが、次の文章はその中の一節である。

「日向君に取つて最初の創作集であるこの本に收められてゐる作品から、作家としての日向

君の特色を抜き出してみると、何よりも際立つてゐるのは民族心理を取上げてゐることだ。滿洲における、日系、滿系、あるひは鮮系のお互の心理的摩擦を、作者のヒューマニスティックな協和的精神を感流させながら、亢奮や感傷に溺れず、冷静に、素直に描き出してゐることだ。それらを北滿の鐵道といふ特殊な世界を背景にして、しかもまだどこかに露西亞風なエキゾティシズムを拭ひ切れずに残してゐる一方、北鐵接收直後のなまなましい亢奮の餘燼が醒めをうけて居らぬ雰圍氣の中に、グイグイッどに泛び上らせてゐるのである。

日向君は三高中退のことし廿九になる、在滿の作家たちの中でも最も年少の作家である。どうかすると一本調子で平板になる嫌ひがあるが、現實を咀嚼するたじろがぬ敏銳なものを持つてゐる。一方、潔癖な神経があり、急速度に推移する滿洲の現實を捉へるには打つてつけの才を持つてゐる。その意味で、彼が作品の中に次々といかなる滿洲の現實を持込んでくるのは、僕に取つてはなかなか興味のある問題である。したがつて、また、謂はゆる在滿作家として最も期待の掛けられる作家である。

青木君の代表作は「一農夫」「ホロンパイル」などである。捉へて来たテーマを一應制切つ

て書くところに一服の淺さがあるが、滿洲の即物的な現象に敏感で、直ぐその渦中にもぐり込みその核心的なものを掘んで泛び上つてくる。青木君はその根柢に在滿の多くの知識人に見るヒューマニスティックな推進的な心組を持つて居り、青木君の作品を讀むと在滿の知識人がいかに關心を持つてゐるかがよくわかる。それでゐて、觀察や筆觸に輕佻なところがなくむしろ取實味に満ちた作風なのだが、いまいつたやうに、一應制切つてこぢんまり綱め上げて描くところに不満が感じられるのだ。混沌さ、茫漠さといつたものをその儘殘して、しかも作者の觀察や感想が残るやうになれば、在滿作家として最もジャアナリスティックな獨自の位置を占めるやうになるのではないかといふ氣がする。兎もあれ、日向君と共に謂はゆる在滿作家として期待のできる作家である。

以上、いまままで書いて来た在滿の作家たちは北村謙次郎を除くと、すべて「作文」同人である。北村君たちの「滿洲浪漫」にも、北村君のほか、長谷川瀆、大内隆雄、などの諸君がゐる。長谷川君はいまやバココフの「偉大なる王」の譯者として有名だが、小説も書きそれを相當發表してゐる。そして、それらは浪漫味に富んだものだが、いかにも縁が荒く粗笨である。

若い時代の滿洲移民人の感慨や感情を描いてゐるところに特色はあるものの、長谷川君は滿洲の宣傳隊の副隊長をしてゐるが、いかにもさういふ人のお道樂にみえてゐる。また、大内君は新報日々新聞の主宰で、解散するまで滿洲文話會の有力な委員として活動してゐたが、發表してゐるのは滿洲作家の作品、感想類の翻譯ばかりである。もちろん、滿洲作家の作品を初めて翻譯紹介したのは大内君で、そればかりでなく、大内君がゐるなかつたら、あるひは滿洲作家たちは今日あるやうにはつきりした存在とならなかつたかも知れぬ、その意味では大内君の滿洲文學に盡した大きな功績は没することができないが、しかし、大内君は自分では小説を書かぬやうである。

これらを見てもわかるやうに、在滿の有力な作家たちは殆ど「作文」に集つてゐるといつてもいい。書き残したが「作文」同人にはまだ、職場における日滿人の接觸面を描いて滿人の性格をよく掴んだ「草」といふ作品を發表してゐる秋原勝二、風土色をよく生かして蒙古における蒙古人と漢民族との争闘を扱つた「沙草地」の作者富田壽、などの諸君もゐる。「作文」同人は、つまり、滿洲において最も活潑に創作活動をつづけてゐる。

しかしながら、「滿洲浪漫」はまた別の意味で滿洲文學のために盡してゐるのである。それは「滿洲浪漫」が特輯として「滿洲作家選集」や「滿洲文學研究」を出してゐるのを見ても窺はれるやうに、外延的な擴がりを持つて滿洲文學の在りやうを省察してゐることである。滿洲作家たちと絶えず接觸したり、政府とも連絡を取つたりして、一方においてそれを實踐にまで移さうと試みてゐることだ。したがつて、「作文」では評論陣が手薄で低調だが、「滿洲浪漫」ではそれが甚だ活潑で、また、北村謙次郎や、曾て帝大系の明治文學研究會で活躍した、いまは弘報處のお役人に收まつてゐる木崎龍などの言説には、甚だ肯綮に價する論旨が多いのだ。それゆゑ「滿洲浪漫」は滿洲においては確たる存在となつてゐるのである。また、何といつても同人たちの住んでゐるところが新京で、滿洲で一番刺戟的な空氣を吸つてゐるわけだから、意氣込みや見解においても地方在住者と違ふところがある。どことなくいきいきしてゐる。なほ、「滿洲浪漫」には詩人の逸見猶吉がある。新京の生活必需品會社に勤めてゐるが、絶えず詩作をつづけてゐる。次の詩は、逸見君の近作である。

蓋河は濱江省蓋河縣公署所在地、  
濱江縣に属す、牙不力林區を發す

まことに冬近く

斧折れかんば穂など

林相のゆめみる底に續たわり

夕暮るゝ牙不力森林鐵道

寂びしき火夫のごとき目のいるせるは君なり

熱風にいのちはがれゆく身の

しんしんとしてきみに觸れ

きみに詫ぶ

とほき老嶺のいただきに

はや白きもの神をよび

感傷のきびしと後をただよはせり

以上で、だいたい在滿の作家たちの目星いところは盡きるのである。このほかに、滿洲新聞の學藝部長をしてゐる山田清三郎、さいきんまで逸見君と同じ勤め先にゐた榎一雄、この二人は逸すべからざる人物であるが、積極的に創作活動をしてゐないのでわざと省いた。だが、新京におけるこの二人の存在は大きなもので、滿洲の文學運動になにかと有益な示唆を垂れてゐる。殊に、山田氏は滿洲新聞の夕刊面を解放して日滿露在滿作家の作品を大衆にはじめて紹介し、牛島春子の「祝といふ男」などの佳作を生む契機をつくつた功績は大きい。牛島氏は日系官吏の夫人だが、第一回建國記念文藝に應募し「王屬官」が當選してその存在を認められたのだ。この作品は滿映が映畫化してゐる。「祝といふ男」が芥川賞候補作品として改めて「文藝春秋」に發表された時、文壇の評判は面白いだけだといふ風な率氣なものでつた。が、滿洲の土地を踏んで民族の接觸面を見てくると、なかなか一筋縄では捉へられぬ漢民族の性格がよく捉へられてゐるのに感心させられるのである。山田氏はこのやうに滿洲文學に對する業績は大きい。が、時代の差違であらう、若い連中のあひだでは、山田氏が内省的な新しい文學

に對しては積極的に働き掛けようとしないので、その點に多少の不滿を持たれてゐるらしい。

實「日本浪漫派」同人の越川實も滿洲新聞の學藝部に籍を置いてゐるが、健在である。

そのほか、「早稻田文學」に會て佳作を發表して囑望された、八木義徳、濱野健三郎、の兩君も、八木君は理化學工業會社の課長として、濱野君は「わかもと」の滿洲宣傳部長として奉天に在住するが、單なる在滿作家として創作活動を始めるのを潔しとせず沈黙を守つてゐる。が、この兩君は、近々に勤めを罷めて作家として立つべく相前後して東京に歸つてくるまうである。何年かの沈黙は、のみならず、そのあひだを激しい滿洲の現實の中にもぐり込んでゐたのであるから、兩君の東京へ歸つてからの創作活動がいまから僕には非常に期待される。

最後に、當然結詞として、在滿作家の文學の位置、並びにその將來について書くべきだが、指定の枚數をだいぶ超過したこともあるし、粗雑な一文であるひは結論が出てこぬかもわからぬが、この文章から勝手に結論を抽出して貰ひたいとおもふ。

(十六年七月・現代文學)

## 日滿文藝の交流

### 一、

僕は去年の夏渡滿したので一應滿洲文壇の鳥瞰圖を攝むことが出来た。が、それまでは、竹内正一が僕の早稻田時代の友人だつた關係から「作文」を送つて呉れてゐたので、その「作文」と大内隆雄氏譯の滿人作家選集などが、僅かに滿洲文學を窺ひ知るキツカケをつくつてゐて呉れたに過ぎなかつた。

これもたまたま僕が漠然とながら民族と文學との關係において興味を持つてゐたから關心が

あつたので、内地の一般人はもちろん、文壇においても、満洲文學乃至滿洲文壇に對して未だに正當を得た認識を持つてゐないのが内地の正直な現狀である。總じて文壇人は、殊に作家たちは、その外の野外的問題については一般に冷淡なところがある。殊にいまの時代が未曾有の轉換期に臨んでゐて、文學の方向や行方が混沌とし、文壇人自身その心情に見透しのつかぬところから大きな不安を孕んでゐり、氣持の上に餘裕がないので、その傾向は最近一そう顯著である。單なる地方文學として輕視してゐるところがある。

一方、その性質上仕方がないことであるが、内地のジャアナリズムも輕薄で、滿洲に對する關心が一般に高まつてゐる時こそ滿洲問題に關聯して滿洲文學をも起用するが、その關心の波がいくらか退潮を見せ始めると、もはや見向きもせぬところがある。現にジャアナリズムは、まや南方問題に注意を集中してゐるが、すると、それと共に滿洲問題などはいつかすつかり忘れてしまつてゐる。したがつて、滿洲文學も殆ど起用しなくなつてゐる。じつに氣紛れなのだ。

この氣紛れは、滿洲文學を起用する場合でもその選擇方法が矢張りさうで、朝野茶館材料を蒐

集してそれを綜合してその上で嚴密に選擇するといふのではなく、いくらかその消息に通じてゐる二の者の言葉に手頼るか、現地への委託によるといつた無責任さなのである。兎に角、見た眼がちよつと新鮮で變つて居ればいいといふ、飽くまでジャアナリスティックな興味が主眼になつてゐて、内地作家の作品を選ぶ時のやうな慎重さには缺けてゐるのだ。この點、添へものじみてゐるのである。

また、この無責任な傾向は、たとへば内地のジャアナリズムが曾ての滿洲文話會にその作品の選擇を依頼した場合など、文話會は文話會で必ずしも滿洲に於ける一流の作品を提供せず、一部の情實的な發奮によつて、いくらか無責任な作品を送つて來たりなどして、滿洲側に於ても一そを助成せしめてゐる感があるのだ。

要するに、忌憚なくいふと、現狀ではまだ十分日滿文藝は交流してゐない。交流どころか、正しい認識はいふまでもないこと、正確な紹介すら、内地の文壇内だけでも隔々まで行互つてゐないのが現狀である。極言すれば、古丁とバイコフとが稍ポピュラーになつてゐる程度である。この現象は、去年の夏勤しく滿洲文壇の様様を見聞して來て、それが決して内地における



謂はゆる地方文學のやうな渺たる存在でないことをハッキリ認識して來てゐる俣に取つては、滿洲文學のため其だ心外に堪へぬのである。

## 二

滿洲文學の存在が兎に角内地の文壇に知られるやうになつたのは、大内隆雄氏譯の「原野」の上梓以來であらう。この「原野」に收められた滿人作家たちの諸作品は、古丁氏の作品を始めとして、内地の文學作品とは傳統やジャンルを全く異にした、いはば中國文學の血を引いた大陸文學的なロマンであり、それが物珍しかつたので注目を惹いたのだ。

さうかといつて、何も中國文學が紹介されてゐないわけではなく、魯迅が紹介されて以來、殊に日支事變を契機にして、中國の現代文學の目新しいところは夥しく内地文壇に紹介されてゐるのである。ただそれが新しい滿洲國內から生れたといふことや、取材の範圍がまた種々な意味で積極的な關心を持たれてゐた滿洲で、しかも滿人の手で取上げられてゐたといふことな

どが、内地文壇の好奇心をそそつたのである。

一方時代がちやうど民族の問題について深い關心を拂つてゐた時だったので、それと相俟つて「原野」の上梓はあれほどの人氣を持つて迎へられたのだ。そして、その人氣のほどは、まもなく古丁氏が東京に現れた時、文壇を擧げて歓迎されたのを見ても窺はれるのである。

ところで、在滿作家の場合には、竹内正一の處女作集「氷花」を以て最初とする。内地に廣され大部數は極めて少かつたが、識者間ではそのエキゾチックな新鮮な作風が相當評判よく、確かそれがキツカケになつて「新潮」に起用され、竹内は二三の作品を「新潮」紙上に發表してゐる。その次は「作文」同人遊樂の「廟會」である。さいきんでは山田清三郎氏編の「日滿露在滿作家遊樂」日向伸夫の處女作集「第八號轉機」などで、それぞれ相當な賣行を見せてゐる。

のみならず、「日滿露在滿作家遊樂」所載半島春子氏の「祝といふ男」や芥川賞候補作品となつて「文學春秋」に轉載され、また日向は、第一回滿洲文話會賞作品をトップに置いた前記の作品集の上梓が契機となり、「新潮」十一月號に「寒露」を發表する運びに至つてゐる。

なほ、そのほか「文藝」や「三田文學」などでも滿洲文學の特輯をやつて居り、北村謙次郎氏を

始め大體目新しい在滿作家は一應紹介されてゐるのである。しかしながら、特に際立つた印象を内地文壇に残してゐる在滿作家は、今のところこれといつて無いのが僞らぬ現状である。つまり、滿人作家における古丁氏のやうな鮮かな印象を膾炙してゐる在滿作家は、まだ見付からぬのだ。僕など北村謙太郎氏など高く買つてゐるのであるが、内地文壇において不幸充分な發表の機会を恵まれてゐないことは遺憾なことと思つてゐる。

大體、以上が内地の文壇に痕を残してゐる滿洲文學の正直な印象である。いはば曲りなりにもその輪郭だけは紹介されてゐるのである。ただそれがごく皮相的な單なる紹介に終つてゐて、結局その紹介が責任のない根無し草になつてゐるところに、最初の回で述べたやうな奇妙な現象を呈して來てゐるので。

## 三

日滿文藝の交流といふことは、考へてみるに、滿洲文學が結局自主的の態度なり存在なりの

確立を遂げた時に初めて成統されるのではないか。そして内地文壇に流弊を感つたり追隨してゐる限りは眞の交流は不可能なのではないか。前述の原因から添へもの的存在を餘儀なくされるからだ。また、さなきだに發表機關の狹隘をつけてゐる今日、内地文壇に對する滿洲文學の進出は、寧ろ敵意を以て迎へられるかも知れぬからだ。このことは滿洲文學の指導者の立場にある人たちは、殊に反省しなければならぬのではないかと思ふ。

聞けば最近滿洲國においては藝文指導要綱なるものが設けられ、所謂玄人の作家が養成され有力な發表機關も設けられるといふことである。僕の現に見聞して來た滿洲文壇の印象では、どうかすると文學の本質の問題から遊離した派生的な瑣末事の論議に夢中になつたり、黨中黨をつくる小乘的な狹量さが眼に付いたが、選ばれた人たちがさういふものを清算して、結束して滿洲國の大衆的な新しき文化建設に努めるならば、雖て内地文壇に對抗できる日がくるのではないか。滿洲にはまた滿洲獨特のものがある筈だからである。謂はゆる大陸文學の場合でもさうだし、開拓されぬ新しき素材は幾多轉がつてゐるからだ。そして、それらは優に、よし細細な内省を缺いてその點が環になることがあつても、瑣々しさと迫力とを備へれば、内地の文

事に抵抗できるからである。その日がくれば、内地文壇は不慮なしに注目せざるを得なくなる。これはバイコフの「偉大なる王」の、内地における流行を見ても斷言できるのである。その時、日滿文藝は初めて眞に交流するのではなからうか。

また、最近、滿洲文學の作集年鑑（滿洲國各民族創作選集）が、川端康成、島木健作、山田清三郎、北村謙次郎、四氏の編纂で、東京の某出版社から上梓される運びになつたことを仄聞した。このことも亦、日滿文藝の交流について大きな役目を果すのではないかと看取される。なほ、今まで述べて來た以外に、目下日滿文藝の交流を妨げてゐるのは、双方の出版物の配給がお互にうまくいつてゐないことである。これにはいろいろな原因もあるらしいが、一方滿配の怠慢や不圓滑振りもずいぶん影響してゐる。そして、これが案外、日滿文藝の交流を妨げてゐる今日の大きな原因になつてゐるやうに思はれる節もある。内地の出版物がはかばかしく滿洲に行かぬところから、採算上、滿洲文壇の作家たちの創作集の上梓が相當手控へられてゐる嫌ひがあるからだ。その結果、一そう滿洲文學は紹介されなくなつてゐる。この意味で、滿配の圓滑化は、日滿文藝の交流のためにも切望されるのである。

日滿文藝の交流の現状は、大體以上の如くである。そのますますな交流を見せる日が、一日も早く來たらんことを祈つてペンを擱く。

(十六年十月・滿洲日日新聞)

## 滿洲の文學・文化運動

ハルビンの「新聞社」で一昨年紀元二千六百年を記念して、北滿の現地報告文學を一般に募集した。その時、加藤秀造といふ人の「雁は北へ飛ぶ」といふ作品が首席に入選した。この作品は日系警備隊員その頃まだ匪賊地帯だった北滿の駐屯地に於ける手記で、暖い協和精神のにじみ出た中に、荒寥たる北滿の風物を背景にして、困難に滿ちた警備隊員の日常や、僻地の滿人風俗がいさゝきと細かに抉り出されてゐるいい作品である。ところで、この作品の主人公である日系警備隊員が、「不自由や酷寒や孤獨に取圍まれながら何を空想してゐるかといふと、『ハルビンへ歸つたら、美しい感動的な、まるで馬の體のやうに澄んだ小説が讀みたい』といふこととなのである。つまり、さういふ環境にゐて、なほかつ主人公の慰籍になつてゐるのは希度の

文化なのだ。

武藤滿洲國弘報處長が、「日本人が滿洲に打建て、又打建てつつある文化には、古いものと新しいものがある。古いものとは大連を起點とし滿鐵沿線に發展し奉天を終點とするものである。新しいものとは新京を起點とし北滿東滿一帯に根を張り南滿にも延びつつあるものである。前者は日露戰爭より滿洲事變に至る迄の間に作られたものであり、後者は滿洲建國によつて生れ出たものである」といつてゐるが、このことはまた滿洲に在住する日本人についてもいへる。即ち、滿洲建國前まではどちらかといふと、謂はゆる滿洲浪人なる稱呼が當時あつたことによつても顯はれるやうに、漠然と馬賊のロマンティズムや一攫千金の夢に墮れた、粗笨な内地の食ひ詰者が多く渡航した傾きがあつた。ところが、建國後は、若い知識人が確たる理想と夢と目的を抱いて續々と渡滿しだした。そして、いまいはれてゐる滿洲文學は、じつに後者の渡航人によつて生れたものである。

初めに書いた如く、匪賊討伐に従事してゐる警備隊員の尉籍が「馬の體のやうに澄んだ」優れた文學作品であるのを見てもその一斑が察せられるやうに、建國後渡滿した若い知識人の精神

内的層は、一時代前の享樂的態度と違つて一般に高度の文化である。換言すれば、讀書である。生活的な意味と環境の要素とが絡みあつて、一そうそこに彼等を道ひ込んでゐるのである。ところで、在滿のかういふ若い知識人の中で、その層を特に文學に求めてゐた人々があつた。その人たちが、身を置いてゐる環境の特異さ、或ひは異民族との接觸、悠久な自然といつたものを意識するに隨つて、おのづと激しい創作衝動を覺え、それが即ちいま見る滿洲文學の發生となつたのだ。

したがつて、眼ふところの滿洲文學は、その意味で、發生の抑々はアマチュア文學である。最近と雖も、弘報處から藝文指導要綱なるものが出て、文化振興策から暗に職作家の擧出を慫慂してゐるもの、僅かに「春聯」の作者北村謙次郎ぐらゐで、未だにその域を脱けてゐない。しかしながら、その半面に於て、獨自の特色を持つてゐることも事實である。即ち、滿洲文學の作家たちは、その生活感情と作家活動とを遊離させて居らぬ。内地の作家のやうに現實生活を荒廢させることなく、作家活動が却つて、各自が一方從事してゐる職業生活の慰藉となり、またその活動の原動力となつてゐる。果してかういふ創作態度から、眞の意味の文學作品が生

れるかどうかと質問されれば、ちよつと即答に困るが、しかし、これだけのことはいへるであらう。その態度に於て建設的であり、持續的であり、總括して健康な精神に溢れてゐるといふことは、

何かで讀んだのであるが、英吉利の文壇の最近の傾向は、アマチュア文學の氾濫であつたとしふことである。この現象は英吉利の國力の低下と共に、老大國の文化の沈滞乃至は退歩を如實に現してゐるやうに思はれるが、その一方、何か新しい活力を取入れて文化を回復しようとしての懸命な動きでもあつたやうに看取される。ところで、滿洲文學には、この意味での新しい活力は確かにある。内地文壇の作品に較べて粗野であり、内省を缺き、つまり文學精神の探求が充分に顧みられず、また技巧に於ても劣るが、浪漫的な主材と共にこの新しい活力があり、これが何よりの特徴ではないかと思ふ。

現在みる滿洲文學は、抑々は、いまも奉天から刊行されてゐる「作文」といふ同人雜誌がその口火を擧げたものである。この雜誌の同人の大部分は滿鐵社員である。いはば、その同人と、のちに新京から出た「滿洲浪漫」の同人とが今日の滿洲文學を築き上げたのだ。「滿洲浪漫」の

同人は、地開と共に國都新京に集つて来た若き知識人たちである。即ち、やがて建國の基礎が固まると、滿洲浪曼の同人たちが、いづれも政府や新聞社や映畫會社などの第一線に立つて活躍してゐた連りだつたので、政府の文化關係の役人たちと語り在來の滿洲文話會なるものを強化した。民生部の支援を受けて、本部を新京に置き、各地に支部を設け、凡ゆる層の文化人を結合したのである。そして、この文話會運動で特に注目すべきは、古丁を筆頭とする滿系作家を初め、滿人の知識人たちにも廣く呼びかけ、文話會員の中に包含したことである。同時に、日・滿知識人間、交驛に努め、民族協和の實を擧げたことである。

一方、創作活動であるが、いま現に活躍してゐる作家たちは、大體に於て前記の「作文」、「滿洲浪曼」の有力な同人たちで、いはばエキスパートがその二誌に據つてゐたわけであるが、彼等は自分たちの雜誌に力作を發表すると共に、その前から漸く輩出した半官半民會社の機關雜誌、それから華天や新京の有力な新聞をも利用した。また、滿系作家の作品がたまたま内地に紹介されて好奇心を喚起すると、それが契機になつて、内地のジャアオリズムが、日系の滿洲文學にも注目する機運に際合したのである。

滿洲文學の存在が確立し鮮明になつた経緯は、大略、以上の如くである。そして、滿洲文話會は去年一應の使命を果して發展的解消をなし、政府は新しく藝文指導要綱なるものを確立し今度は一定水準に達した藝文家、即ち、文藝、美術、音樂、演藝、映畫、寫眞、などのエキスパートを選び出し、彼等にそれぞれ専門の協會を組織せしめた。そして、各協會の連絡機關として藝文聯盟なるものを結成させた。同時に、今年の正月を期して綜合文化雜誌「藝文」を創刊し、その創作欄に、選出した作家たちの作品を相當の稿料を拂つて掲載し、かくて滿洲文學の有力な作家たちを國策に協力せしむるに至つて今日に及んでゐるのである。

最後に、當然、滿洲文學の有力な作家たちを紹介しなければならぬのだが、指定の枚数が盡きたので名前だけ擧げさせて貰ふ。北村謙次郎、竹内正一、日向伸夫、牛島春子、埴政盈、綠川寛、吉野治夫、高木泰造、青木實、長谷川滝、三宅豊子、富田善、秋原勝二、加藤秀造、木畑卯市、北尾陽三、書き落しがあるかも知らぬが、大體以上の諸氏である。その他、長老格の山田清三郎氏の名前も述べることでよいであらう。

(十七年六月・若草)

## 滿洲の新興文學

滿洲文學が初めて内地に紹介せられたのは、大内隆雄譯の滿人作家選集「原野」である。今年  
は滿洲建國十周年であるが、今から五六年前のことであつたらう。

滿人といへば直ぐ苦力コウリを聯想し、何か文化程度の低い人種のやうに思ひ込んでゐたところ、  
「原野」に收められてゐる諸作品は、作者達がいづれも若いところから、未熟さや藝術味の乏し  
さは流石に目に付くものゝ、傳統を異にした大陸小説の流れを汲む稱威力の雄大さや、作中人物  
の深渺感といつたものが特異で、内地の人々が滿洲文學に對して關心を持ちだしたのは、じつ  
にこれがキツカケである。

一方、滿洲建國の基礎は急速に固まり、開拓團の陸續たる渡航と相俟つて、内地の人々の關心

が俄に滿洲に向けられてゐた時であつたので、内地のジャアナリズムもいち早く滿洲文學を取上  
げるやうになつた。かくて先づ滿人作家の古丁を起用するに至つたが、これと同時に、滿洲に  
在つて小説を書いてゐる内地人にも目を付けはじめた。これが今日見る滿洲文學の隆盛をもた  
らした抑々である。

即ち、内地のジャアナリズムが滿洲文學に對して厚意を見せ始めるや、それが刺戟になつて  
滿人作家たちは協和の實を示すために、日系作家たちは内地文壇に迎へられようとして、共に  
新興國家の活力に富んだ新奇な題材を掴まへて競ひたつたからだ。またその機運がおのづと滿  
洲文話會なるものを結成させ、つひには全滿に日滿二千人の會員を擁するに至つたが、これ亦  
新しき作家を生む母となつた。しかし、このやうに文學熱が高まると、今度は滿洲の新聞  
雑誌が遅ればせながら藤元の作家たちを起用しだし、かくて滿洲文學の一層の隆盛を促す結果  
となつたのである。

ところで、いま現に活動中の滿洲作家たちは、「偉大なる王」「さわめく密林」の作者である白  
系ロシア人のバイコフを除いては、日滿作家共に殆どが建國以後創作活動をはじめた人々のみ

である。つまり滿洲文學は純實と同じ歴史しか持つて居らず、その點、文字どほり新興文學である。したがつて、作家たちもみな若い。殊に滿人作家側は若く、「原野」「平沙」の作者で滿人作家の嚆矢である古丁にして卅四歳、近ごろ最も賣出してゐる作家で、中央公論九月號にも「破つた國庭に降りて」といふ作品(この作品は失敗作である)を發表してゐる仲青の如きは僅かに廿六歳である。

作家たちが若いといふことは、取りも直さず洋々たる前途を孕んでゐることである。滿洲文學はいまや存在をハッキリさせて來たが、忌憚なくいへば漸く地方文學的域を脱したばかりである。即ち、流石に題材は多奇に富んで居り、また活氣に溢れてゐるもの、兎もすると題材主眼に陥り、確たる文學精神の樹立に於て缺くところが見いだされる。

だが、滿洲作家たちは今や滿洲文話會を解消して、滿洲國の新しき要請のもとに滿洲文藝家協會なるものを結成し、各自その一員として現に活潑な創作活動を営みつつある。いま述べたやうに彼等はすべて若いのである。我々は暫くは何もいはないで、けれど刮目してその前途を見守るべきである。

滿洲文學の特色に觸れる前に、既刊の滿洲作家たちの創作集を擧げて置かう。

- △竹内正一著「氷花」(作文發行所)「復活祭」(滿鐵社員會)
- △日向伸夫著「第八號轉轆器」(砂子屋書房)
- △三宅豊子著「塙の歌」(杜風書房)
- △北村謙次郎著「春睡」(新潮社)
- △高木恭造著「奉天城附近」(作文發行所)
- △大内隆雄譯・滿人作家選集「原野」(浦公英)「三和書房」
- △古丁著「平沙」(中央公論社)
- △山田清三郎編「日滿露在滿作家短篇選集」(春陽堂)
- △淺見瀧淵・日系作家選集「潮會」(竹村書房)「地平線を行く」(赤塚書房)



△川崎康成・岸田國士・島木健作・山田清三郎・北村謙次郎・古丁編「滿洲國各民族創作選集」(創元社)

滿洲文學の日系作家側の特色から舉げると、先づそれが凡て勤勞者の文學であることだ。そして、創作活動が同時に一方登んでゐる職業生活の激化になり踏みになつてゐることだ。その結果、殆ど私小説は見當らず、滿洲の動ける社會的現實が取上げられて居り、強靱な生活力に溢れてゐることが何よりも目立つ特徴である。

ところで、滿洲の社會的現實であるが、總括的に氣付くことは、善意を滑めての異民族に對する心理探求である。異民族といつても滿人や白系ロシア人であるが、それらに對するヒユウマニステイックな協和精神を征服者の寛容を以て底流させながら、一筋縄で捉へられぬ民族心理を大陸の風物を背景に執拗に追求してゐることである。

その次に目に付くことは、荒々しい大陸的なものと内地への郷愁との格闘である。並びに、大陸の悠久感に對する執着である。

滿洲文學に於ける日系作家は殆ど凡てが勤勞生活者だといへ、内地のそのやうに嚴勞に

まみれて居らず、その大部分がなんらかの意味で新しい理想や希望に燃えて大陸へ渡つた人々なので、必然的に建設的であり努力的である。一方、教養も勿論ある。したがつて、一貫して文學精神は滑洩であり、これに、内地の文學に較べて今のところ稍々低調である深さをそのうち加へて來たならば、將來相當な文學を樹立するに違ひないのである。現に、前記の、北村、竹内、日向、高木、の諸氏、それから、「祝といふ男」の牛嶋春子氏等は、偶に内地の雜誌にも作品を發表してゐるが、決して内地の或る種の作家には引けを取つてゐない。それを見てもさういひ切れるやうに思ふ。

次に滿系作家の文學は、選集の「原野」や「蒲公英」を通讀すると一應の輪廓が掴めるが、等しく現代支那文學の流れを汲んでゐる。即ち、こせこせ支那文學であることに、前にも述べた様に大きな特色がある。そして、一夫多妻の封建的な家庭制度の崩壊機運や、いくら稼いでも生活に追付かれてゐる百姓の生活などを、主として建國以前の滿洲を背景にして精力的に描いてゐる。

その點、一般にまだ十分協和精神を出し切つて居らず、題材的に稍々嫌らぬものを覺えるが

しかし、滿人作家の事實上の指導者である、古丁、傅青、などが先頭に立つて、さういふ精神のもとに今や作品を手掛けつゝあるから、そのうち滿洲独自の滿人文學が生れるに違ひない。殊に、傅青は若いだけに、その意味でも期待が持てると思ふ。

(十七年九月・同盟通信)

## 「第八號轉轍器」について

日向仲夫君は確かことし廿九歳になつたのだとおもふ。表情に一種の茫漠さと、同時に憔悴さを湛へた、背が高く立派な身體つきをした若々しい偉丈夫である。

僕が初めて日向君とあひ見たのは、去年の夏滿洲旅行に出た時で奉天に於てであつた。その後、日向君は職を奉ずる滿鐵旅客課の命で長白山探險に赴き、奉天ではちよいちよい顔を合はしたものと二人きりで悠つくり話す機会を持たなかつた。ところが、矢張り去年の秋、たまに日向君は滿洲在住作家の有力な一人として、滿洲國民生部と滿洲文話會とから内地見學に派遣されて上京し、僕と日向君とは再び東京に於てあひ會し、ために二人はいつそ深い親愛を感じ合ふやうになつたのである。

日向君の作品は、しかし僕は日向君を知るまへにいくつか読んでゐた。滿洲に於ける最も有力な同人雑誌である「作文」に、僕の學生時代の友人の竹内正一がメムバアの一人として加はつて居り、そのために僕は「作文」をいつも注意してゐたので、矢張りそのメムバアである日向君の作品も早く目にしてゐたのである。

この創作集に於て短いものながら日向君の最も傑出した作品であると思ふ「窓口」や、それから「木の芽立」は、こんど初めて讀むものであるが、第一回滿洲文話會賞を貰つたといふ「第八號轉機噐」や「春遊胡同」や「時期」などは發表當時に讀んでゐて、素材に對する把握力の確かさや執拗さといつたものに相當感心させられてゐたのだ。そして、奉天驛頭で初めて日向君の風貌に接した時、作品の印象から勝手につくり上げてゐたイメージとあまり變つてゐなかつたのに驚くと共に、作品に凝つてゐる一種の逞しさの據つてゐるところに素直に傾けたのである。

日向君に取つて最初の創作集であるこの本に收められてゐる作品から、作家としての日向君の特色を抜き出してみると、何よりも際立つてゐるのは民族心理を取上げてゐることだ。滿洲における、日米、滿米、あるひは鮮米のお互ひの心理的摩擦を、作者のヒューマニスマイック

な協和的精神を底流させながら、興奮や感傷に溺れず、冷靜に、素直に、書き出してゐることだ。それを北滿の鐵道といふ特殊な世界を背景にして、しかもまだどこかに露西亞風なエキゾタイズムを拭ひ切れずに殘してゐる一方、北鐵接收直後のなまなましい興奮の餘蘊が醒めきつて居らぬ勢圍氣の中に、グイグイと上らせてゐるのである。

僕が去年の夏滿洲を旅して一旅行者としてながら一ばん痛感したことは、矢張りこの民族の問題であつた。そして、曠漠たる西比利亞の原野を横切つて營々と鐵道を敷いて來たスラヴ民族の驚嘆すべき野心の跡や、雜草の生繁るやうな逞しい漢民族の生活力などを、滿洲の至るところに立つてゐる白い忠靈塔と共に親しく見聞した時、日本民族はこの土地においてだけは絶對に榮えねばならぬと思つた。同時に、榮えるためには日本民族は並々ならぬ忍耐と寛容を要すると思つた。

日向君は、つまり、僕が感じたさういふ民族の問題を、滿洲の現象乃至現實の中に身がつから沈潜して行つて勇敢に取上げてゐるものだ。現在滿洲において誰もが切實に感じてゐるこの問題を、若さが孕んでゐる直情と夢想とを以て、日向君は眞正面からぶつかつて行つてゐるのだ。

異民族の性格の變々に努力を重ねながらまだ十分に這入り込んで行けぬ齟齬ゆき、個々の小乘的ないふマニステイックな精神といふものが果して大乗的に生かされ得るものであるかどうかといふ懷疑、一方、かういつたものがそれぞれの作品の輪廓をいくらか暈かしてゐるもの、日本民族の一員であることを自覺しての寛容の上に立つた民族心理の剔抉は、滿洲の將來に緊る色々の問題を映發しながらわれわれの胸を鋭く突くのである。その意味で、日向君の文學は、滿洲において當然生まらるべき文學の一つの方向を辿つてゐるともいへる。それが意識的なものが微塵だになく、素直に自然發生的に取扱はれてゐるので、露骨な傾向性を伴はず、いづれの作品をも清純な文學作品にしてゐるのである。

これは取りも直さず、日向君の潔癖で純情な人となりがさうさせてゐるので。「窓口」といふ作品、それからこの作品は主観的なものが横流し過ぎてゐて作品の印象を稍々センチメンタルにしてゐるが自傳的作品である「歸去來」といふ作品、この二作を讀むと日向君の人となりがよくわかるが、かういふ因襲にこだはらぬ、いやむしろその勇敢な反叛者である、無垢な若い魂を持つた日向君であればこそ、一見傾向的な題材を取扱ひながらよくその傾向性を脱却

して文學的な深い感銘を齎してゐるので。

また、いま挙げた「歸去來」といふ作品にしても、前述のやうに作品としては未熟であり十分成功してゐないが、新しき世代の滿洲渡航人の一つの性格を髣髴させてゐるところに興味がある。すなはち、新しき世代に取つての謂はゆる白き處女地の魅力乃至執著といつたものが、どこかに色濃く滲み出してゐるのである。その點、日向君も亦時代の子であり、日向君がかういふ方向の作品に手をつけるやうになつた動機の一半も茲に基因してゐるやうに窺はれる。そして、それがまた、日向君の作品を特異な新しいものにしてゐる。

些か僕のペンは冗舌に失した怨みがある。が、いままで述べてきたやうに、兎に角日向君は異色ある作家である。また、日向君は廿九歳になつたばかりで、洋々たる前途が約されてゐる譯だ。けれど、われわれは刮目して待つべきである。日向君は最近いくらかスランプに陥ちてゐるやうだが、それは「窓口」に書かれてゐるやうな理場勤めから離れたことも手傳つてゐるだらうが、日向君のスランプの根本原因は、さきにもちよつと觸れた個人的な小乘的なヒューマニステイックな精神に對する懷疑ではないかとおもふ。しかし、小乗なくして異して大乗が

在り得るであらうか。いついかなる時代においても、最も貴重すべきものは人間の善意ではなからうか。善意を生かすこと。日向君よ、われわれはそこにポイントを置いて、困難な時代ながら互互に仕事をして行かうではないか。

(十六年三月、「第八號『敬器』』致)

## 「復活祭」について

竹内正一は文學における傑れた一種の風景畫家である。北滿の北歐風な相貌を帯びた異國的風物から、詩的哀愁に溢れた場景を切取つて來て、清澄な美しき三色版として作品に展開する。

もちろん、竹内正一は純乎たる作家である。したがつて、必ずしも、地上を匍ひずり廻つてゐるやうな人間の生活を見守つてゐない譯ではない。が、この場合、竹内正一は飽くまで冷靜な傍觀者なのだ。そして、細緻で執拗な觀察と、生得の繊細で柔軟な感覺とを駆使して、竹内正一の内部に内在する詩的精神を揺り動かすもののみを取上げて來て、その背景を寫すと同じ角度からしづかに描き出してゐる。つまり、風景と同じやうに靜物化して寫してゐるのであ

しからば、さういふ竹内正一の創作衝動を促す契機になつてゐる詩的精神は、抑々なによつて惹き起されてゐるか。

それは、偶然の運命によつて、次第に轉落して行きつゝある哀しき人間の姿を一瞥した時だ。彼等は一人としてそれが悪いのでもない。突發的に襲つて來た不可抗的な時代の旋風にたまたま吞み込まれてしまつたゆゑ、さういふ不運に遭遇してゐるのである。

竹内正一は、かういふ慘酷な運命の姿を瞥見した時、激しい同情を覚えるまへに、さういふ運命を目の前に見ながら何ともできぬおのれの人間としての無力を厭といふほど感じて、得體の知れぬ深い哀愁に病されるのである。すなはち、さきに擧げた竹内正一の作家としての冷靜な傍觀者的態度は、じつにこの人間としての無力感から胚胎してゐるのだ。それと共に、竹内正一の創作衝動は、かういふ得體の知れぬ哀愁に病された時、にはかに生色を帯びてくる。つまり、激しく創作活動を促されるのである。

竹内正一が作品に好んで描く人物は、北滿において次第に墾民化して行きつつある白雲露西

亞のエキセントチである。それらの哀愁に満ちた生活を、彼等がかつて華やかな生活を誇つてゐた時代と同じ美しさを、時代は變遷してもあひ變らず保つてゐる或る意味で無慈悲な周圍の自然と共に寫し、一見清淨で美しい三色版の中に、兩者の對照から惻々として追つてくる一種の鋭い時代の挽歌をたゆたはせてゐるのである。これを見ても、前記のやうに言ひ切れるとせよ。

その意味で、竹内正一は十九世紀的詩觀を潛めた詩人的作家である。そして、たまたま北鐵接收直後の混亂紛糾した哈爾濱に在住したために、さういふ竹内正一の創作衝動を喚ぶ幾多の題材に面接し、竹内正一は一層その素質なり傾向を深めて、今日の異色を齎したのである。

一方、竹内正一が十九世紀的詩觀を潛めた詩人的作家に終始してゐるところに、同時に現代の作家としての若干の不滿が感じられる。が一人の異色ある特異な作家をつかまへて全能を望むのは、けだし無理であらう。ますます特異さに徹して、その獨自の特異さで、愈々われわれを魅惑する作品をぞくぞく發表して呉れることを、この上とも竹内正一に望みや切である。

(十七年三月・「復活祭」序)

## 「地平線を行く」について

「地平線を行く」は哈爾濱日日新聞が皇紀二千六百年を記念して募集した北滿現地報告文學の入選作品集である。

僕が編者になつてゐるが、實をいふと、僕の大學時代の友人竹内正一が偶々哈爾濱日日新聞の學藝部と親しいので、竹内を介して同新聞の學藝部長平田茂氏から僕がその出版を依頼されたものである。したがつて、本來ならば哈爾濱日日新聞社編とでもすべきなのだが、手續きを他の關係があつて、内地にゐる僕が敢へて編者の名を犯すに至つたのだ。その點、大方の諸氏の御諒承を得たい。

ところで、この話があつたのは去年の初夏の事で、僕は早速懇意にしてゐる赤塚書局に請つ

たところ、早速快諾を得たのである。が、紙の關係などあつて延び延びになり、それから殆ど一年振りで漸つと上梓の運びになつたのだ。僕は肩の重荷が降りた思ひで吻つとしてゐる。

この間、僕は滿鐵の招聘で坪田讓治氏と共に二回目の滿洲旅行に旅立ち、忘れもせぬ今年の紀元節に哈爾濱で前記の平田茂氏に、竹内正一や同社の學藝記者大野澤綠郎君たちと一緒に面晤の機を得た。そして、米原化してゐる松花江に臨んだ小ヨット俱樂部で、僕たちには珍らしかつた松花江で獲れる川魚料理で酒を酌み交はしながら、一見舊知の如く何彼と打瀝けた話を混へた。ちやうどその朝新嘉坡のブキテマが陥落したニュースが遺入つてゐて、哈爾濱市内は何となく喜色に溢れてゐた。そのどよめきが同じく僕たちの心にも傳はつて、忘れる事のできなげしい半日を送つたが、その席上でも、僕は平田氏から重ねてこの本の上梓に就いての盡力を頼まれたのであつた。

又、その翌日には、僕たちの泊つてゐたヤマト・ホテルで同社學藝部主催の座談會があり、この集に收められてゐる「雁は北へ飛ぶ」の作者加藤秀造氏や「地平線を行く」の作者木村卯市氏などの風貌に親しく接した。いづれも作品と同じ眞率さと素材さとを備へた人柄らしく親

これは、僕はいい感じを受けた。いま茲になせこんな事を書きつけて来たかといふと、つまり、以上の意味から、初めのうちは僕に取つていくらかよき事のやうな気がしてゐたこの集の上梓に、たんだん責任を覺えて来て、決してよき事ではなくなつて来たことをいひたかつたからである。

籍名、校正に一應目を通すにおよんで、その念は一そう増して来た。嚴密にいへば、この集に收められた四篇の作品のうち、取れる作品は加藤秀造氏の「雁は北へ飛ぶ」一篇のみである。この作品は文藝作品としても立派なものだ。嚴密な觀察とナイーヴな筆調の中に、作者のヒュウマニスティックな心情が暖く生きてゐる。また、作品に綾があり、その綾が具象的によく寫されてゐる。その他では、いくらか點を甘くして、木畑卯市氏の「地平線を行く」である。この作品も一應素直で達者な作品であるが、どこか作者が作者自身に甘えてゐるところがあり、それが作品を流してしまつてゐるのが惜しまれる。

この二つの作品に較べると、猪岡菊子氏の「大空から大地へ」黒住千萬人氏の「森林の記録」は遙かに幼い作品である。その幼さもナイーヴなところでもあればいいが、感じ方が常識的

で、しかも鬼もすると自分で自分の特異な體驗に溺れ勝ちで、そこへ待つて来て表現力が充分身についてゐないと來てゐるので作品全體が上ずつてゐる。つまり、讀者が知りたいと思ふ肝腎の機微が寫されてゐないのである。尤も、この二つは選外佳作といふ事で、他にもう二篇、當然この集に收まるべき優れた作品があつたさうであるが、何かの都合で省かれた由である。

感得のない批評をすれば、以上の如くなる。しかしながら、この集に收められた作品は、いづれもともとと文藝作品として書かれたものではない。北滿の色々な分野の第一線に立つ人々のルポルタージュとして、應募されたものである。そして、この觀點から改めて眺めてみると、巧拙は別として、いづれの作品もわれわれの胸を打つものを尠なからず持つてゐることが發見される。僕は先に滿洲から歸つて來てこの本の上梓に一そう責任を感じて來たと書いたが、ゲラ刷りを一讀してじつにこの事を見出したからだ。

即ち、この集に收められてゐる四篇の作品には、どの作品を取つてみても新しい時代の精神が看取される。ビュウリタニズム、克己、持續、寛容、それから異民族への溫情、さういつたものが混り合つた美しくて厳しいヒュウマニスティックな精神である。そして、どこにも近代



的憤激や憤慨に飲まれた痕がない。それでゐて、一應荒涼や不自由や孤獨に取圍まれたながら、その唯一の慰藉になつてゐるのは文化で、「雁は北へ飛ぶ」の主人公の警備隊員は匪賊地帯に駐屯しながら、「哈爾濱へ歸つたら、美しい感動的な、まるで馬の瞳のやうに澄んだ小説が讀みたい」と空想してゐるが、この主人公に止どまらずいづれの作品の主人公も、かういふ文化が慰藉の據りどころになつてゐるのである。

これが二三十代の新しい時代の精神であり、かういふ新しい精神の所有者たちが北滿の色々な分野の第一線に立つてゐるかと思ふと、何ともいへぬ心強さと感動とを覚えさせられるが、これは僕のみでないであらう。この意味で、この集は廣く讀まれていい本だと、僕は確信する者である。又、僕が偶々この集の編者を選ばれたことを光榮に思ふ次第である。

なほ、この集の特色は、四篇の作品が四篇とも題材が特異なことである。しかもいづれの作品も作者自身の體驗である事だ。「雁は北へ飛ぶ」は警備隊員の北滿の果ての駐屯地における手記であり、「地平線を行く」は農事會社員の北滿の穀倉地帯への經濟調査行の記録であり、又、「大空から大地へ」は女流飛行士の一拓士の妻としての轉身を、北滿の開拓地を背景にして

告白したものであり、「森林の記録」はこれまで猛獸吠える北滿の密林地帯に駐在する營林署員の日録である。つまり、題材内にはいづれの作品も數奇であり浪漫的であり、その意味でも甚だ魅力があるのだ。北滿の果ての特異相が分る點のみでも、この集の特色は確にある。

摺筆するに極み、これら執筆諸氏の現地に於ける一そらの奮闘活躍、並に自愛を冀ふや切である。

(十七年四月・哈爾濱日日新聞)

## 滿洲文學の新風

僕が去年の夏滿洲を旅行してゐる時、ちやうど滿洲新聞の夕刊に北村謙次郎君の「砧」や爵青君の「大觀園」が連載されてゐた。矢張りその頃、バイコフの「虎」が長谷川濤君の譯で滿洲日日新聞に載つてゐたが、僕は汽車の中で、また行く先々の旅舎で、毎日これらを愉しく愛讀したものだつた。

滿洲の印象に就いては、近く上梓するつもり「滿洲日記」で委細を盡くす積りであるが、この「滿洲日記」で僕が言はんと欲してゐるところのものは、ロシア人、天を仰ぐ民族であり、漢民族は地を匍ふ民族であり、而して日本人はその中間を縫ふヒュウマニスティックな現實的な民族であるといふことである。一應わかり切つた印象であるが、その印象を滿洲の土地を

踏むに及んで僕は改めてナマナマしく感じたのだ。

ところで、今度「在滿作家短篇選集」を通讀して、最初に強く來た印象は矢張りこの印象である。ヤンコーフスカヤの「神もなく掟もなし」やネスメエロフの「赤毛のレンカ」に滑んでゐる新鮮なロマンタイシズム——エミグラントの苦澁に満ちた暗い深刻な生活に翅を生やさして天上にまで舞上らせてゐるこの明るいロマンタイシズムは、日本人にも漢民族にも無いものである。それに、根柢に何といふ根深い樂天性を漂はしてゐることか。

尤も、譯者の上脇蓮君とは僕は二十年來の友人である。したがつて、上脇君のロマンタイツクな性癖はよく熟知してゐるが、さうかといつて、必ずしも彼がかういふロマンタイツクな作品のみを好んで選んだ譯のものでも無いであらう。矢張り、ロシア人通有のものだと僕は思ふ。

これに反して、爵青君の「大觀園」や吳瑛女史の「白骨」を讀むと、同じロマンタイツクな影が差してゐながら、飽くまで地上のラビンスに迷ひ込んでゐる面白さで、どこにも明るいものが見出されない。

「大觀園」などは、まだ少女である實笑婦と少年とのヘルビンの關係に於ける可憐な戀物語で、題材的に何か、ゴルキイの短篇を想ひ出させるものがあり、また熱情の美しさといつたものも或る程度溢み出さしてゐながら、それでゐて、精神的渴望といつたものがどういふ形に於ても發見されぬ。作者の眼、つまり、作者の眼が創りだしてゐる作中人物が、地上を御ひすり廻つてゐるのみで些かも天を仰がうとはしてゐないのだ。したがつて、享ける印象は深刻な性格とフチアテしい野性ばかりである。そして、この印象は「白骨」の場合も殆ど同じである。

但て、日本人作家の作品に眼を移すと、印象はガツリと一變する。前二者の作品に漂ふてゐるロマンティックな形、換言すれば、大陸的な茫漠感といつたものが全く見當らぬ。善意の籠つた眼で、交錯した民族心理を直視してゐる。つまり、飽く迄現實的なのだ。半島春子氏の「祝といふ男」はサンコーフスカヤの「神もなく掬もなし」と共にこの選集の壓巻であるが、根柢に於て激しい民族協和の精神に燃えながら、われわれに取つて却々正體の裡めめ滿日族といふものを執拗に追及し、或る程度その正體を把握してゐる。鈴木啓佐吉氏の「いかづち」も些か通俗味の勝つた少々甘い作品ながら、作者の態度や見方に於ては矢張り半島氏と軌を同じ

くしてゐる。

一方、北村謙次郎君の「砦」や竹内正一君の「故郷」を読むと、大陸放浪の愁ひといつたものが描かれてゐる。日本的なものと大陸的なものとのギャップである。同時に、そのギャップに潜む郷愁の描出である。即ち、大陸の現實を描きながら、なほかつものあはれを滲ましてゐるのだ。

在滿の日本人作家の作品は、その他「滿洲作家選集」や「朝會」などを覗いて見ても、つまりは以上の二つの傾向に大別できるやうに思はれる。いづれの傾向にしろ、天上にも舞上らぬし、さうかといつて地上のみを御ひすり廻らす至つて中正である。繰返して言ふやうだが、中正の態度を持って滿洲の現實を善意の眼で見守つてゐるのが日本人作家の特色のやうである。

僕が「在滿作家短篇選集」を通讀して得た印象乃至興味は、大體以上に盡きる。技法に於ては北村君が際立つて優れて居り、作品の出來榮えに於ては、既に指摘したやうに半島氏のものやサンコーフスカヤのものが傑出してゐる。

まな面白かつたのは僻背君の作品である。そして、痛感されたことは、日清露の各作家がそれぞれの民族的特徴を愈々徹底させて描いて行くならば、満洲文學は内地文壇とはまた趣きの變つた變化に富んだ豊富さを齎らすのではないかといふことである。

それから、これは特に在滿の日本人作家に限つたことであるが、滿洲文學の新風は決して内地文壇に流門を送つてゐる連中からは生まれなないで、飽くまで滿洲國に腰を据ゑるその中に身を涵して、なほかつ嚴しく現實を直視してゐる連中から生まれるに違ひないといふことを言ひたす。

といつて、滿洲文學の新風がその儘文學そのものの新風になるといふ意味ではない。また、謂ふところの滿洲文學の通弊は兎もすると素材主義に陥ることである。したがつて、一方、内地文壇に於けると同様、文學精神乃至技法をも絶えず究めなければならぬことは勿論であるが、それと共に以上の覺悟がなければ、決して滿洲文學に新風は起らぬといふ氣が僕はするものである。

滿洲文學の新風と言へば、去年の夏新京で檀一雄君がしきりに推奨してゐたので、僕はハル

とて竹内正一君に借りて僻背君の「廢墟之書」を一讀したが、けだしこの作品は今のところ滿洲文學に於ける唯一の新風ではないか。滿洲文學などといふジャンルを超えた、世紀の新しき苦惱乃至戦慄が孕まれてゐるやうに思ふ。

(十六年二月・滿洲新聞)

## 「成吉思汗」鑑賞

二七八

僕がこの夏滿洲を訪れて何に一番感動したかといふと、奉天北陵の石獸と熱河承德の喇嘛廟とであつた。北陵は清朝第二代の太宗文帝とその后とを葬つた陵で、石獸はその前に立つてゐるのだが、じつに愛情を籠めて刻まれてゐるのである。駱駝とか、象とか、馬とか、さういつた類の動物の石像だが、刻んだ者の愛情と年月がもたらした程よい鈍磨とが一緒になつて、眺めてゐると仄々とした暖かみを覚えさすのだ。

ところで、帝王の陵前に待つてゐるこれらの石獸が、愛情を籠めて刻まれてゐるといふことは、彫刻者のみに止どまらず、その時代がまたこれらの動物を愛してゐたにほかならぬ。いや、陵のぬしである帝王自身深く愛してゐたにちがひない。さう考へてくると、駱駝や象や馬

を従へて雄飛した帝王の調業なり宮闈なりが、如何に大きなものであつたかといふことがまざまざとぼんやりと來て、ひどく僕は感動したのである。

熱河の喇嘛廟を避暑山莊から望見した時も、僕は矢張り同じ感慨に捉はれて呆然としたのだ。康熙、乾隆の二帝によつて造營された避暑山莊は、共に清朝に最盛期をもたらした帝王だけあつて、帝王の名に背かぬじつに規模の大きな離宮であるが、この離宮の大きさを一そうしみみ感じさせたのは、親しく訪ねてみるといづれも一通りでなく大きな大伽藍のいくつかの喇嘛廟が、離宮から見ると渺たるバラ色の點景風物に過ぎなかつたことである。そして、東洋の色調の中に、かういふ膩つこい遙かな西域臭い風景を溶け込ませてよく調和を保たせてゐたことだ。僕は離宮の荒廢した庭園の一角に佇んで暫く呆然と眺めてゐたが、すると僕の胸に、當時の帝王の調業の偉大さが水のやうにしみ渡つてくるのを覺えたのである。

この文章の初めになぜこんなことを書いて來たかといふと、恐らく尾崎士郎の「成吉思汗」も尾崎士郎がたまたま支那大陸を踏むに及んで、僕が北陵の石獸や熱河の喇嘛廟を前にして捉へられた感慨と同じ感慨に何かを契機にして捉へられ、それがきっかけになつて生れたに違ひ

二七九

ないと思はれたからである。

「私が北京で成吉思汗の研究家である八木川丈夫を訪れたとき、彼は晋河の夕陽を見てくる  
 美しい、おそろく何處へいつても何を讀んでも君はそれ以上の收穫を得ることは出來ないであ  
 らうと言つた」と、尾崎士郎が「成吉思汗」の解説で書いてゐるのを見ても、さういへるやう  
 と思ふ。「これは違方もない放言であるが、しかし私たちが史實の泥沼から這ひあがる道は結  
 局これよりほかにはない。太陽が生命の原理だといふことと、蒙古においては人間の宍體と孤  
 獨の處から湧きあがつてくる生命力が、いかに悠久であり無限であるかといふことを意味す  
 る。この生命力の象徴がすなはち成吉思汗なのである。私はさう解釋するところから成吉思汗  
 の生涯に向つて第一歩を踏み出したのである」

ところで、尾崎士郎が「成吉思汗」を書いた動機は、いま擧げたやうな「黄河の夕陽」が代  
 表する支那大陸の茫漠感だが、この動機を一そう刺戟し尾崎士郎をしてつひに筆を執らしめる  
 に至つたものは、序文でも言つてゐるやうに、成吉思汗の「その無限にひろがつてゆく情熱と  
 野心とはもはや今日においては古典的物語ではなく、アジア民族の將來に一つの大きな方向を

指示してゐる」からである。つまり、尾崎士郎の胸奥にもともとあつた國士的なものが、支那  
 大陸を踏むに及んで、現下の未曾有の世界混亂と照應し、わが民族の方向としてたまたま成吉  
 思汗の歩んだ道を摺むに至り、尾崎士郎の「成吉思汗」となつて現れたのだ。

しからば、尾崎士郎の「成吉思汗」といふ作品の出來榮えはどうか。一言にして盡くすと、  
 面白い作品だ。讀むはうがどんなに疲れてゐる時でも、一氣に讀み通せる作品である。但し、  
 その面白さが、「黄河の夕陽」によつて作者が靈感を興へられ、その靈感が生んだ幻想がもた  
 らしたものであるかといふと、全篇が全篇必ずしもさうではないやうに思はれる。傑作から察  
 すると、大體の筋は「元朝秘史」から仰いだやうに窺はれるが、矢張り解説の中で尾崎士郎が  
 述べてゐるやうに、作者は僅力「史實の泥沼」に陥ち込むことを避けてゐるのにも拘らず、そ  
 れでも結局筋を追ふに念になつてゐる怨みがある。そして、その筋の面白さが目立つてゐるの  
 である。

もちろん、筋の面白さはばかりでなく、スコットとかバイロンとかいつた、外國の中世紀の作  
 家のロマンチックな汗流詩を聯想さす浪漫味もところどころ滲み出てゐる。たとへば、書き

出しの成吉思汗はウエルンが蕭夫のユケテレドと蜜月の楽しい旅をつづけてゐる時、突如として成吉思汗の父エスガイが現れてウエルンを攻撃して行く場面などはさうである。この場面のみに止どらず、茫漠たる沙漠や大草原を背景にして旋風のやうに舞ひかかる数々の運命的な悲劇を描いたところには、どこかにさういふ浪漫味がたゆたうてゐる。が、作者の描かうとする題材が餘りに大きなせむせむたらう、作者は知らず知らずのうちに性急になつて、十分題材その者が内包してゐる浪漫味に振り切つてゐない。それが一そう筋のみの面白さにしてゐるので。

また、「成吉思汗」の歴史は、成吉思汗の愛妻ブルテが母ウエルンの最初の夫ユケテレドの軍に擧げられて掠奪され、取返された時には仇の子供を懐妊して居り、成吉思汗が深く惱みしかもその惱みを克服するところと、少年時代成吉思汗を救ひ彼と無二の親友となつた蒙古第一の謀將チヤムカが、おのれの内部に異喰ふ悪魔のためにつひに成吉思汗から背き去り、それからはつねに成吉思汗の敵方に立廻る経緯を描いた部分とである。近代的神経を底流させて、一種の近代的悲劇感をも發散させながら、よく英雄の襟度といふものや、希臘悲劇を彷彿させる偉大なる者の悲しみといつたものを寫し出してゐるのである。

しかしながら、茲に於ても、作者は中人物の心理の變々に進入り込まないで、つまり、この作者のいつもの作品に見るやうな粘つき執拗さを缺き、筋の發展に任せてゐるところが妙ならず見受けられる。これは一人この作者のみならず、謂ふところの書下し長篇の通弊であるが、作品の前途に對する混沌感がおのづと作者を不安にして性急に追込み、上滑りするであらうか。

尾崎士郎の「成吉思汗」は初めに書いたやうに、兎に角面白い作品である。よしいま學けたやうな不満があるにしろ、尾崎士郎が解説に述べてゐる「今日の現實に當面する國民的感情の中にこの偉大なる生命力を移し植ゑ」「あらかじめ規定された英雄の模型をもつともらしく提示することではなくて、この生命力と國民的感情との有機的關係を明かにする」さういふ尾崎士郎の最初の意圖は或る程度果されてゐるのだ。そして、これと平行して、尾崎士郎の最後の目的である、成吉思汗の「偶發的な運命」が次第に「絶對的確信」に移行し、つひに「世界征服の夢」を實現するに至る経緯も、一應心理的裏打ちを伴つて頷くやうに寫し出されてゐる。

その點、まことに近ごろ見る健康で、現代に對する暗示に富んだ國民的讀物である。し

たが、成吉思汗がこれから愈々「世界征服の夢」の實現に取掛かる續篇は、われ人共に期待するところのものだと思ふが、ただ續篇に向つて望みたいことは、史實からの軋絆をより以上脱して「黄河の夕陽」から享けた靈感を生かし、或る意味で作者とうまくマッチしてゐるこの題材を、大いに作者自身の幻想なり空想なりを奔放に發揮してじっくり描いて欲しいといふことだ。

(十五年十一月・月刊文章)

## 滿洲文學雜記

### 大陸の作家

今度の滿洲旅行では、滿系の作家には誰も逢はなかつた。尤も、新京で、張學良がどこかの銀行に擔保に置いた儘逃げたといふ、乾隆帝などの下繪のある時價何十萬とかのつづれ織の豪華な圖録ができ上つたから、それを一度見て置くがいいと言つて、檀一雄君に連れられて満日文化協會に行つた時、偶然詩書に逢つたことは逢つたが、立ち話をしたまきりで別に文學談を交はしたわけでもなかつた。



しかし、大連に上陸する早々吉野治夫君から、古丁が勤めを止めて二三の友人たちと新京で出版屋を始め、現に大連にもその支店ができてゐるといふ話を知った。又、そこから稍當裏れるつもりで出した滿系作家の創作集がいづれも案外で、商賈としては、矢張り支那の赤本めいた通俗ものを出さなくてはゆり立たぬらしいので、紙の統制とあひ待つて弱つてゐるといふ事も、その時聞いた。俯背に逢つた時、ちよつとその事に觸れたら、「そのうち潰れるでせう」と言つて、俯背は笑つてゐた。一方、滿系の若い作家の中で、才能に於て一ばん前途を展望されてゐる前記の俯背は、好んで滿洲の廢頹面を描き、その中に盡いてゐる至純な魂といつたものを、近代的な繊細な精神で描き出してくるといふ風な作家なので、つまり、どこかに近代的韻殿の色調を滑めてゐるので、執筆に當つて人知らぬ苦惱もあるらしく、些か意氣銷沈の氣味だといふことを、さいきん北村謙次郎君から聞いた。さういへば、逢つた時、俯背はこの前とは違つて元氣がなかつたやうに思へた。

僕の見聞した滿系作家の消息は、以上に盡きる。古丁に逢つて呉ればよかつたと、あとになつて後悔したが、僕が滿洲で受けた感じでは、滿系文學に對する好奇心乃至興味は、一般には早

くも薄らいで來てゐるやうに看取された。

次に、日系作家のはうを見ると、この一月から『藝文』が創刊され、大東亞戰爭が始まると同時に内地のジャナリズムが南方にのみ關心を持ちだし、しぜん置いてきばりを見つて一見その存在は一そう地味になつた感があるのにも拘らず、軌道に乗つた形である。『藝文』は毎號二百五十何頁もある綜合雜誌で、次第に頁の減りつつある今の内地の綜合雜誌と較べるとへんな氣がするが、また未だに記事が玉石混淆で整はぬ感じであるが、政府の補助などもあつて基礎は固いらしく、聞いたところによると、創作の稿料なども内地の文藝雜誌よりはいいらしい。

僕の讀んで創作の範圍では、日向伸夫君の『冬夜譚』禮一雄君の『魔笛』などが力作で、また作者の才能が感じられる作品であつた。しかし、前者は、北滿の寂しい風物の中にモヒ中絶者の憐れな姿を描き出し、どこかにそこはかとなし時情を滲み出させてゐるのにも拘らず、人生的なものよりも、より以上に滿洲の特殊さといふものに作者の眼が注がれ勝ちで、それが一脈の淺さをもたらしてゐた。一方、後者は、この才能ある鬼才が、夢想のためにいつか現實を蝕まれた形で、豊かな才分を感じさせるのにも拘らず、印象が案外稀薄でリアルに迫つてこない

のは残念であつた。

この二人の他に、向ふでは、満洲に於ける随たる存在である、北村謙次郎、竹内正一の二君に逢つたが、この二人はさいきん内地に遷つて来て、こちらでもまた逢つた。北村君の近作『春潮』は、周知のやうに内地でも評判である。北村君は、近いうちに次の長篇に取りかかると言つてゐた。竹内君は近々に『哈爾濱入城』といふ長篇を上梓する運びになつてゐるが、僕は未讀である。また、さいきん『復活祭』といふ短篇集を滿鐵社員會から出したが、向ふでは相當な買行きを見せてゐるさうである。

その他、満洲では、新聞社の企劃などで報告文學が盛んらしく看取された。また、そこから出て來た『雁は北へ飛ぶ』の加藤秀造といふ人など、この作品を読んで有望な作家らしく窺はれたが、満洲では道々内地文壇の息吹きのかからぬ、かういふズブの新人が現はれてくる氣配が濃厚に見えるやうに思はれた。さうして、その時こそ、謂ふところの満洲文學が確立するのではないかといふ氣がした。

(十七年五月・日本學藝新聞)

### 滿洲藝文聯盟について

滿洲國では日本より一年早く既に去年、日本文學報國會と同じ使命を帯びて滿洲藝文聯盟なるものが誕生してゐる。尤も、滿洲藝文聯盟の場合は單に文藝人のみに止まらず、美術、音楽、演藝、映畫、寫眞などの部門の人々をも廣く取入れ、つまり一定水準に達した藝文家を綜合的に集めてゐるところが違ふが、趣旨に於ては同じなのだ。

この藝文聯盟は滿洲國弘報處が公示した藝文指導要綱に據つて設立したもので、その第一の使命はいま述べたやうにもとより大戦協力にあるものゝ、それと共に新國家の推進力として健全で逞しい、しかも獨創的な新文化の昂揚を促してゐる點や、會員に日滿系が肩を並べてゐるところに日本とは違つた特異な點が認められる。

ところで、藝文聯盟は何も無いところへ突然出現したわけではなく、その前に滿洲文話會なるものがあり、それが發展的解消をしてこの結成を見たのである。文話會はやはり政府の肝煎

できてゐたもので、日系滿洲の知識人を廣く糾合した一種の文化的友好機關であつたのだ。數年にして會員が二百名に及び、やがて前が取りにくくなつたこと、滿洲國の文化推進には結局専門家を必要とすることが分つて來たことから解消し、その中から有力分子を選抜して藝文聯盟の設立となつたのだ。しかし、この文話會運動は、日系滿洲知識人の交驛となつて滿洲國の文化界に民族協和の實を擧げた點、没すべからざる功績を發してゐる。

滿洲國の文化は正直にいつて、人的素質や現在までの成果に於てはまだ日本の水準に達するところまで行つてゐない。が、建國以前の殆ど何もなかつた時代のことを考へると、更に角、建國十年で一應文化人を網羅したかういふ確たる集團を持つまでに至つたといふことは誠に一つの驚異である。これは偏へに建國以來日本の若き知識人が理想と夢を持つて續々渡滿し、新しく文化を築き上げた結果にほかならぬ。

また、一方、この事については、滿鐵が多年經費を惜しまず文化的温床を醸成すべく努めてゐた事實も見逃がすことができない。

滿洲國文化の建國以來の急速な生育振りは、滿洲文學を一瞥すればその一端が窺はれよう。

滿洲國文化の中核的なものは何といつても文學だからだ。文話會運動にしても年度の藝文聯盟運動にしても、文學方面の人々が中心になつて活動したからこそその展開を見たのである。

建國以前の滿洲には殆ど文學といつたものは無かつた。生れてゐなかつたのである。それが建國十年の今日素質のいゝ相當數の作家が輩出し、今年の一月から弘報處の斡旋で創刊された綜合文化雜誌「藝文」の創作欄を、これらの作家の作品が埋めてゐるのだ。のみならず、新京や奉天から出てゐる滿洲國の有刀新聞の小説欄をも占有するに至つてゐる。さいきん單行本になつて内地で好評を博してゐる北村謙次郎の「春聯」が向ふの新聞に連載されたものであるのを見ても、相當な文學作品が既に生れつゝあるのがわかると思ふ。また、それはつい先程創元社から出た「滿洲國各民族創作選集」を繕ひても領けることである。

ところで、滿洲文學の特徴は、いづれの作家も殆ど一方に於て職業を持ち、創作活動が同時に却つて職業生活の活素になつてゐるのを見ても察せられるやうに、建設的で持續的で、一方、民族協和の精神に燃え、健康で悠久な精神に溢れてゐることだ。いふところの地方文學がスケイルを大きくして、茲ではハッキリ確立してゐることである。

つまり、これを見ても分るやうに、滿洲文學は取りも直さず建國後の若き其熟な渡航者によつて急速に生育したもので、ひとり文學のみに止まらず、初めにもいつたが滿洲國のあらゆる新文化がすべてさうなのだ。その點將來に思ひを致すと、甚だ心強いものを感じるのは筆者のみでないであらう。

なほ、滿洲文學の異色は「原野」「蒲公英」などの選集で内地にも知られてゐる滿洲作家たち、日系作家と譽を並べて「藝文」紙上に中國文學の流れを汲む大陸的な作品を發表してゐることだ。そして、これは他の文化面に於ても同様であるが、兩者が睦まじく提携してゐることである。

(十七年八月・國貨雑誌)

### 滿人作家の横顔

日本文學報國會主催でこの十一月三日から開かれる日、滿、支の大東亞文學者大會に出席する滿洲國の代表者は七名であるが、この内には日系側の代表者二人に「偉大なる王」の作者バ・イコフが含まれて居り、滿人作家は古丁、爵青、小松、吳瑛、の四人である。

ところで、この四人のうち、最も内地に知られてゐるのは古丁と爵青とである。これは尤もな話で、古丁はその作家的實力と學識の深さを以つて儼然滿人作家の指導者的位置に祭り上げられて居り、爵青はまた獨自な作家的素質に於て向ふでもその前途を一ばん囑望されてゐるのである。以下、以上四人の滿人作家に就いて短い紹介を試みてみる。

古丁は北京大學出身で今年卅四歳、去年まで滿洲國總務廳の事務官をやつてゐた。現在では滿文出版書肆藝文書房を經營する傍ら、建國大學の講師を勤めてゐる。翻譯されてゐる代表的作品に「原野」「平沙」がある。後者は中央公論社版。作風は現代支那文學の流れを汲むスケ

イルの大きい大陸系小説で、封建性や傳統性に富む滿洲における漢民族の大家族主義の舊家が、今日の文明開化に際會して混亂や没落を齎す悲喜劇を、やや諷刺的に執拗に描き出してゐるところにその作品の特色がある。日本語がじつに流暢で、一見豈豈な好紳士だが、胸裏にはしかし、近代漢民族特有の熱情を抱懐するかのやうである。

爵青はまだ廿六歳で、長春（新京）の中學出身、滿日文化協會勤務。紹介されてゐる作品に「哈爾濱」「大鶴園」「疎つた園庭に降りて」「山民」等がある。荒くて太い筆觸に、繊細な近代神經を滲はしてゐる所に獨目性がある。滿人作家の中で最も近代的な作家であらう。一方、流石若いだけに時代認識があり、その認識に沿うて積極的に作家的方向を摸索してゐる痕が窺へ、この意味に於ても最も將來が期待されるやうに思へる。彼も日本語は相當達者で、また素直な中にユウチアを湛へた好漢である。日本は初めてで、日本を見ることを一ぱん期待してゐる作家であらう。

小松、吳瑛、この二人に就いては、僕は逢つたとが無いので委しいことは知らぬ。小松は矢張り、古丁、爵青の一派で、彼等の機關誌「藝文志」の同人だつたこと、日本には一度來たこ

とがあること、滿鮮國境の悲惨な密輸を題材にした「人造絹糸」が邦譯されてゐること、これ位のことしか知識がない。「人造絹糸」には、確かゴルキイの初期の作品を聯想させるものがあつたやうに覺えてゐる。吳瑛は昭和八年に吉林の女學校を出てゐる。女流作家の代表として選ばれたのであらう。僕は「白骨」といふ作品一篇しか読んでゐないが、この作品は、リアリズムティックな中に中世紀風な浪漫味を混へた作風であつた。

（十七年十月・讀賣報知）

一昨年の夏、新京で、古丁、解青、それから詩人の外文の諸氏と、一夕酒を酌み交はしながら談話に耽つたが、その時、これらの諸氏の學識の深いのは驚いた。魯迅は周知のやうに作家たる一方、自國の古典にも却々通じてゐて、その方面の深い研究も相當發表してゐる。大學で持つてゐた講義も確かさういふ方面であつた。これに似た一面が、前記の諸氏からも窺はれたのである。

頃日、この夏滿洲へ出掛けた田畑修一郎に逢つたら、古丁氏は去年滿洲國政府の事務官を罷めて仲間と會資で藝文書房といふ滿文の出版書肆を始めたが（これは僕も知つてゐた）、その時、何氣なく一萬圓出資したといふ話を向ふで聞いて來て感心してゐた。その話をした田畑は、解青氏の『凍つた園庭に下りて』といふ作品を、端倪すべからざる大小説的な複雑なものを持つてゐる作品だといつて、また感歎してゐるのであつた。

田畑のこの話からも片鱗が窺はれるやうに、表面上の職業は兎に角、滿人作家は一般に餘裕のある舊家から出てゐるやうである。勿論、これには文筆だけでは糊口の資を得られぬ向ふの文壇の現状をも反映してゐる。が、彼等の學識の深さは、じつにかういふ餘裕ある舊家に人と成つたからではないかと思ふ。つまり、家には支那の古典が積んであり、それを子供の時から知らず知らず読み耽つてゐた爲に、しぜん古典に對する興味を覚え、今日見る滿人作家の學識の深さとなつたのではなからうか。

ひと口に滿人といふと、一般人はわれわれよりも文化程度が一段低い民族のやうに思ひ勝ちだが、彼等は殆どが漢民族である。知階階級に於てはなほ更である。過去に於て燦然たる文明を持ち、けふ猶その時代の量り知れざる幾多の傑れた古典を擁してゐる民族なのだ。したがつて、彼等は今日と雖も民族の自恃をば根強く持合せてゐる。田畑が解青氏の小説に感心してゐるところのものも、この民族に秘み込んでゐる過去の文明の餘映ともいふべき心情の豊かにはかならぬのだ。換言すれば古い民族の血に無意識的に流れてゐる文化の深さである。解青氏に止どまらず、滿人作家の作品の特色は、じつにそれが近代文明と衝突して醸し出してゐる混亂であり自省であり新しき希望である。

殊に、古丁氏など、ちよつとした感想や隨筆を發表しても、單なるその場の思ひ付きに終始せず、一方、じつに血肉化した古典的含蓄を見せてゐるのみならず、最近までは上海文壇の動靜や、また上海文壇が問題にしてゐた西歐文學に對しても微細な注意を拂つてゐたやうに見受けられる。さういふ新しさもあるのだ。ところで、僕が新京で彼等に逢つた時、酒興加はるに隨つて色紙を取寄せ互に詩句の撰り書きをしたか、滿人作家のうち一ばん若くて、また作品に一ばん近代色を濃らしてゐる薛青氏が、僕など判讀さへできかねる難解な美しい文字を並べた自作の詩を、次から次へと泉の水の溢れるやうに早書きして僕を驚かした。かういふ點を數へると、彼等は誠に恐るべき亞細亞の子供たちである。

われわれは彼等の文學を、滿人文學なる稱呼のもとにいくらか輕んじてみてゐる風があるが、なるほど近世文學としての出發は遙かに遅れてゐるものの、その本質にはじつに端倪すべからざるものが認められるのだ。いま舉げた傳統的な文化の根の深さである。これが時代的なものと結びついて實を結んだならば、刮目に價するものが生れてくるのではないかと思ふ。この點、われわれも亦努めなければならぬ。

(十七年十月・日本學藝新聞)

## 滿人文學について

日支事變がはじまる前後から、魯迅を筆頭に支那の現代作家の作品が際立つてわが國に紹介された。歐米の現代文學は傑れた作品が出るゝと逸早く紹介されてゐたのにも拘らず、それまで支那の作品が紹介されなかつたのは、一つは支那の現代文學の誕生が遅かつたのにもよる。が、一方に於いて、支那人が廢類民族だといふ輕侮も、妙なからず手傳つてゐたやうである。つまり、古典としては傑れたものを持つてゐるが、現代文學としてはわが國のはうが先進であり、思想的にも現在では支那がわが國に學ぶものを持つてこそ居れ、わが國の文學が支那に教へられるところのものは何も無いといふ觀念が無意識のうちにも根を張つてゐたやうだ。

ところで、日支事變を契機にして支那の現代文學が積極的に紹介されたのは、隣國でし

おも同文同種の國情でありながら、殆どといつていらいぐらゐ支那民族の内面生活に對して不案内だつたことが最大原因になつてゐる。彼等が何を考へ、如何なる目的を持つて生きてゐるかといふ好奇心が、必然的に問を擧げて來たからだ。もちろん、それには、最初にこの世紀の偉大な文藝者である魯迅が紹介されたことも契機になつてゐる。が、前述のやうに、日支事變を寫した現代支那の正體を見極めたいといふ一般の要求が、何よりもけふ見る支那の現代文藝の紹介の隆盛を促したやうである。

一方、第二次歐洲大戰が勃發すると同時に、改めて痛切な問題として民族問題が世界各國で取上げられるやうになつた。滿人文學、引いては鮮人文學がいまや文壇に脚光を浴びて登場しつつある彼が見えるのは、矢張りそのことが原因になつて、滿洲國や朝鮮を改めて正しく認識し、未知からくるギヤップを埋めたいといふわが民族の無意識的な欲求の現れではないか。その點、文學が一ばん微妙な點まで民族の特質を紹介するからである。

扱て、本論にはひらう。滿人作家の現代文學はしかしながら、さいきん大内隆雄氏の譯で滿人作家小説集「原野」が上梓されるまで全く文壇にその存在を知られてゐなかつた。尤も、滿

洲を取扱つた現代支那人作家の作品は必ずしも皆無ではない。例へば魯迅に可愛がられた蕭軍といふ作家には、滿洲の土匪を中心にして農民や土豪の生活を取扱つた「第三代」といふ長篇をはじめ、幾つかの短篇がある。が、滿洲國の建國がまだ浅いせいもあるが、滿洲國人であることを意識した滿人作家の現代文學は、「原野」が紹介されるまで、その發生してゐることすら知らなかつたのは筆者のみにとどまらないであらう。

彼の作品については後で述べるが、作品を見ると一ばん有望な滿人作家だと思はれる古丁が、さいきん或るところに滿洲文學についての一文を寄せてゐた。それを讀むと、われわれが氣附かなかつたのも道理で、大内氏といふよき紹介者を得るまでは、滿洲國でもごく一部にしか滿人作家の現代文學は知られてゐなかつたやうである。古丁はその理由として、滿系知識人が政治的な色々な事情からであらうが、むしろ無知でありたいといふ類魔的意念を抱き、讀書厭棄の風習が一般にはびこつてゐることを擧げてゐる。その結果、讀書界並びに出版界がいつまで経つてもすこしも生色を齎さない。もちろん、漢字雑誌や漢字新聞、つまり漢字文化方面を指していつてゐるのだ。したがつて、小説を書いて生計を立てて行くなどといふことは思ひも



寄らないことで、まだ職業作家は存在せず、作家志望の青年たちがそれぞれ職業を持ちながら片手間に小説を書いているのが現状ださうである。即ち、アマチュアを出で居らず、これがまた、滿人作家の現代文學の存在をばつかりさせぬ第二の原因になつてゐると堪稱してゐる。

一方、古丁は、作家が職業化して居らず型にはまらぬ素人のよさを持つてゐるところに、滿人作家の現代文學の洋々たる前途があると氣を吐いてゐるものの、正直なところまだ作品がすくなく、如何なるものを書くか、また如何に書くかは第二の問題で、今のところはみんなが兎に角書いて、何とか發表機關を見附け出して印刷にすることが目下の急務になつてゐるとも告白してゐる。そして、出来るならば、滿人作家の現代文學を滿洲國に於ける協和運動の一齒車ならしめ、その宣傳感情の方向に發展せしめたいものと、結んでゐる。

大體、古丁の述べてゐるところが、滿人作家の現代文學の偽らぬ現状らしい。古丁は北京大學出で、現在新京の國務院統計處に勤めてゐるらしいが、古丁もいつてゐるやうに、他の滿人作家たちもすべて勤人で、滿洲國官吏、會社員、あるいは小學教員だとのことである。

ところで、筆者が滿人作家や支那人作家の現代文學を纏めて讀んで一ばん痛感したことは、

彼等にまだ自意識が發生してゐないことだ。したがつて、作中人物のすべてが思考即ち行動になつてゐる。それだけ日本の作家のやうに文化に飽まれてゐないわけで、印象が直被にくる。つまり、自意識の發生に基づくモヤモヤがなく、描かれてゐる事象が鮮明に泛んでくるのだ。その代り、全體として筆觸は荒くナマで、そこにまた一種の新鮮さを持つてゐるもの、謂はゆる素材主義の作品に陥つてゐる。一方、矢張り滿人作家や支那人作家でなくては描けぬ民族の限界といつたものを痛感させるもの、いまのところでは藝術品としては未完成だ。われわれに窺知を許さぬ民族的な性格や風俗といつたものが、考へてみると魅力になつてゐるのに過ぎぬ。

次に、作品に移る。翻譯集「原野」の中で一ばんの力作であり、同時にまた一ばん問題を含んでゐるのは、翻譯集と同じ題名の古丁の「原野」である。

「この原野に於ける地主といふものはどうして出来たのか（中略）大多数は山東や河北一帯から、或ひはその地方で饑乏のために生活困難となり、或ひはその地方で毎年の災荒のために、一家なり一村なり

が、或ひは向をかつぎ往した國を背負ひ、或ひは山中を此をしたりして、北へ北へこの原野にやつて来たものなのである。(中略) 原野は平地で、肥沃だつた。土地には主がなく、其處を占めた者が地主になるのだつた。(中略) 彼等は此のやうにして山に居く、或ひは水に近く、南に面して、故本の別を切り、土を掘りかへし、家を建てたのであつた。農法は數百年の経験だつた。牛と犁があれればとかつた。原野を田に化かしむるのは困難ではなかつた。斯うして部落が出来た。(中略) 三十年、五十年と経過すると、事情は全く變つて来た。その中で買ひのや買ひのは多くの土地を自分のものとし地主になつた。その中でおとなしく愚昧なのは少しの土地も持たぬが、買はれてとなるやうになつた。

以上は「原野」の中の一節であるが、滿洲國のかういふ原野の上に立つた或る町の没落に關してゐる土豪の三代の歴史を、現代の面を中心にして描いてゐるのだ。物語は三代目が日本の大學を卒業して歸郷するところから始まつてゐるのだが、一家の主權を未だに握つてゐる祖父は、彼の代に原野に移住し苦力を大勢傭つて材木を切り出しそれで一家の財産をつくり上げたのであるが、いまや若い姿を引張り込んで浪費生活を營んでゐるのだ。そして、官吏上りの二

代目の父は亞米利加の大學を出てゐるのにも拘らず、何もしないで阿片に沈溺してゐるのである。三代目の長男は日本の大學で碌々何も習得せず麻雀だけ巧くなつて歸郷するのであるが、傳手を求めてその町の官廳の屬官に就職する。が、むかし兩親に強制されて餘儀なく貰つた古風な細君が嫌らず、上役の娘と戀愛遊戲に耽る。かくして揃つて不生産的な一家は地主としての収入だけでは次第に生活費が足らなくなり、衰運が色濃く漂ひはじめが、滿人の土豪らしい因循な習慣や傳統に縛られた勞働氣と共に、以上の一家の廢頽的な生活を描き出してゐるのだ。

「要するに、これら一群の人間を、人類は何も切に必要としたのではなかつた。だが、彼等はみな生存してゐた。——これも人類の歴史の一段落であらうか？」

作者の古丁は最後にさう書いてゐるが、滿洲國建國と共に押寄せて來た新しい文明のために、いまや將に亡びなんとしてゐる古い文化を、古丁は、つまり、むしろ亡び去ることを賛成

しながら半柱に寫してゐるのだ。スケールも大きく、作中人物も類型的で粗雑ながらこれぞれ描き分けられ、讀みごたへのある作品である。何よりも滿洲國の中産階級、滿、氣質といつたもので、風俗習慣といつたものが執拗に描かれてゐて、それらがわれわれの興味を惹くのである。

ところで、滿人作家の現代文學を通讀して一ばんに氣が附くことは、滿洲國に於ける中産階級の頹廢である。これは支那に於いてもさうらしいが、生活に追い見送しがなくその日暮しで、しかも刹那的な享樂のみを追つてゐるのだ。つまり、習慣と傳統に縛られて身動きがならなくなつてゐる解に、それらを破らうといふ意力を全く缺き、反つて頹廢に陥ちてゐるのである。そのおもな具體的な原因は何かといふと、早婚と蓄妾制度である。「原野」にはそれらが意識的には書かれてゐないが、矢張り書かれてゐて、一家の没落の主要な原因になつてゐる。

何體故の「嫁」といふ作品には、その早婚の弊がうまく書かれてゐる。併て朝鮮もさうだが、滿洲國の地方中産階級では男が八九歳で結婚するらしいのだ。この作品の主人公は十二歳で結婚するが、いひなづけになつてゐた嫁といふのは廿一歳なのである。主人公は色氣など

のないまた遊びたい盛りの子供なのに反して、嫁は成熟盛りなのである。したがつて、二人の仲がうまく行く筈はなく、嫁はその家の雇男に戀ころを抱くが、若い時分に同じやうな事情から不義を働いたその村の一人の老婆が未だに村の人々に蔑まれてゐるのを見て、その戀を思ひ切るといふのがこの作品のテーマになつてゐるのだ。かういふ早婚が將來如何なる弊を齎すかはいふまでもないであらう。いま抗日戦線をどつてゐる支那人作家の郭沫若は自傳的作品の「黒猫」で、矢張り自分の早婚の懺悔話を書いてゐるが、その中で、親同志が勝手に取決める婚約と早婚との弊を擧げ、「二千年來中國人はこの二重の軟禁の下に縛られ、あらゆる民族の精華を、人生の精華を悉く消磨し盡したのではないかと、嘆いてゐる。

遼丁（のちの爵青）の「哈爾濱」といふ作品は散漫で決していい作品ではないが、生きる焦點を掴めないで煩悶してゐる大學出の家庭教師を國際都市を背景にして描いてゐて、その意味ではちよつと異色のあるものである。富豪の家に寄寓して子供たちの勉強を見てやつてゐるその青年は、その家の第三夫人に強制的に誘惑されて一そりの近代不安を覺えるのだが、その第三夫人といふのは、ダンサー上りの全くの娼婦タイプで、享樂と蓄妾が生活なのである。そ

して、その家の生活が厭になればいつでも飛び出すつもりであるのだ。「原野」に出てくる即父の第三夫人も浪費家の上に全くの暴君で、最後には自分の所有になつた寶石類や毛皮や衣服を拵帯して情夫と雲隠れしてしまふ。總じて第二夫人とか第三夫人とかいふ者は、冷血な娼婦タイプらしいのであるが、かういふ善妻制度のできた遠因を探ると、前に述べた結婚制度である。ところで、こんな女が家庭を調歩してゐる結果は、類牌以外なものをも驚さないことは火を見るよりも明かではないか。

すこし方面を變へよう。翻譯集「原野」に收められてゐる滿人作家の作品の中で傑れてゐるものは、下層階級の人間を取扱つた短篇だ。滿人の農園の白色奴隸になつてゐる、貴族崩れの白系ロシア人の家庭を描いた田兵の「アリョーシヤ」、ルンペン文士を中心にして二人の苦力と一人の淫賣婦との仲のいい生活を取扱つた遠原の「隣り三人」、滿鮮國境の悲惨な密輸をテーマにした小松の「人造絹糸」、これらの作品にはゴルキイの初期の短篇にでも見るやうな、人生詩的なものに裏まれた深刻さがある。そして、何か大陸的な悠久さを感じさせる。

大陸的な悠久さといへば、紡績女工の市井事的な悲劇を取扱つた夷隨の「黄昏の後」にして、

奇麗なホタルのボーイが扱て結婚すると、次から次へと子供ができて貧乏人になり下がつてしまふ。何體徴の「彼の奮へ」にして、また、市井的樂天家の老下僕を寫した盤古の「老劉の正月」にして、どこかにそれが滲んでゐる。そして、作品としては粗笨であつたり、低調であつたりしても、それが一抹の魅力を齎してゐる。

滿人作家の現代文學の特徴ははじめに書いたやうに、要するに素材の面白さである。古丁が滿洲文學について述べてゐた抱負の中に、協和運動の一齒車たらしめたい云々とあつたが、まだそれは飽くまで抱負にとどまつてゐて、「原野」に收められてゐる作品には、滿洲國人たる意識も殆ど出てゐない。しかし、素材の豊富さや面白さから見ても、これからの發達は容易に期待できるとおもふ。

(十四年十二月・早大文學講義)

## 朝鮮作家論

三一〇

ごく最近まで、わが國に於いて朝鮮作家として認められてゐたのは張赫宙ひとりであつた。ところが、日支事變や第二次歐洲大戰の勃發と共に、民族の問題が改めて一般の關心を喚び起し、それが契機になつて、支那の現代文學や滿洲作家の作品が紹介された。それらの民族を包摂するために、それらの民族を理解しようとしてゐる一般の氣持を反映してであらう。この浪に乗つて、朝鮮文壇に於ける現代朝鮮作家の作品も紹介されはじめた。第一次の朝鮮藝術賞を授賞された李光洙の「無明」などがその皮切りであるが、最近には朝鮮作家の選集が二冊

まで述ぶ本屋から翻譯して上梓された。噂によると、他からもまだ續々と出るさうである。

ところで、いままでに紹介されてゐるそれらの作品に眼を通すと、傑れた朝鮮作家は決して張赫宙ひとりでないといふことがわかる。もちろん、張赫宙も傑れた朝鮮作家のひとりに違ひないが、張赫宙のほかにも傑れた朝鮮作家が相當存在することが窺はれるのである。それでゐてまた言つてみれば手近な存在なのにも拘らず、それらの傑れた朝鮮作家の作品が、どうして今日まで内地に紹介されなかつたのであらうか。一つは適當な紹介者がなかつたせいもあるだらう。が、それは末のこと、つまり、朝鮮作家側が積極的にわが文壇に働き掛けたならば實現できたことである。考へてみると、その最も大きな原因は、彼等が朝鮮語に執し、朝鮮語以外には彼等の文學の微妙な點が表現されぬと考へ、それ以外の發表方法は一顧だにしなかつたからではなからうか。

そればかりではない、朝鮮文壇の作家たちが執拗に朝鮮語に執著するのには、ほかに深刻な原因があるのだ。朝鮮の今日の内訌、體運動と結びついて、近く朝鮮に内地と全く同じな義務教育が實施されることになつてゐる。この義務教育が實行されると、三十年後には朝鮮語の

勢力は今日の半分に減退する。更に三十年経つと殆ど衰滅に歸する。かういふ杞憂からも、朝鮮文壇の作家たちはアイランド人が替てケルト語を守つたやうな、ますます朝鮮語に傾りつてゐる傾きがあるのだ。

張赫宙は現代朝鮮作家のうちでは一ばんわが國で有名である。また、相當な仕事もしてゐる。それにも拘らず、朝鮮文壇では努めて張赫宙の存在を無視しようとしてゐるといふ。もちろん、これには、張赫宙が久しく離れてゐて、彼が現在の朝鮮の現實を知らぬといふところから起る輕蔑感や、朝鮮作家のうちわが文壇でひとり有名になつてゐることに基因する嫉妬感、さういつたものも原因になつてゐる。が、最大の原因は、張赫宙が朝鮮語でなくして日本語で書いてゐることに他ならぬ。朝鮮文壇の作家たちの以上のやうな朝鮮語に對する激しい執著が、張赫宙が日本語で作品を発表してゐることが何よりも嫌りぬのである。

しかし、朝鮮文壇に於ける第一人者である「無明」の作者李光洙が、皇紀二千六百年を期して許可された、朝鮮名から内地名への改姓に率先して參加したのを見ても疑はれるやうに、日支争闘が長引くに隨ひ、朝鮮作家たちが次第に内鮮一體運動に對して積極的になりだしてゐる。

る徴が具受けられる。一方、わが國に於いても、初めに書いたやうに、民族の問題は一般の注意を惹きはじめると共に、いまままでつひぞ氣附かないで見過されて來た朝鮮文學も紹介された。最近の朝鮮藝術賞の設定などが拍車になつて、いまや朝鮮文學はわが國のジャアナムの脚光を浴びんとする機運にまで達してゐる。この兩者の歩み寄りには、結果としては朝鮮文學が單なる朝鮮のみの存在として止どまらず、ひろく日本文學として抱合される新しい段階に到達するのではないかと看取される。そして、これは日本文學のためにも一段と視野の擴充を齎す意味に於いて喜ぶべき現象だと思はれるが、それと共に、漸く近代文學の萌芽期を脱した現代朝鮮文學は、かういふ飛躍が一そのうの刺戟になつて、いよいよ内地文壇に對抗する成熟期にはひるのではないかと觀測される。

## 二

張赫宙が去年「文藝」紙上に發表した「朝鮮の知識人に訴ふ」といふ公開狀は、朝鮮の知識人のあひだに相當大きなセンセーションを生んだらしいが、この公開狀は、現て朝鮮作家を論

じようとする場合にも、示唆に富んだなかなか重要な鍵を握めてゐる。なぜかといえば、張赫宙がこの一文に於いて突いてゐる朝鮮民族の性格的な缺陷は、同時に張赫宙をはじめ多くの朝鮮作家たちの作品の題材になつてゐるからである。張赫宙はその公開状に於いて、内鮮一體運動に努力するしか朝鮮民族のこれからの大衆的な生き方がないと斷言し、朝鮮民族の永久的に造れることのできぬ現在の運命を、さういふ運命を齎した朝鮮民族の性格的な缺陷と共に説いてゐるのである。そして、朝鮮民族の新しい運命を開拓するためには、性格的なそれらの缺陷を克服して内地人に同化するしか道が残されてゐないと、朝鮮文學の將來にも觸れて結論してゐるのである。

ところで、張赫宙の突いてゐる朝鮮民族の性格的な缺陷を挙げると、まづ第一に激情性である。次に、落着きのなさである。その次に、正義心の乏しいこと、それから最後に嫉妬心の強さである。張赫宙の言葉に従へば、その激情性は華美な性と共にフランス人によく似てゐるが、しかし、フランス人の激情は、科學性を伴つた建設的で向上的な激情なものにも拘らず、朝鮮民族の激情はただ本能的なそれであつて、しかも氣紛れだといふのである。考へてみると、

張赫宙が朝鮮民族の缺陷として第一に擧げてゐるこの氣紛れな激情性こそ、朝鮮民族を貫くじつに最大の弱點で、それに續けて張赫宙が指摘してゐる落着きのなさや、正義心に乏しいことや、また嫉妬心の強いことなどは、いはばこの氣紛れな激情性から派生した屬性である。すなはち、氣紛れな激情といふものは、客觀性のない私情の強さから誘發される。そして、さういふ私情の強さは、同時にまた、張赫宙の擧げてゐる朝鮮民族の諸缺陷の原因になつてゐるからである。

さきにちよつと觸れたやうに、扱て現代朝鮮作家たちの作品を通讀してみると、大部分の作品は、意識するとなしに拘らず朝鮮民族のいま述べて來たやうな性格的な缺陷の剔抉に筆が集中されてゐる。そして、作品の中に剔抉されてゐる民族的な特異性が、われわれの興味を惹くのである。のみならず、朝鮮文學の第一の特色も亦じつにその點に介在してゐるやうに思はれる。その中で、一ぱん意識してその剔抉を試みてゐるのは張赫宙である。張赫宙は朝鮮を離れてゐるため一そうその民族性が客觀的に見え、したがつて反省せられることが多いのであらう、根柢に於て前記の公開状が吐露してゐるやうな民族改造を夢想しながら、執拗にその剔抉

を試みてゐる。張赫宙の作品の特色はほかにもあるが、その最も目立つ特色は、取りも直さずいまいつた一種の理想主義の上に立つた民族性の剔抉である。そして、この傾向の作家たちの中では、朝鮮文壇の作家たちが何といはうと張赫宙が第一人者である。

張赫宙の代表作は「權といふ男」「ガルボウ」「女房」などといふ作品だと思ふが、これらの作品を讀むとそのことがよく分る。すなはち、「權といふ男」では、校長と三人の教員しかぬない片田舎の小學校で教員してゐる權といふ男が、たかがその首席教員の位置を占めるために、いろいろと危険な陰謀をめぐらして執拗に努力する経緯を描き、我執を通すためには盲目的に激情になる朝鮮民族の性格を剔抉してゐるのである。「ガルボウ」に於いても同様である。美貌な淫賣婦をめぐつての村長と巡査との執拗な葛藤を取扱つてゐるのであるが、二人とも分崩盛りのにも拘らず、しかも二人の激情は一人を死に至らしめる格闘にまでおひやるのだ。また、「女房」では、しばしば生活的に死地に追込まれながら、なほかつ濼費癖のある淫蕩な女房を捨て切らぬ偉れな男を描いて、激情による民族的な濁漫性を暴露させてゐるのである。ところで、張赫宙が傑れた作家である所以は、さういふ朝鮮民族の性格的な缺陷を剔抉しながら、

ら、しかもよく民族を超えた人間性に觸れてゐることである。つまり、普遍的な人間の弱點を突いてゐることだ。

### 三

現代朝鮮文學のその次の大きな特色は大陸の匂ひがすることである。張赫宙がこの春東京朝日に書いた「朝鮮の文學界の現状」なる一文を見ると、現代朝鮮文學はこの三十年のあひだに日本と西歐の近代文學の影響下に急速に成長したものださうで、べつに支那からは影響を受けてゐないらしいが、それでゐて大陸の匂ひがするのはどうしてだらう。民族的な血の繋りが濃いせぬだらうか。いま觸れて來た民族的性格を顧みても、また張赫宙が作品の中で追及してゐる執拗な諸性格を見ても、日本よりはむしろ支那に近いやうに思はれる。第一次の朝鮮藝術賞を授賞された李光洙の「無明」は、複雑さや肌理の細かさからいつても、現在内地に紹介されてゐる朝鮮文壇の作家たちの作品の中では抜群のもので、李光洙が現代朝鮮文壇の第一人者であるといふことが十分現はれる作品であるが、眼に附く一ぱんの特色は矢張りどこかに大陸的



な茫漠感が滲み出てゐることだ。牢獄の病室に繋がれてゐる四人の群を描いてゐるのだが、そして、四人に雖ちても我執を捨て切らず、一そふ互ひに虚飾を張つてゐる淺ましさを、張舜宙と同じやうに民族性を剔抉しながら曝き出してゐるのだが、現實と夢想とが入り混つてゐる四人たちの虚飾振りに、じつに茫漠たるものが感じられるのである。つまり微塵だに内省がなく虚構がいつか堂々と眞實に拘り換へられてゐるのだ。そして、かういふ大陸的な信ひを附けてゐることは、他の朝鮮作家の作品の場合も同様なのである。

例へば、李孝石の「蕎麥の花の頃」や「豚」を見るといい。前者では、律氣な市場廻りの行商人が、若い時分にただ一度行きずりの戀をしたことがあつたが、知らぬうちに子供ができて居り、若者に成人してゐるその息子とたまたま行商の途上で邂逅することを描いてゐるのだが、現實を超えた滯澁感が作中に挿曳してゐるのだ。また、後者では、貧しい百姓の長男が自分には喰ふや喰はずで一匹の牝豚を大きくするが、乏しい金を持ち出して種付けを済まして歸る途中、放心してゐたためにその牝豚を汽車に轢かしてしまひ、茫然とする様を寫してゐるのだが、それでゐて、この悲劇の中には、間の抜けた大陸的なニューモアが幅廣く流れてゐるのであ

る。その他、安慎甫の「軍鶏」でもさうだ。飲んだくれの、そのために製綿工場をくびになつて生活に困つてゐる男が、自分の子供が居酒屋の軍鶏に突つつかれたのを口實にして、その居酒屋へゆすり酒を飲みに行く経緯を描いてゐるのだが、底抜けの樂天主義が作品の底に口を開けてゐる。

殊に、金東仁の「詰い山」や李泰俊の「農軍」を読むと、一そふその感が深い。「詰い山」は、滿洲に移住してゐる鮮人部落を背景にして、暴力渡世の無頼漢を描いてゐるのだが、何を考へてゐるか分らぬ無頼漢の茫漠たる性格をいきいきと寫してゐるのだ。彼は結局部落民を背め抜いてゐる地主の滿人の家に揉り込み生涯を果たすのであるが、そして、息が絶ゆる時、さういふ無頼漢でありながら、もう一度ふるさとの詰い山と白い着物を見たいと呟き、作品としても短いながらも哀切味の溢れた傑作のものである。が、この作品に捉へられてゐる民族的な茫漠感はいつに特異なものである。李泰俊の「農軍」は、張作霖政權時代の滿洲に於ける朝鮮移民を描いた力作であるが、官民の迫害の中に、移民たちが團結して水田に引く水道を營々として掘つてゐる姿を寫し、この民族が一面に持つてゐる逞しい執拗な生活力を泛び上らせてゐる

のだ。そして、その執拗な生活力は、支那民族や満洲民族のそれを聯想させるのである。

朝鮮民族の民族的性格が日本よりもむしろ支那に近いと書いたが、朝鮮文學を通覽すると、以上のやうに、何れの作品も大陸の匂ひを芥々として發散してゐるのを見て、容易に窺はれるやうに、文學自身もわが文壇の作品よりも、現代支那文學や滿人文學のほうに近似性が思ひだされる。のみならず、どちらかといふとまだ素材主義で、強烈な自意識が發生してゐない點もよく似てゐる。そして、その將來性は、じつに如何にしてその大陸的なものを完成させるかといふ一點に懸かつてゐるのではないか。ところで、朝鮮文學がたゞ現代支那文學や滿人文學と愛つてゐるところは、一眠の哀調があることだ。俞鏡午の「滄浪亭記」や「秋」を読むと、前代の生活を懐しむ氣持がそこはかとなく滲み出てゐるが、さういふ哀調がどこかに尾を曳いてゐることだ。そして、それが大陸的なものと共に、現代朝鮮文學の大きな特色となつてゐる。

## 四

朝鮮文學中で、しかしわれわれに一ばん關心を抱かせるのは、朝鮮人との接觸面を描いた作

品だ。つまり、今度の芥川賞の有力な候補になつた金史良の「光の中に」が代表する傾向の作品だ。われわれと交渉があるからである。張赫宙は前記の「朝鮮の知識人に訴ふ」の一文の中で、朝鮮が日本の植民地になつてから、朝鮮民族にいままで無かつたひねくれ根性が新しく發生したことを指摘してゐる。そのひねくれ根性は内鮮人間の意志が十分疏通しないところからと、朝鮮人の被征服者の意識とから發生したものであるが、「光の中には、さういふ民族神經を扱つてゐるのだ。張赫宙は朝鮮に移住した内地人のあひだに文化ができ、また朝鮮人が内地化すれば、このひねくれ根性は次第に影をひそめるだらうと言つてゐる。「光の中に」もいはばその線に沿うて書かれてゐるのだが、江東を背景にして、内地人に對する遠慮乃至阿諛から、反つて反撥するに至る朝鮮人同志の民族的心理を描いてゐるのだ。すなはち、内鮮人間の混血兒であるならず者の父と、鮮人の母とを持つた子供は、始終自分が朝鮮人に見られはしないか、そして、そのために虐められはしないかと脅迫觀念に陥り、内地名でとぼつてゐる鮮人教師を、さういふ神經から逸早く朝鮮人であることを看破し、逆にその教師をみんなの前で鮮人呼ばはりして自分をカムフラージするのである。

張赫宙の「憂鬱人生」俞鎮午の「金誨師とT教授」も、「元の中に」と同じ傾向の作品で、その中に描かれてゐる、朝鮮民族の無意識的に運められてゐる民族的な卑屈な神経は、われわれのこころを聳くする。「憂鬱人生」は、鮮人の父と内地人の母とのあひだに生まれた男の子が、父の仕事の關係で小學校を轉々するが、鮮人だといふのでその度毎に新しい仲間から受ける苦痛を描いてゐるのだ。一方、民族的な反撥から喧嘩の絶え間のないその子供の團圓の生活や、さういふ兩親に對する子供の落着きのない不安な氣持をも併せ寫してゐるのである。ところで、その子供は、ちよつとでも内地人から素直な厚意を示されると結ぶやうにそれに飛び附いて行き、われわれを感動させるのだ。俞鎮午の「金誨師とT教授」は、朝鮮の或る専門學校のドイツ語教師として赴任して行つたインテリ鮮人が、同僚がすべて内地人であるところから感じる民族的孤獨や民族的薄を、植民地的な醜い學校内部の派閥争ひと共に描きだし、つひに背迫観念にまで陥る民族神経を細かく追及してゐて、われわれに迫るものがあるのである。この俞鎮午といふ作家は、前述の「滄浪亭記」や「秋」を見ても分るが、主として朝鮮インテリの民族神経を取扱つてゐるところに特色のある作家である。のみならず、作家的手勢も、張赫

宙や李光澤に匹敵するものを持つてゐる。

さきに朝鮮文學の將來性は、一に特異な大陸的なものを如何に完成さすかに懸かつてゐるといつたが、考へてみると、一方、かういふ内鮮人間の接觸面にも、まだ幾多開拓すべき新しい領域が残つてゐる。いや、いま挙げた作品はいはばその先驅的作品で、この方面の眞の開花はじつにこれからだといふ氣がする。それは當然張赫宙がいつてゐるやうに内鮮一體の線に沿つて發展する文學だが、しかしながら、これが結實の嚆には、大陸的なものと同じやうに、朝鮮文學に獨自の特微的な特異性を齎すことは確かである。以上の作品を見ても既に十分その特異性が看取されるが、初めに書いたやうに、朝鮮文壇の機運が内鮮一體に積極になつてゐる今日、その方面の將來性はまことに期待すべきものがある。

最後に、現代朝鮮文學の藝術味乃至技巧の點を述べると、前にちよつと觸れたやうに、現在ではまだ素材主義を脱してゐない。さうでない場合は、金東里の「野ばら」といふ作品がその見本を示してゐる初期の素朴な浪漫主義か、ボオ張りの李泰俊の「鴉」といふ作品がよく代表してゐるやうに、外國作家の形骸的な模倣である。ただその中で、張赫宙や李光澤や俞鎮午が

盛かに執拗なりリズムから粘つこい獨自な味を出してゐるに過ぎぬ。張赫甫は「朝鮮の文學界の現状」の中で、朝鮮作家は一體に浪漫的特性を持つてゐて、感性が豊富なことを指摘してゐるが、現在内地で紹介されてゐる作品では、反つてさういふ特質が露はに出てゐる作品ほど感銘が浅いが、これは朝鮮語でなく翻譯で讀むせむだらうか。それとも時代のせいで、今のところ一時的に特質が十分發揮されないものであらうか。翻譯をとほして感知される現代朝鮮文學のその方面の特徵は、強ひて挙げればリズムに執拗な點があることである。

(十五年四月・公題)

## 滿洲文學通信

## 大陸と悠久感

北村 謙次郎 著へ

目を繰つてみると、今日あたり新京に歸り着かれたのではないかと思つてゐます。先日、陸軍の報道部から飛行機で滿洲へ出掛けた網野菊さんから、旅の便りを新京から貰ひましたが、その中に「こちらは今ライラックの盛りでございます」と書かれてゐました。この何気ない文句に接した時、僕はこの三月の初めに滿洲から北京に立寄つた時、北京の一ばんいい季節はライラックの咲く舊曆の三月下旬ですよ、或る支那の大人が象のやうな眼を心もち輝かせながら

教へて呉れたことを、ふと憶ひ出しました。しかし、貴兄が新京に詣り着かれた頃は、自然の推移の激しい滿洲のことですから、もうライオウツクの花は散つてしまつてゐたかも知れませんね。それでも、この頃はだんだん夕方の薄明が長くなつて来て、爽味の氣にみち、滿洲の一番いい季節であることは變りないでせう。

こゝなひだ貴兄が御宿海岸へみえたとき聞くのを忘れましたが、僕たちの顔を見ろと直ぐしたり顔で苦言諷に支那の夜を掛けた、亭主が日露戦争時代ロシア側の勇士だつたとかいふ、寛城子の喫茶店の幼い癖に小ましくやられてゐたロシア娘はまだ健在ですか。それとも、もう姉妹のやうに、町なかの大きなロシア菓子屋へで勤めるやうになりましたか。あれは一昨年夏でしたね。前置きが長くなりましたが、僕はいま楡の若葉に埋もれた寛城子のロシア人町を憶ひ描きながら、その中に貴兄を置いて、じつはこの手紙を書きだした次第です。

貴兄は久振りで内地へ歸つて来て、改めて内地の自然の繊細さに心打たれたが、しかし、そのうちに繊細なるために却つて苛立しさを覚えて來たと、「異郷の鬼」といふ感想の中で書いてありましたね。これを読んだ時、貴兄がつい先だつて御宿海岸の砂丘を歩きながら、長く滿洲を離

れてゐると、あの馬糞の匂さへ何となく懐しくなつてくる、そんな風なことを僕を顧みて嘆いたことを憶ひ出しました。あの文章の中には、異郷の鬼たらんことを冀ふやうになつたのは、現實からの脱出、つまり放心を求めて、その中に心情的な青春を永久に保ちたいといふ願願に基づいてゐる、といふやうなことも書かれてゐましたね。そして、前者の感想は、後者の願願が事實としていくらか實現しかつたから生れたのではないかと、僕は推測しました。貴兄の「春聯」には、後者のさういふ實感がボンヤリながら息づき、それが魅力になつてゐるからです。

僕は一昨年夏は、北は興安嶺の麓の巴林<sup>バリン</sup>までしか行きませんでした。この二月の旅では、貴兄も知つて居られるとほり、黒龍江を隔ててブラゴエチエンスクに臨む國境の町黒河まで足を延ばしました。その時、幾時間も幾時間も、枯木と狼やノロの足跡のみの荒涼たる白一色の高原を辿つて行つた場合、色彩的なロシア風の黒河の町の出現に接した時には、何か一種の深い夢幻を感じました。睫毛が直ぐに凍る零下廿何度といふ酷寒で、しかも、一點の雲もない青空の下に太陽が輝いてゐるといふ異常な中で瞥見しただけに、一そうさういふ感じを享けたのかも知れませんが、誰かに聞いた、蒙古の砂漠の中でふと美しい喇嘛廟を望見した時の寫ま

も、こんなではないかと想像しました。

ところで、僕がなぜこんなことを書いて来たかといふと、今度の二度目の旅で、滿洲の魅力といつたものを、漠然とながら身にしみて感じたことをいひたかつたからです。「時として郷愁のごとく僕を訪れる自然歸化の情感」——現實から脱出を冀ふ放心をば、貴兄はこのやうに説明してゐますが、滿洲には、この自然歸化の情感をば満して呉れるものが確かに至るところに轉がつてゐますね。そして、それが今度の旅で僕のところを何となく郷愁のやうに益々誘ふたのです。黒河の町を瞥見した時もさうでしたが、一昨年の夏、熱河承德のバラ色の喇嘛廟を遺望した時も、一種の夢心地に似た放心を味はひました。また、今度の旅で、齊齊哈爾の旅舎でたまたま逢つた或る若い地質學者から、興安嶺の風物や、そこに棲む馬オロチヨンの話を聞いた時も、何か原始生活への激しい憧憬の念を掻き立てられました。

その匂を嗅ぐとオロチヨンの馬が狂ひ出すといふ、罽が解けて山藎の燃え出る興安嶺の聲といふのはどんなに凄じいものでせう。雉の足の付いた白樺製の搖籃で、狼、ノロ、馬、などの木皿を手にして幼年時代の日々を一人で送るといふオロチヨンは、さて成人すれば、何を考へ、何

を夢みて生きてゐるのでせうか。興安嶺の話をして呉れた若い地質學者は、またホロンバイルの高原の話もして呉れました。海は眞青な水が大空まで續いてホロンバイルの野原のやうでした。——これは、貴兄も多分しつて居られると思ひますが、初めて海を見た蒙古人の女の子の綴り方の一節です。そのホロンバイルの高原では、夏、太陽はあつといふうちに昇天してしまふさうですが、すると、とある砂丘の蔭にある沼に向つて、何百頭といふ放牧の馬か羆を風に翻へしながら四方から水を呑みに駆け集つて来て、じつに壯觀を極めるといふことですね。それから、日没が美しく、海のやうな高原の一面の芒が落日に染まつて、まるで高原一帯に燈火が輝きだしたやうだといひますね。

僕が滿洲を旅しながら、以上のやうな場合、こころの痺ひれるやうな激しい郷愁に似た感情を味はひ、そして、滿洲といふ土地に對してだんだん強い牽引を感じて来たといふのは、つまり、何か心情の青春を蘇らせて呉れる悠久なものに觸れたからではないかと思ひます。また貴兄が謂はゆる自然歸化の情感が満たされるやうに思ひ込み、異郷の鬼に化する覺悟で、雲水の生涯を思ひ返、べながら滿洲に腰を据ゑたといふのも、じつにこの悠久なものを滿洲に見出したから

ではありませんか。同時に、そこに創作の據りどころを發見したからでせう。いま内地の文學作品で一ばん缺けてゐるものは何かといふと、一ばんこの悠久感ではないかと思ひます。この悠久なものへ響け込むといふ新願は、表面まう見えても決して現實からの逃避でも隠遁でもないと思ひます。文學作品に、もし片影でもいいからその悠久なものを生かし切れたら、並にわが民族へ新鮮な力の泉を興へることになるのではありませんか。そして、今日ほどこれを切望してゐる時代はないではありませんか。この意味で、貴兄をはじめ、在滿の作家たちに期望を抱くと共に、その自軍を興ふや切なるものがあります。

#### 北村謙次郎君から

寛城子と房總といふ地名の取合せは、いまのところちよつと唐突の感じが強く、一般の感情の中へは素直に溶けこんでくれさうにない感があるけれども、二つの地名を無理に組合せようとする僕自身には、復讐の皮肉を籠めた意地悪な喜びといつたものが感じられます。復讐の皮肉は、もとより僕自身に向けられる批評の鞭であります。そして此のあまり通りのよくない

地名の組合せを、さりげなく通用させてやらうと願ふところに、幼げな僕の喜びも動いてくれるわけなのです。貴兄には、よく分つて貰へることでせう。

寛城子に住ひ、五年の間に、一緒に住んだ多くの知友はすべて散り散りに去つて行きました。最近、東京へ移つた檀一雄君を最後として、いまはもう誰もここには残つて居りません。御手紙にあるとほり、楡の木蔭のふかい、いちばん爽快な季節だといふのに、一人居る感情は秋の寂寥に通ふものがあります。愚痴を書く氣でこの手紙の筆をとつたわけではないが、これはつまり鬼の眼に涙といふところで、異境の鬼のべそを搔いてる姿とお笑ひ下さい。

だが、飲み相手がゐなくなつたのを寂しむといへば通俗に過ぎようけれども、この寂寥の奥には無視しがたい心情の屈折があるともいへさうなのです。純な作家に、何としても贈へ切れぬ魂の嘆きが、そこにあるやうなのです。檀君なども、よく讀してゐましたが、傳統の場を與へられぬわれわれの文學といふものが、いつたい歴史の何處に根を下すのか、それはまるで初めもなく終りもない浮草の飄りなさではないかといふのですが、かうして窓外を往來する滿人たちの姿を眺め、乾いた風が沙塵を揚げるのを眺めながら机に向つてゐると、それらの嘆きが



全く眞感として迫つて来る。文學といふものは、師匠や先輩に守られた安全地帯にあつて、そこに待つておればちやんと電車のやうに走つて来てくれるものなど考へるわけではありませんが、六月の柳絮の降る異境風景の中では、何か文學の實體はペラペラに解體し、政治とも、民族とも、文化とも、何ともいひやうのないチグハグで掴まへどころのないものに還元されてしまひさうな類りなただけが残るのであります。

貴兄はちやんとそれらのことを見通した上で「心情の青春を蘇らせてくれる悠久」なものによつて、そこに「創作のよりどころ」を見出して行く生きかたを指示してくれてゐます。しかし、白状しますが、僕らにすでにそのやうな確かな據りどころ、心かまへといつたものが出来上つてゐるかどうか、顧みれば一種の疑惑に捕へられずにはゐられません。すべてあてどない特徴が多すぎ、結實として見事な系列に加へるべき作品の數に乏しい憾みがあります。せいぜい生活の據りどころは見出し得ても、文學の據りどころは發見されないといふのが、滿洲作家の現状なのではありますまいか。自らを昇しめる言葉のやうに聞えましたが、どうか聞かずに済ませて下さい。でも、とにかくここから出發する、結實への努力だけは見出すことが出来ると

しよとて、今は満足したいと思ひますから。

前置きが長くなつて、筆が妙な自己辯解のやうな方に逸れ過ぎました。こゝらで、またもとへ戻りませう。最初に、僕は日本と滿洲との近さを誤ひたかつたのでした。或ひは、業外にも、そんなところに日本文學の系列、滿洲文學の系列、それらの綜合としての系列といふものが、こつそりかくれてゐるやうな氣もされるのです。

この書間の往復を読む讀者が、千葉縣御宿の海岸と、新京寛城子をつなぐ線の、非常に近く親しいものであることを感してくれるやうにと、僕は先づ念願したいのです。同時に、このやうな企てが、日本と滿洲との間ばかりでなく、日本と南方、南方と滿洲、そして作家といはずジャナリストといはず、他のさまざま階級、種族の人びとの間に繰返されることを、作家的興味としてでなく、同胞の名において希望したいのです。

お五ひに、知らん顔をし合ふ時代ではなくなつてゐるのでせう。さうなつてこそ初めて、寛城子で文學することも、さう珍奇なことでもなければ、難しいことでもなくなつてくるのではありますまいか。考へてみれば、文學者の心の交流といふものは、このやうな場合にもやはり

いちばん深く柔かなやうに思へますね。異民族との心の交流が、先づ文學者のひろく柔かな地の交流によつて開始されるといふことも、まんざらの夢とのみ片づけられぬ日が近づきつつあります。

貴兄と最後に會つたのが五月二十四日、次の日、僕ら家族はツバメで神戸へ、そこで一泊の上、大連鐵路の船客となり、二十九日大連着、三十一日のアジアで同日夕方、新京驛のホームに降りたことが出来ました。本當にゆつくりした、のんきな旅程でした。そしてその間、東京の知友たちとは大分離れた土地に、自分たちを見出すやうになつたのです。大分離れた土地とはいふものの、時間からいへばほんの「アツ」といふ間なのです。

「何處が異境だ」

ほんのちよつと、僕には信じられないやうな感慨が浮び、また苦笑めいたものも湧いた次第でした。

新京へ着いて匆々に、街で滿系作家の辭斎君に會ひ、しばらくの立話でしたけれども、お互ひの近況を知らせ合つたことです。

「古丁君は？」

僕の質問に答へて、この若い異國の文學者は微笑とともに答へてくれました。

「あひかはらず飲みながら、いつしよけんめい商賣してますよ」

この返答の親しさは、思はず眼を睜りたいほどだつた——そんな風に云つては、誇張も甚だしいとして、貴兄は笑はれるでせうか？

いえ、僕はここにも御宿の海岸と滿洲をつなぐ一線の近さ、親しさを感じて嬉しかつたのです。おそらく、この事情も、貴兄には分つて貰へることです。

人事、風土、異るところは異りながら、しかもその中に相似た魂の牽引の存在すること。それあつて、漸く僕らもほつと一息つけるわけでもあります。

寛城子の、ボポフの家の末娘について、おたづねでしたね。あの子は大きくなりました。そして顔つきに、どこかきついものが増え来ました。このごろ、彼女は近所のロシア人學校へ通つてゐるやうです。書齋の窓からよく見える赤煉瓦の建物で、ここではロシア人の子供たちと一緒に、鮮系の子供たちが仲よく勉強したり遊んだりしてゐます。

一度、ボボフの娘が勉強してゐる教室をのぞいてみたいと願ひながら、未だに果せずにおま  
す。日本のおとなの訪問客を、彼女はミゼ困却した、きつい眼でみつめることでせう。  
校庭の梅の葉がややくろすみ、しきりに南風に揺れてゐます。御自愛を——

(十七年六月・文藝)

## 蒙古民族とビルマ人

小田嶽夫君へ

小田嶽夫君

いつぞやは失敬しました。馴染みの君の書齋に久振りで坐つてふと君を見た時、君の髪の色が眞ッ白になつてゐて吃驚しましたが、一年見ぬうちに變つてゐたのは髪の色だけで、ビルマはわけでも暑いといふのに、顔色など目灼けどころか却つて白くさへなつて、しかもいくらか肥つて歸つてこられたやうに思はれたし、酒はあひ變らず強いし、甚だ意を強くしました。

お越ひした時ちよつと話しましたやうに、君が従軍されて聞もなく僕は北京に行く機会を持ちましたが、そろそろ蒙古風が吹きだした早春の北京の胡同を歩きながら、上海に去つて北京に既に秋澤三郎君がゐないことと、内地へ歸つて北京に對する感想を相繼ぎ打つて閉いて貰へる筈の君が従軍してゐることを、身にしみて寂しく思ひました。北京行をしまりに薦めて呉れたのは秋澤君であるし、北京についての知識を得たのはじつに君の「北京觀々」だつたからです。

ところで、ここいらで文學通信の本題にはいりますが、僕は北京から歸る早々「北京觀々」を再讀したので。そして、北京をよく寫してあることに改めて感動しました。殊に漢民族の正體を掴まうとして作者が努力してゐるところ、それから、周作人と饒僧孫とを掲ぎまぜてモデルにしたとかいつか君がいつて居られた向ふの知識人と、日本人の主人公たちとが、口角泡を飛ばして取交はしてゐる日支人の比較論を興味深く讀みました。書かれてゐる點に同感を禁じ得なかつたからです。これにつけても考へさせられたのですが、異民族を鏡にした時、一ぱん日本人の長所短所を含めての眞骨頂がハッキリ自省されるのではないかとはいふことです。

といふのは、僕自身、二度の滿洲の旅で妙ならずそれを痛感したので。そして、昂然たるものを感じたからです。

以上は前置きです。さいきん僕は岩波新書の「蒙古の旅」をじつに面白く讀みました。著者はハズルンドといふ丁林人で、昭和二年に瑞典人スヴェン・ヘディンによつて大々的に試みられた中央亞細亞科學探險にその一員として加はつた人物です。僕が惹きつけられたところは色々な部分にあるのですが、いま茲に取上げたいと思ふのは、蘇聯と支那とに挟み討ちにあつてゴビ沙漠を中心にして彷徨してゐる蒙古民族のことです。その中には成吉思汗の血を引いてゐる種族も残つてゐて、この種族などは未だに武器のひびきと野性とのみに生きてゐるらしいのです。つまり、儼然な原始性を昔のまま保持してゐるらしいのです。ハズルンドはいはばさういふ近代精神に缺かれた無垢な原始的精神に對する憧憬から、じつはこの興味ある探險記を書いてゐるのです。ところで、僕は何かで成吉思汗畫章なるものを讀んだ時も、蒙古民族のストイックなまでに素朴で強烈な原始的精神に非常に感動させられたものの、その一方に於て、この民族に教習が缺けてゐるのに不服を覚えました。そして、「蒙古の旅」を讀んだ時にも、ハズルン

Dの蒙古民族に対する感動はハッキリ分り、同感さへ禁じ得なかつたのですが、その弊、ヘマ  
 エンドの感動に最後まで一緒に附いて行けなかつたのは矢張りこの點でした。

僕は最初の滿洲の旅で熱河の喇嘛廟を訪れた時、契文字の四蔵語の經文を読んでゐた蒙古人  
 の喇嘛僧の風貌が、一人残らず日本人に酷似してゐるのに愕然としました。そのやうに、亞細  
 亞の民族の中で、氣質的にも日本人に一番近いのは蒙古民族ではないかと思ひますが、蒙古民  
 族が日本民族と違つて滅びたといふのは、じつにこの叡智を缺いてゐたからでないかといふ氣  
 がします。それと共に、叡智の代りに、小乘的な喇嘛教に陥ち込んだからではないかと考へま  
 す。そして、このことが甚だ惜しまれてなりません。

拙て、貴意を得たいことがあるのです。それはお逢ひした時酒になつてから、君はいろいろと  
 奈やビルマの珍らしい話を聞かして呉れましたが、民族の話になつた時、ビルマ民族の中には  
 移動して來た蒙古民族も混つてゐると君がいはれたことです。その蒙古民族がビルマでどんな  
 風に暮してゐるかが伺ひたいのです。今月の「文藝」を読むと、清水幾太郎氏が「ラングーン  
 日記抄」の中で、「バゴダを繞つて無數に並べられた粗末な佛像はどうだ。吾々が佛像に固執

のものとはばかり思ひ込んでゐるあの高さを全く缺いた、恐るべき甘い顔の行列。(中略)私は  
 不愉快を隠すことが出来なくなつた。豊田君の説明に依ると、私の不愉快は後れた民族に對す  
 る苛立たしさであると言ふ。さう言はれば、さうかと思ふが、それだけではない」といつて  
 ゐます。かういふ經驗は、僕なども滿洲や北支の喇嘛寺で屢々味はつたところのものです。清  
 水氏の文章から受ける感じでは、ビルマの佛像は喇嘛寺の佛像よりまだ酷いらしいですね。ビ  
 ルマに移動した蒙古民族は、暑い氣候のために矢張り佛像と同じやうに野性を喪つてしまつて  
 あるのでせうか。それとも、甘い顔した佛像のやうに虚脱してゐるのは、蒙古民族ではない他  
 の民族でせうか。亞細亞民族の原型ともいふべき、そしてこの民族のことを憶ふと野性が遺つ  
 てくるやうな思ひが少くとも僕にはする、この愛すべき蒙古民族のビルマに於ける姿が、かう  
 いふ姿であつてくれねばいいがとじつは僕は念じてゐるのですが、事實はどうなのでせうか。  
 一方、その事實を知ることが、日本民族の南方移住の問題についても他山の石となると思ひの  
 です。ご多用ちゆうのことと思ひますが、ちよつと時間を削ってお聞かせ下さい。

貴見酒君、御手紙拜見いたしました。此の間は僕が歸國した直後のことでもあり、大體其の南方談に絶好し、貴兄の北支、滿洲旅行談をほんの少ししか聞けなかつたのを後で大體珍念に存じました。僕の「北京圖々」が貴兄に再讀され、尙いくらかでも讀むに價する部分があつたらしいことは僕にとつては何と嘗つても喜ばしいことでした。

それはさておき、貴兄のお訊ねのことに移りませう。じつはこの御返事を書く前にあちらから持つて来た比較向くはしいビルマの歴史の本なども讀んで見たつもりでゐたのですが、時間の餘裕がなく、それも出来ませんでした。で、勢ひこれから書くこともあやふやになりまうですが、御かんべん下さい。

ビルマにゐた當時、ビルマに永くゐたある邦人が「バガンを見ずしてビルマを語る勿れ」と言つたことがあります。バガンとは、イラワジ河畔にある、ビルマ族がビルマをはじめて統一し（西暦七四二年）爾來五世紀にわたつて統治をつづけたバガン王朝時代の舊都であり、そ

の時代がビルマの最も黄金時代で、文化もよく榮えた關係からビルマ文化の華がいくらかはまだ殘つてゐる都なのです。ところが殘念なことに僕はこのバガンを知らないです。僕ばかりでなく、僕等の仲間の誰もが知らないのです。さういふ意味では今言つた邦人の言ひ方にしたがへば僕はずでにビルマを語るには失格者なのです。

清水鏡太郎君と同じやうに僕もビルマの佛像にはあいそをつかしたものです。佛教がさかんな國の佛像がそのやうでは他のことも大凡御想像がつくでせう。ところが、ビルマはいつもかうであつたか、見るに足る藝術が出来た時は無かつたかといふことになる、そのバガンを僕は知らないのです。

ビルマのごく大まかな歴史によると、バガン王朝時代は別として、概して他民族に支配せられたり、又他民族と死闘をつづけてゐるといふやうな、暗い、不幸な日にビルマは充たされてゐたやうです。つまり、バガン王朝以後は悪い時代の連続といふことになりさうです。そんなところから考へて、一がいビルマは駄目だと言つてしまつては、例へば清朝時代の陶器や詩だけを見て、支那の詩も陶器も大したものではないと結論するやうな途方もない過ちを犯すこ

とにたりはしないかをおそれるのです。

三四六

正直のところを言へば僕はバガンの文化にでもそれほど大きい期待をかけてゐるわけではな  
いのですが、それでも貴兄の言ふ散骨をそこに見ることだけでもさうかも知れないとは思つてゐる  
のです。

ビルマ族は蒙古族に属するといふことを僕はある本で讀みましたし、ビルマのある青年もさ  
う言つてゐましたから、蒙古族であるといふことは多分間違ひないのかも知れません。ともか  
く顔はこの國の人間よりもよくわれわれ日本人に似てゐます。ラングーンの町に澤山出てゐ  
る露店のなかにはビルマ人の老婆のやつてゐるものも可なり多いのですが、その露店の前によ  
てぶてしい面つきをして、ビルマ葉巻をくはへながらひかへてゐる老婆の顔を貴兄に一度見せ  
たいものです。彼女らの顔は例へば安達謙蔵老人とかあるひは某々とかいつたやうな日本の古  
い政黨人の誰彼にそっくりなものがあるのです。

貴兄はビルマ人が野性を喪つてしまつてゐるのか、虚脱してゐるのかと心配されてゐるが、  
その點については僕は聲を大にして「否！否！」と言つてもよいと思ひます。ビルマ人はその

かみの蒙古人のやうに今でも勇武を好む民族だと僕は思つてゐます。ビルマ人は刀を好みま  
す。ビルマ人には犯罪が多いのですが、そのなかには殺人や強盜が相常多いらしいのです。英國  
がビルマを支配してゐた當時英國はビルマ軍を印度兵やカチン（ビルマ内の種族）兵で組織し  
てゐて、ビルマ人は絶対に兵士になつたのですが、それも彼等の叛亂を恐れてのことです。  
た。ビルマの男子は概して、輪廓のはつきりした、男らしい、精神な顔をしてゐます。

サルウィン河の渡河の時ビルマ人の船員七人で、日本の兵士を發動機船で運んだことがあり  
ましたが、河の中途まで行つた時敵機が襲つて來て機銃掃射を浴せ、船員にも負傷者が出たら  
しいのですが、船は滞りなく進むので大した傷でも無かつたかと思はれてゐたのですが、船が  
對岸の河岸へ着いた刹那に、船長はハンドルを握つたまま、舵手は舵手の位置についたまま、  
船員のうち五人はがつくりと息を引きとつたのでした。さういふ美しさもビルマ人は持つてゐ  
るのです。

ビルマ人はその血のなかにまさしく亞細亞の野性をたぎらしてゐます。その點からも蒙古族  
にちがひはないと推測せられるのです。さうして蒙古人が喇嘛教に陥ち込んだやうに、彼等も

三四七

小乗佛教に陥ち込んでゐるのです。  
「般若のこと」それは僕が彼等に缺けてゐるのではなく、今までは彼等の内にねむつてゐたのであつてくれればいと念じてゐるのですが……。  
あまり長くなりすからこのへんで筆を止め、後は面暗にゆづりませう。

(十八年二月・早稲田文學)

康徳十年十月二十日 印刷  
康徳十年十月二十五日初版發行

(三、〇〇〇)

①定價 二圓八十錢

出協會員番號一〇〇三

著者 淺見 淵

發行者 株式會社國民畫報社  
東京特別市青森大路五〇三

印刷者 武者 彌三郎  
東京特別市青森大路五〇三

印刷所 軍援産業株式會社

配給元 滿洲書籍配給株式會社

淺見 淵  
滿洲文化記



企業承認番號い

發行所

新東京長春大街一一〇  
電話 三三八二  
振替 東京一一一〇

株式會社 國民畫報社



# 滿洲最高之作家陣

各册四六三十五頁前後 各二圓五錢・送料二十錢

## 最新刊 近刊

樺三著 アロー戦争	青木實著 北方の歌	山田健二著 娘々祭の頃	北村謙次著 心	日向伸夫著 凍原の記	工清定著 園花	大内雄著 滿洲文學廿年	青著 歐陽家の人々
阿片戦争、成吉思汗の作者が歐米亞歴史を香徹を以て描く	これ程滿洲農村の生きた姿と滿洲農民の心理をシツカリ描んだ小説が今迄に一冊もない	放送百回、著書五十餘種、滿洲一の童話のおぢさんが少國民に贈る近作集(二圓二十錢)	滿洲唯一の専門作家として名聲噴々たる著者の近作短編集	第一回滿洲文話會賞獲得の著者が指の乗り切つたその後の作品全部を網羅せるもの	我國有歌の大衆作家である著者の、古き時代の滿洲支那を舞合にした大衆歴史小説集	殉職たる義文の華映く建國十周年記念出版として、滿洲文學系作家中第一人者代表短編集氏生部大區賞、東京文學賞受賞作品編纂は大内隆雄の名評	

新電報 東京長春街一〇一〇番  
電話 三三〇一  
發行所 株式會社 國民畫報社